東日本大震災

2周年追悼

被災地支援職員の記録集

岩手県大槌町の仮設校舎から元気に下校する子どもたち
彼らの笑顔のために頑張っています！

箕面市

もくじ

はじめに

１．緊急消防援助隊　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　3

２．避難所支援・給水支援・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　49

３．保健業務支援・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　83

４．学校建設・営繕支援・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　145

５．戸籍事務支援・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　197

６．草の根支援・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　217

おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　255

はじめに

平成２３年３月１１日に東日本大震災が起きました。
亡くなられた方々、最愛の人を失われた方々に深く哀悼の意を表するとともに、始まったばかりの復興への道のりで数々の苦難に立ち向かわれている被災者の皆さまに心からお見舞いを申し上げます。

あれから２年。箕面市では、発災直後から職員を被災地に派遣し、支援を続けてきました。
これは、被害の大きさと惨状を目の当たりにして、いても立ってもいられず、少しでも何かできることはないかという気持ちはもちろん、いつ私たちが助けられる立場になるかわからないことを考えれば、地域として当然のことという気持ちもあります。そしてまた、本市職員が支援に携わるなかで災害対策について身をもって学び、箕面市の防災体制にも大きな経験の蓄積となるだろうという気持ちからでもあります。

箕面市は、大阪府や大阪府市長会が編成した支援部隊の一員として、岩手県をカウンターパートとして支援を行ってきました。なかでも、発災直後に現地に入った緊急消防援助隊の箕面市隊が岩手県大槌町で活動したことをきっかけに、大槌町を特別なカウンターパートとして支援を続けています。
大槌町では、町長を始め多くの職員が津波の犠牲になったこともあり、特に行政機能に混乱をきたしていたようです。支援に赴いた職員らから聞く被災地の状況は、１３万人の箕面市民の命を預かる身として、改めて深く考えさせられるものでした。真に住民を大災害から救うためには、私たち自治体は、そして自治体職員は、平常時から何をし、そして発災後何をすべきなのかと。
その強い想いの中で、箕面市でも防災改革に着手しました。台風などによる小規模な風水害中心の防災体制を抜本的に見直し、万一、大規模地震により行政が壊滅的な被害を受けても、助かる命を助けることができる地域防災体制を作り上げることをめざしています。
この２年間で、多くの市民の皆さまのご尽力をいただき、本年１月１７日には、本市で初めて、大規模地震を想定した全市一斉総合防災訓練を実施することができました。これを始めの一歩として、たとえ箕面市が東日本大震災レベルの大災害に見舞われても、一人でも多くの命を救うことができる防災体制を作り上げていきたいと思っています。

今回ここに、これまで被災地の支援に入った箕面市職員たちの、派遣直後の報告書、派遣から少し時間が経ってから書かれた手記、派遣中に現地の様子をリポートしたブログ記事やメールの一部をまとめました。

ここに記された職員らの体験は、その時そこにいられなかった多くの人の心を打ち、真の復興まで休むことなく支援を続けていかなければとの想いを改めて強くさせてくれることと思います。そして、もちろん箕面市も、これからも支援を続けていきます。

同時に、東日本大震災を教訓に、今後必ず起きるであろう災害に備えるための教材とすることで、箕面市の防災体制強化に全力で取り組んでいきたいと決意を新たにしています。

平成２５年(2013 年) 3 月
箕面市長　　倉　田　哲　郎

１．緊急消防援助隊

Contents

職員手記

消防本部　赤阪　浩二　（緊急消防援助隊第１次派遣　任務：消火隊）
消防本部　中平　陽之　（緊急消防援助隊第１次派遣　任務：消火隊）
消防本部　黒崎　徹　（緊急消防援助隊第１次派遣　任務：消火隊）
消防本部　宮下　正士　（緊急消防援助隊第１次派遣　任務：消火隊）
消防本部　宮原　将樹　（緊急消防援助隊第１次派遣　任務：消火隊）
消防本部　林下　幸祐　（緊急消防援助隊第２次派遣　任務：救急隊）
消防本部　稲尾　良明　（緊急消防援助隊第２次派遣　任務：救急隊）
消防本部　出口　哲　（緊急消防援助隊第２次派遣　任務：救急隊）
消防本部　黒河　博幸　（緊急消防援助隊第６次派遣　任務：消火隊）
消防本部　後藤　実　（緊急消防援助隊第６次派遣　任務：消火隊）
消防本部　広田　大造　（緊急消防援助隊第６次派遣　任務：消火隊）
消防本部　西川　順喜　（緊急消防援助隊第６次派遣　任務：消火隊）
消防本部　松浦　光洋　（緊急消防援助隊第６次派遣　任務：消火隊）
消防本部　依田　崇　（緊急消防援助隊第６次派遣　任務：救急隊）
消防本部　山口　慶太郎　（緊急消防援助隊第６次派遣　任務：救急隊）
消防本部　黒木　達明　（緊急消防援助隊第６次派遣　任務：救急隊）

職員手記
消防本部　赤阪　浩二　（緊急消防援助隊第１次派遣　任務：消火隊）

東日本大震災により亡くなられた方々のご冥福をお祈り申し上げます。また、被害を受けられた皆さまに１日も早い復旧・復興を心よりお祈り申し上げます。

平成２３年３月１１日（金）午後２時４６分頃、東北地方の三陸沖を震源とする地震が発生し、その後、津波により甚大な被害が出ているニュースを消防署の事務所で見ました。ひょっとしたら、緊急消防援助隊の要請が来るかもしれないと思い、通常業務と平行して、後輩らとともに緊急消防援助隊用資機材を確認し、出動に備えて車庫へ運びました。

その後、大阪府北ブロックの代表消防本部である高槻市消防本部から出動可能隊数の調査があり、上司の指示の下、要請された場合の出動人員の調整と休暇者への連絡を行っているなか、ほどなくして万博公園東駐車場に午後８時３０分集合との出動要請が来ました。

上司の命令で私、赤阪以下５名の出動隊員が決定し、約１時間３０分の間に人員の補充、当務員及び警備課員の協力を得ながら資機材の積載、食料品の調達等を同時進行で行い、準備が整いました。この時、私は１６年前の阪神・淡路大震災の遺族であり、「私と同じ辛い思いしてほしくない。なんとしても、被災された方を助けたい。」という強い思いがありました。この気持ちを抱きつつ、箕面市消防本部を後にして集合場所に向かいました。

万博公園東駐車場では大阪府内の各隊が集結してきており、大阪市消防局（指

揮隊）から「大阪府隊は、車列を組んで東京方面へ向かう。」との指令を受け出発しました。

名神高速から東名高速を乗り継ぐなか、幾度かの給油と指揮隊からの情報提供・指令があり、隊員皆に、大阪府隊の一員で箕面市消防本部の消火隊としてこれから被災地へ赴き、活動するんだという士気が感じられました。

ここで是非、記述しておきたいのですが、足柄サービスエリアで、山崎製パンの運送トラックの運転手さん（名前不明）に出会い、話を聞くと「東北方面へ製品を届ける予定でありましたが、地震により首都高速が通行止めとなり、納品不能となったので、消防さんが現地に行かれるのなら是非、このパンを必要なだけ持って行って役立ててください。」と言われました。この運転手さんの判断にせよ、本社からの通達にせよ、大変すばらしい企業姿勢であると感じるとともに被災地に赴く我々にとっては、大変心温まる言葉であり、この思いに答えるべく、道中及び被災地にてすべて活用させていただきました。山崎製パンの運転手さん、本当にありがとうございました。

さて、大阪府隊は、出発から２日後の３月１３日午前３時３０分頃、野営地である岩手県遠野市運動総合公園に到着しました。

その後、ミーティングにより指揮隊から指令を受け、消防車内にて仮眠をとったあと午前８時４０分、各部隊に分かれて同公園から釜石市内にて活動すべく出発しました。緊急走行しながらの道中、釜石市街へ入ると、通行する人々が皆、車列で走る消防車両に向かって、頭を下げ、合掌やお辞儀をされる姿が

とても印象的で、ここでまた一層、こちらの方の思いに応えねばという強い使命感が沸きました。

本隊は、釜石市内の被災地区に消防車両の活動スペースがないということで、途中の中継地点で、人員搬送バスに乗り換えて、市内の中心部に到着しました。

釜石市役所付近では、津波により町全体が壊され、道路には、がれきが散乱している状態で、本隊は、北ブロックの消火隊と合同で、がれきを除去しながら人命検索活動を行いました。

ある一人の男性から地震前の住民の情報が得られたため、その情報をもとに１階部分が損壊している民家を検索し、１体のご遺体を発見し、安置場所まで搬送しました。また、検索中、余震が発生し津波警報が出たため、一時高台に待避し、解除を待ったあと、再び検索をしましたが、残念ながら生存者の発見までには至りませんでした。

日没になって活動が終了し、野営地へ引き揚げました。その日は、午後１０時頃に大阪府隊ミーティングがあり、翌３月１４日の活動場所の指令を聞いたあと、消防車内で仮眠につきました。

３月１４日午前５時３０分起床、ミーティングの後、当日の活動場所は、釜石市の北隣に接する大槌町という町で、まだ手つかずの状態であるとの情報でした。釜石市内から山道を走行して、途中、津波で半ば潰された５階建の団地２棟を横目に見て、大槌町に入りました。少し小高い道路から町を臨むと、「えっ、これは、」と目を覆いたくなるような悲惨な光景が広がっていました。

町と思える地域全体が広範囲に根こそぎ津波で潰され、線路のレールも土台から彎曲・断線、町全体は灰色をしていました。阪神・淡路大震災当時の被災状況を見てきた私でさえ、これは、もう阪神・淡路のレベルどころではないと感じました。

本隊は、大阪市消防局の各区の救助隊と大阪府内の各消火隊の班構成で、担当区域の検索を始めました。壊れた線路を跨ぎ、土手の上を進むと、この付近は、強い熱で燃えた形跡がありました。救助隊員の示す位置を見るとそこには、一見しただけでは、判別のつかないご遺体が横たわっていました。

発見位置を救助隊長が指揮隊へ無線発報し、マーキングして先の検索に進みました。

前日の釜石市内の活動とは違い、道路と民家の境界も見えず、民家の殆どは、基礎部分しか残っておらず、そこに潰れた家屋や家財のがれきが重なり、あちこちで海水が溜まり、足の踏み場のない状況でありました。そこでの検索は思うように進みませんでした。

この時、無線に別の隊から、「軽自動車内に母子の遺体発見」の情報が流れ、なんとも悲しく悔しい思いがしました。

先に進むと、基礎部分だけが残る民家の一角に鉄筋コンクリート造２階建ての診療所と思われる建物がそのままの状態でありました。救助隊員とともに屋内進入すると、内部は手のつけようもないぐらい家具類、家財が散乱、通路も塞がっていました。落下しそうなガラスを避け、障害物を除去しながら１階から２階にかけて各部屋を検索しましたが、人の気配はありませんでした。このときも数回、余震があり、万が一、津波が来たら逃げ場のない状況であったため、大変、緊張した活動となりました。診療所の検索を終了して、引き続き午後４時２０分頃まで担当区を検索しましたが、生存者の発見・救出には至りませんでした。

その後、大槌町の集合地点に戻り、到着したばかりの大阪府隊第６次隊と対面式を行い、申し送りをしたあと、野営地である遠野市立緑峰高校（運動総合公園から急遽変更）へ引き揚げました。北ブロック代表である高槻市消防本部の後方支援隊から大阪府隊第１次隊の解散・引き揚げの指示を受け、本隊は、第６次隊に車両と資機材を託し、３月１５日午前０時３０分に高槻市・豊中市消防本部のバスに分乗して、帰阪の途に着きました。東北自動車道から磐越自動車道、北陸自動車道を経由し、名神高速道路にて、２３時００分に箕面市消防本部に無事帰署しました。

緊急消防援助隊の大阪府隊の一員として出動し、消防人生で貴重な経験・勉強をさせていただけたこと、また、消防本部・署で心配しながら帰りを待ち、

支えてくださった職員の皆さまに大変、感謝しています。本当にありがとうございました。

最後に私は、前の阪神・淡路大震災にて実家が全壊、両親と妹が倒壊家屋の下敷きとなり、近隣住民に救出されるも、母が死亡、その後、消火隊として神戸市兵庫区の兵庫消防署へ派遣されました。あれから１６年という長い年月が経過し、今回、緊急消防援助隊として派遣させていただけたことで、亡き母への供養にでもなればと思います。

これから先、大規模災害は、決して起きてほしくありませんが、万一起きた場合、常に出動できる体制づくりへの寄与と心の緊張感をもって引き続き、勤務・精進してまいります。

職員手記
消防本部　中平　陽之　（緊急消防援助隊第１次派遣　任務：消火隊）

震災があったこの日、私は普段通りに職場に出勤し、近々署内で開催される警防技術錬成会の訓練に励んでいました。訓練をしていると場内に放送が入りました。「地震が発生しました。訓練を中止してください。」その時は、まさかこんな大規模な地震が発生しているとは微塵も感じませんでした。しばらくの間、訓練を中止し待機していると、各隊はすみやかに帰署するようにとの指示を受け、私のチームは指示に従い帰署しました。

帰署後、事務所に戻ると事務所内は慌ただしい雰囲気になっていて、そこで今回の地震はただ事ではないと感じました。情報収集のためテレビを見ていると、そこには映画の中でしか見たことのないような巨大な津波が町を襲っていて、私は一瞬自分の目を疑いました。

まさか日本でこんな大規模な災害が起こるとは想像もしていなかったからです。

もしかしたら緊急消防援助隊の招集がかかるかもしれないということで、私たちは出動の準備をし始めました。準備をしていると事務所に上がるよう指示を受け、そこで正式に出動要請がかかったことを知りました。当直責任者から１次隊のメンバーが発表され、私の名前もその中に含まれていました。私は消防士になって１年目である自分がメンバーに入るとは思っていなかったので、活動の機会をいただけたことに感謝しつつ荷造りを始め、大阪府隊の集合場所である万博記念公園の駐車場に向かいました。

大阪を出発してから約３０時間後に、目的地である岩手県に到着しました。到着したのはすでに夜中だったので、その日は活動することなく次の日にそなえ仮眠をとることになりました。

朝になりその日に活動する場所

が釜石市に決まり、現地に行くとそこは自分の想像を遙かに超えた状況になっていました。テレビで見る風景と現地で見る風景はまったく違うもので、とてつもない衝撃を受けました。

私はその被災した風景を見ることによって、被災者を救えるのは私たちしかいない、被災者のためにも頑張らなければいけないという気持ちが強くなり、今まであった緊張や不安がなくなりました。

実際に活動が始まると、私たちは人命検索に従事しました。瓦礫を１枚１枚どけていき要救助者を捜しましたが、瓦礫の多さで前に進めず思っていたほど活動ができませんでした。この時、私は自然の力の前では私自身の力など無力であることを痛感しました。

翌日は場所が変わり大槌町へ行きました。大槌町でも前日と同じ人命検索に従事しました。大槌町は町ごと津波に流されていて、建物らしい物がほとんど残っておらず、瓦礫しかない状態で釜石市よりひどい状況でした。その中で要救助者を捜すのに全力を尽くしましたが、要救助者を捜し出すことが出来ないまま活動は終了しました。結局この２日間で私たちは要救助者を捜し出すことが出来ず悔しい思いをしました。そして、私はもっと現地にいて被災地のために活動したかったという気持ちを持ちながら大阪に帰りました。

今回の派遣を経験して日々の訓練では得ることのできない、数多くのことを学ぶことが出来ました。近年起こると言われている東海・東南海・南海大地震が起きたときには、今回の派遣で経験したことを活かして、被災者の命を救いたいと思います。また、今回の派遣で、消防士としての技術や経験が少ない私を人選していただいた上司の方々には感謝の気持ちしかありません。今回の派遣に行きたかった職員が多々いるなかで、行かせてもらえたことに感謝しながら、これからも消防士としての仕事を頑張っていきたいと思います

職員手記
消防本部　黒崎　徹　（緊急消防援助隊第１次派遣　任務：消火隊）

はじめに、このたびの東日本大震災で亡くなられた方々のご冥福をお祈り申し上げるとともに、被災地が一日でも早く復興されることを願っております。

地震発生時、私は救急出動による活動中で、揺れには全く気付きませんでした。ただ、救急車積載の携帯電話に、今まで聞いたことのないメールの着信音が数回鳴っていたため、不思議に思っていました。傷病者を病院搬送後、メールを確認したところ、「地震警報発令、区域日本全域」の様な内容だったと思います。発信元もよく解らなかったため、地震の訓練が実施されているのかと思い帰署後に確認することにしました。

午後４時前に署に戻ると、受付にいた職員から「大きな地震が発生し大変なことになっている。通信指令室のモニターでテレビ放送を見ることができる。」と聞き、急いで通信指令室に駆けつけると、真っ黒な津波が海岸近くの農地をばく進し、全ての物を飲み込んでいる映像が映し出されていました。

にわかには、その映像が現実のものとは信じられませんでしたが、緊急消防援助隊の要請がかかる可能性があるため、準備にかかるようにとの指示があったことで、現実に発生している災害なのだという認識が湧いてきました。結局、午後６時半頃に消火隊の機関員としての出動指令があり、あわただしい出動となりました。

道中は名神高速から東名高速、建設中の新東名高速、東北自動車道と乗り継ぎ、２人で運転を交替しつつ３０時間をかけて、出発より２日後の１３日午前３時３０分頃に野営地である遠野運動公園に到着しました。到着前は睡魔との闘いだったの

で、無事に到着できた事に安堵したのも束の間、そのまま車中で３時間ほど仮眠し、午前６時半には起床して出動に備えよ、との指令がありました。

活動初日(１３日)は、釜石市においての人命検索活動との指令があり、野営地から被災地近くの集結地点へ消防車両で移動後、バスに乗り換えて被災地に入りました。活動地点に近づくにつれて、津波による建物の破壊状況が激しくなり、トンネルを抜けると、周囲一帯全ての物が破壊し尽くされて押し流され、うずたかく積み上げられている状況に息を呑みました。人力で一体どれほどの活動が出来るのか不安を覚えましたが、同時に早く検索活動を開始したいとの思いを強く持ちました。

活動場所は釜石市の市役所周辺で、住宅は破壊されているものの原形を留めており、道路は家財や車両、建築材などで溢れている状態で、津波が押し寄せた最終到達地点であることが想像できました。

初めは道路上の瓦礫を路面が見えるまで、手当たり次第に人力で移動させていましたが、次第に付近住民から行方不明者の情報が入り、該当する住宅内の検索に移行しました。夕刻の引揚げ指令までに、当該地区の活動隊全体で数体

のご遺体の発見に至りました。避難所である学校にご遺体を搬送する時、担架に集中している周囲の被災者の視線を全身に感じ、生存状態で救出できなかったことが申し訳なく、とても顔を上げる事ができませんでした。

活動二日目(１４日)は大槌町での人命検索活動を指示され、大阪市消防局の救助隊と箕面市消防本部を含む複数の市町村の消火隊で小隊を編成し、担当区域の検索を実施しました。海岸に近い立地のためか、前日の釜石市とは状況が異なり、ほとんどの住居は基礎だけを残し跡形もなく消滅し、津波による泥に覆われていました。

海水により浸水している地域や、火災のため焦土と化した地域もあり、生存者が存在する可能性は著しく低いと思われ、絶望的な気持ちになりました。その後、瓦礫の隙間や変形し埋もれた車両、形を保ったまま流された住宅の２階部分の内部などを探しましたが、やはり生存者の発見には至りませんでした。

夕刻になり活動を終了し、自隊の消防車両を運転し野営地まで引揚げる際、燃え続ける山火事による煙で極端に視界が悪く、焦げくさい臭いと暗闇の中、ヘッドライトに映し出されるものは、約２０メートル前方までの瓦礫の山とそれをかき分けた道のみで、非現実的な光景に恐怖に似た感情を抱きました。

野営地に戻り、指令内容が錯綜するなか、深夜０時頃に大阪への引揚げが決まりましたが、あと数日は人命検索を続けたいという思いと、引揚げ指令に安堵する思いが入り混じりながらの帰途となりました。

今回の緊急消防援助隊としての活動は、私にとって大変貴重な経験となりました。この経験をふまえ、近い将来発生が予想される南海・東南海沖地震や直下型地震に対して十全に備える事が、私たちに課せられた使命であり任務であると考えています。

職員手記
消防本部　宮下　正士　（緊急消防援助隊第１次派遣　任務：消火隊）

平成２３年３月１１日、私は緊急消防援助隊大阪府隊第１次派遣のタンク車機関員として派遣を命じられました。同日１９時４５分箕面市消防本部を出発。集合場所である万博公園へ向かいました。２０時４５分、派遣先が確定しないまま関東方面に向かうこととなり、名神高速道路で隊列を組み東へ向け出発しました。

３月１２日深夜、東名高速道路の静岡から東側が津波警報のため通行止めになり高速道路を降りることになったが、一般道を地元である静岡市消防局の先導で走行し、次いでまだ舗装されていない建設途中の第二東名高速道路を道路公団車両の誘導により走行、朝には再度、東名高速道路に乗り、足柄サービスエリアに至ったところで派遣先は被害の甚大な東北地方と聞かされ、気持ちを入れ直しました。サービスエリアでは、山崎パンの１０トントラックが首都高速通行止めのため配達出来ずに停車しており、運転手さんから「自分たちはこれ以上進むことができないので、このパンを役立ててほしい」と言われ、その気持ちに感謝しつつ東名高速道路を出発、さらに首都高速でも道路公団車両に先導され、東北自動車道を北上しました。

東北自動車道は地震により道路がずれたり段差が出来た状態で通行不可能であったものを、道路公団が１２日には通行可能な状態までに応急修理した道路を走行しました。

また通行止めをしているはずなのにサービスエリアでは我々緊急消防援助隊のために営業していたり、平泉前沢サービスエリアでは停電中の真っ暗な中にも関わらず、うどんとおにぎりを作っていただくなど、それぞれの方の気持ちが伝わり、本当に元気を与えられました。

３０時間後の３月１３日３時３０分頃、遠野市消防本部の誘導により遠野運動公園に到着。ここへ到着するだけでも数多くの人の協力により無事到着出来た事を感謝しつつ、高まる気持ちを抑えて朝から始まる捜索活動のため車内で仮眠をとりました。

朝、我々とともに大阪を出発し疲れているはずの後方支援隊が早朝から用意してくれた朝食を摂り、釜石市へ向け隊列を組んで出発、走行中沿道の子どもからお年寄りまでが我々に手を振ってくれたりお辞儀や合掌までしてくれ、期待の大きさと任務の重要性を感じるとともに、力の限り活動することを誓いました。

集結場所には警察や自衛隊も到着していました。捜索箇所である山向こうの市役所へ至る道は津波により寸断されており、民間の路線バスに乗り峠を迂回して市役所前に着きました。

我々が捜索する箇所は津波の終着地点のようで瓦礫や車が押し寄せて家の中に入り込んでおり道路も瓦礫の山の状態でした。瓦礫を手でどけつつ生存者を捜索中、現地住民の方が、「あそこの家のおばあさんが避難所にも来てない」と言われ捜索を継続しました。

捜索途中、津波警報が出たので、高台にある津波避難所へ避難したのですが、津波避難所から海まではかなりの距離があるのに高台の下まで津波が押し寄せていました。

この場所より後ろは避難所である小学校と通って来た道路しかなく市街地全てが津波により被害を受けたようです。

津波警報が解除されるまでの間、おばあさんと先ほどの住民の方としゃべっていたのですが、おばあさんは「私は子どもの頃、津波が来て母親におんぶされて逃げた。」と言っていました。ま

た、津波に流されこのあたりで引き波が来る前に助けられた人は、体がずぶ濡れでがたがたと震えていたと聞きました。避難中にも「いきてたんか」と泣きながら抱き合っているのを見ると被害の大きさを感じました。

津波警報が解除され、日没まで捜索を再開しましたが、残念ながら生存者は発見できず、釜石市を後にしました。

運動公園に帰ると、後方支援隊がテントと食事を準備してくれて、３泊目でやっと体を延ばした状態で寝る事が出来ました。

捜索２日目の大槌町の捜索担当区域は津波の引き波で何もない状態でした。夕方まで捜索を行いましたが、生存者は発見できませんでした。夕方に到着した交替の第６次派遣隊と対面し、活動の引継ぎの後、大槌町を引き揚げ、その夜に我々第１次派遣隊は岩手県を後にしました。

大阪への帰署途上、箕面市消防本部の所属職員から託された思いや岩手県の現地へ至るまでの懸命な道路復旧、案内、食料の提供など多くの方からの支援を受けたことを思いながら、自分達のできることは全力を尽くしたと自分自身に言い聞かせ、第６次派遣隊の無事を祈願しました。また、派遣された隊員は言葉少なく、流れる車窓を見て、震災の驚異を現実として受け止めるとともに、被害を受けたすべての方々が一日でも早く復興して、震災前のあたりまえの生活を取り戻すことを願っていたと思います。

今後、あってほしくないことですが再度、派遣される事があれば、今回の経験を生かし箕面市の消火隊、救急隊のみでなく大阪府隊との連携を強化すべく努力し、緊急消防援助隊として最大限の力を発揮できるよう日々の訓練等に励む所存です。それが私に課せられた使命だと思います。

職員手記
消防本部　宮原　将樹　（緊急消防援助隊第１次派遣　任務：消火隊）

私は３月１１日に発生しました東日本大震災の緊急消防援助隊１次隊として岩手県に派遣されました。

発生当時、私は勤務中でしたが緊急地震速報が流れ職場のテレビがつけられ吸い込まれるように見ていると東北地方が津波で悲惨な事になっていました。そして第１次隊の派遣が決まり、私はその隊員として行くことになりました。決まったときは恐怖心や不安というよりも一人でも多くの人を助けようという気持ちでいっぱいでした。それから緊急消防援助隊の消防隊員としていくからには少しでも被災者方の役に立ちたいという思いがありました。

出発し、移動中のテレビやラジオでは地震や津波のことばかりで緊張感がありました。そして、近づくにつれ地面がひび割れていたり、建物の屋根が崩れ落ちていたり、停電していたりとさらに緊張感が増していきました。

実際に岩手県に到着したのは１日半後でした。岩手県に入り、活動現場まで向かっている途中、被災者の方々が消防車や救急車を見て手を振ってくださったり、おじぎをしてくださっている姿を見て、今、被災者の方々を救えるのは私たちしかいない、全力で臨もうと思いました。

そして、現場に到着し最初に見たときはテレビで見たような津波が本当に来たんだと圧倒されました。建物のほとんどが倒壊し、車は流され、町は形を失っていました。活動も大量のがれき等があり思うように進みませんでした。

翌日は、大槌町へ向かいました。

大槌町は前日に活動した釜石市とは違い津波で全部流されてしまいほとんど何もなく想像していたよりもひどい状態でした。私はその現場を見たときまるで別世界のようにも感じました。そんな中活動をしましたが、人を助けることはできず悔しい思いが残りました。２日間の活動でしたが一人も救うことはできず人命救助の大変さ、難しさを改めて思い知らされました。

私は消防職員として経験は浅いですが、この東日本大震災の緊急消防援助隊として派遣され、私にとってとても良い経験ができ、そしてとても多くのことを学びました。いずれ、日本で東南海・南海地震という大地震が発生するといわれていますが、その時にはここで経験したこと、学んだことを無駄にせず、一人でも多くの命を救いたいと思います。そして、これから先、後輩として入ってくる消防職員に３月１１日に起こった東日本大震災のことを伝えていきたいです。

職員手記
消防本部　林下　幸祐　（緊急消防援助隊第２次派遣　任務：救急隊）

“あの日”私は、出勤のためいつもどおりに身支度をし、翌日の予定を家族に話しながら家を出ました。その時は、何事もなく帰宅出来ることを信じていました。

“あの日”の午前中は訓練を行い、午後からは、救急隊の機関員（運転手）として業務につきました。午前から休むことなく業務をしていましたので、病院を引き揚げる際に「今日は、早めに食事をすまそう。」などと隊員同士で話しあっていた矢先に、隊員が所持している携帯電話で「緊急地震速報」をけたたましい音とともに受信しました。救急車を運転中で揺れも感じなかったので、特に気にすることもなく消防署に戻りましたが、通信指令室のモニターに映し出された映像を見て、現実に起こっていることなのか判断できませんでした。

その時から、署内の雰囲気が慌ただしくなっており、自身も緊急消防援助隊の派遣隊員に選ばれ出場するまでの時間は、今まで味わった事がないような緊張感を覚えました。

集合場所の万博公園東口駐車場に到着した時には、府下から集まった多数の消防車や救急車が到着しており、午後１０時３０分、行き先が東京方面というだけで約３０台の消防車両が隊列を組んで出発し、名神高速道路から東名高速道路に入り午前３時頃、浜名湖ＳＡに到着、極度の緊張と興奮で全く疲れや眠気を感じず、ひたすら高速道路を東へ走りました。その間も、ラジオからは“陸前高田市が壊滅状態”や“仙台市の砂浜に百体以上の遺体”等のニュースが流れ、被災地の状況が想像出来ない状態で運転をしていました。

１２日正午、昼食休憩のため入った神奈川県の足柄ＳＡで、大阪府隊の活動地が岩手県に決定すると、早く被災地に入って活動したい気持ちとは逆に、東北自動車道は地震で道路が地割れしており速度を落とさざるをえず、野営地の遠野運動公園に到着したのは、出発して約３０時間後の午前３時になっていました。

それから、数時間、救急車内で仮眠をとりましたが、極度の疲労感と睡魔が襲い狭い車内で意識が無くなるように眠りました。

活動地の釜石市に入ったのは午前７時頃で、本隊は小佐野出張所での救急活動を命じられ、釜石市鵜住居地区へ救急出場しましたが、その時に初めて見た被災地の光景は一生忘れることはできないと思います。全ての家屋は押し流され団地の３階部分まで浸水した形跡があり、敷地と道路の境もなくなり、どこをどう走ったらいいかわからない状況になっていました。

結果的に救急活動は、この１件だけに終わりましたが待機中に他隊から続々と入る無線は、ご遺体発見の内容ばかりで絶望的な気分になりました。

しかし、比較的被害が少ない場所では、地元住民の方が協力して片づけをされていたり、停電で信号が機能していなくとも緊急車両を優先してもらったり、被災地からの引き揚げ時、長い車列に向かって手を振ってもらったりしている姿を見ると、町に秩序と活気があるように思えました。

わずか２日だけの活動で交代することになり、被災地のためにもっと活動をしたいと思っていましたが次の派遣隊員に思いを託し現地を引き揚げました。５日ぶりに家族の顔を見て、風呂に入り布団で体を伸ばした時、普段の何気ない生活に感謝するとともに被災地の方々に申し訳ない気持ちになりました。

最後に、今回の災害は未曾有の大災害になりましたが、幸いにも地元の方々は冷静に行動し、協力して困難を乗り越えようとされていました。私達援助隊が被災地で活動したのは、発災から２日目の朝になりました。釜石市や大槌町は救助活動や支援活動が手つかずの状態でしたが、地元の方々は、援助が届かなくても自分たちで出来るだけのことをされており、あらためて「自助」「共助」が重要であるということを身をもって知りました。

今回経験したことは、過去の思い出にするのではなく、“あの日”あったことを教訓に今後活かしていかなければならないと感じています。

職員手記
消防本部　稲尾　良明　（緊急消防援助隊第２次派遣　任務：救急隊）

私は、平成２３年３月１１日の地震発生時、西分署において近々消防署内で開催される警防技術錬成会に向けて訓練に励んでいました。安全管理のため、訓練棟の３階に上っていた先輩が下りてきて、「今さっき、立ちくらみがしたわ。」と言ってきたので、「年ですね。」などの冗談話をしていたところ、「地震が発生しました。訓練を中止してください。」との庁内放送が入りました。この時は、揺れを感じなかったし、自分には全く関係ないことだと軽視していました。

上司の指示により、西分署から本署に帰署した後、目に入ってきたのは、通信指令室にあるモニターに、車が津波に押し流されている映像でした。まるで、作り物のセットに置かれたミニカーが水に流されている映画のワンシーンを見ている様な非現実的なものに思われました。

続いて事務所に目を向けると、慌ただしい雰囲気になっており、「緊急消防援助隊に出動出来る車両台数の返答はどうします。」「出動人員はどうします。」などの話が飛び交っていました。そんな状況を目の当たりにしているのに、それでも自分は「夢を見ているんだ。」と自分に思い込ませ現実逃避していました。

夕方には、本署職員全員が事務所に集められ、緊急消防援助隊に出動する車両及び人員の発表があり、自分は救急隊での派遣が決まりました。この時、「やはり現実の出来事なんだ。」と自覚すると共に、モニターの映像を思い出し恐怖しました。

救急隊は、２次隊での出動となり、現時点では１次隊の出動命令しか出ていなかったので、１次隊の出動準備をしつつ、心の中では「悲惨な現場には行きたくないな。」なんて弱気なことを考えていました。

１次隊が本署を出発する直前に、２次隊も派遣が決定しました。「出動が決まればやるしかない。」と覚悟を決めるも、「被災地で自分は何ができるんだろう。」と不安感に襲われました。

集合場所の万博公園東口駐車場に到着し、次々大阪府下の各所属の消防車両が集まって来るのを見ていると、「こんなに大勢の消防職員の中で、自分が足手まといになったらどうしよう。」と更に不安感が増幅していきました。

午後１０時３０分、行き先が東京方面に決まり３０台近くの消防車両が隊列を組んで名神高速から東京方面に向け出発しました。暗闇の中、多数の消防車両が赤色灯を回しながら走るのを見ると、今までに見たことがないせいか異様な光景に見えました。

名神高速から東名高速、建設中の新東名高速、東北自動車道と乗り継ぎ、出発から２日後の１３日午前３時３０分頃に野営地である遠野運動公園に着きました。そのまま車中で３時間ほどの仮眠をとりました。もうこの頃には、「早く現場で役に立ちたい。」との思いが強くなっていました。

活動初日の１３日は、本隊以外に４台の救急車が釜石市の小佐野出張所に詰めることになり、救急出場がかかるまで待機となりました。その待機中に、出張所近くに住むご老人が「わざわざ大阪から来てくれたの。遠いのにありがとうね。」と言葉をかけてくれました。その言葉で、更に役立ちたいとの思いが強まりました。

しばらくすると、釜石市鵜住居地区への救急出場要請が入りました。現場に着くまでに車両の窓から見えたのは、全ての家屋が押し流され、残っている団地の３階部分には浸水した形跡があり、地面は道路がはっきりしないほど泥で埋もれている衝撃的な光景で、津波の恐ろしさを知らされました。

この救急の内容については記述しませんが、私が被災地で行った救急活動はこの１件だけで終わりました。

二日目の１４日は、大阪府隊の検索現場である大槌町に詰めました。車両を止めていた周辺は、海から離れている場所なのに、粉々になった家屋の瓦礫の

山となっていたり、川の中や高台の途中など意図的に止められない場所に車があったりと、初日の鵜住居地区で見た津波の跡より更に悲惨な光景でした。瓦礫の山などをよく見ると、結婚式や家族旅行で撮ったと思われる写真が散乱していたり、遠くでは必死に瓦礫をかき分け遺族の遺留品を捜している姿も見えたりして、泣きそうになると同時に自然災害に対して怒りが込み上げて来ました。

この後、交代で被災地を引き揚げることになりました。引き揚げの際、停電で機能していない信号機のある交差点では緊急車両を優先に通行させてくれたり、長い隊列に手を振ってくれる住民の姿を見ていると、自分が役に立てていなかったので申し訳ない思いで仕方がありませんでした。

今回の緊急消防援助隊では、ほとんど何もすることが出来ませんでしたが、被災地で見聞きして感じた良いところは今後起こりえる東海、東南海、南海地震、その他の大規模災害時に活かそうと思いますし、今回の様に大規模災害時に弱気にならないため、今以上に心・技・体を養いつつ職務に精進していきます。

職員手記
消防本部　出口　哲　（緊急消防援助隊第２次派遣　任務：救急隊）

今回の災害で感じたことは、まず被災地である釜石市に緊急援助隊大阪府隊として現地に到着したときに、住宅が津波により流され、乗用車が横転して川にはまり、阪神淡路大震災を上回る被害であることに言葉を失うとともに、目を覆いたくなる惨状が飛び込み、これは今までに経験のない災害で、身が縮む思いでありました。

被災地に入り、自分には何が出来るのであろうかと自問自答し、この被災現場において何をすべきか途方にくれましたが、同じ緊急援助隊大阪府隊として派遣された仲間との連携を強固にしていき、指揮隊長の命で統率ある行動が出来たことは、今後の所属の消防活動及び大規模災害の活動に参考になりました。

また、被災地の人々からは、歓迎の拍手や「頑張って下さい」との激励の言葉をかけてもらい、大阪府隊として何十時間も走行して現地に入って行き、今後の活動方針の見通しもたたないなか、当初は不安と何をすればいいかがわからず戸惑うことがありましたが、大阪府隊の仲間がいたことによって自分自身を奮いたたせ、指揮隊長の勇気ある判断・行動に勇気付けられ、自分が所属代表で緊急援助隊として選ばれたことに誇りを持ちました。

２日目に大槌町の被災地に現地入りしましたが、住民であろうと思われる人が、がれきをかき分け、必死に遺族の遺留品を捜している姿が印象的で、この被災地で自分達のできることを懸命に頑張ることが我々救急隊の任務であることを強く感じました。

また、現場には家族の写真等が散乱しており、ここには小さなお子さんのい

る家族が住んでいた様子が伺われ、何ともいえない感情が出てきました。今、現にこうして被災地で活動できることを、いかに感謝すべきことであるかを身にしみて実感し、とにかく希望を持って活動しようと思いました。

地震大国日本において、いつどこで自分自身の身に降り注いでくるかもわかりません。今回の一連の出来事は、「水・食物」、「資源・エネルギー」、「保証」を深く考えさせる出来事で、この未曾有の出来事で被害にあわれた方々には、励ます言葉も見当たらず、無力さを痛感しました。そして、被害にあわれた方々が元の生活に戻るには、検討も付かない状況だと思いますが、一日も早い復興を心から願ってやみません。

最後になりましたが、この貴重な経験を生かすため、後生に惨状のすべてを伝え、我々はいつくるかも分からない災害に正面から向き合い、仕事に邁進していきたいと思います。

職員手記
消防本部　黒河　博幸　（緊急消防援助隊第６次派遣　任務：消火隊）

東北地方太平洋沖地震の発生から二日後の平成２３年３月１３日、大阪府緊急消防援助隊第６次派遣隊として、岩手県大槌町に向け出発した。

被災地に向かう途中の東北自動車道に入ると、道路の亀裂、路肩の陥没等が目立ち始め被災地が近くなるにつれ徐々に景色が変わっていき、釜石市内を走行中に景色が一変した。建物は破壊され、道路に船や車が瓦礫の山になり、テレビ・新聞等で被害の甚大さは分かっていたはずなのに、一同驚愕したのを記憶している。１６年前の阪神淡路大震災にも派遣されたが、津波による被害は想像を絶する凄惨な光景だった。

先発している大阪府隊と合流できたのは、翌日１４日の夕方だった。明日からの活動に備え、現地での申し送り等を受けたが、隊員の真っ黒に汚れ憔悴しきった顔をみて活動の過酷さは察することができた。

次の日、中隊単位での人命検索活動が始まり、私の属する中隊は大規模な物販店舗の検索活動を行った。店舗の出入り口はすべて瓦礫で塞がれていたため、入れそうな開口部を確認しながら屋内進入した。店舗内も瓦礫の山だったが、特別な救助資機材は使用せず、とび口や弁慶などを使用しながら手作業により瓦礫を除去し、「誰かいませんかー、誰かいませんかー」と声をかけながら検索活動を行ったが、自隊は残念ながら生存者の発見には至らなかった。

結局、大阪府隊の４日間の活動で生存者の発見・救出は１名に留まったが、大阪の比ではない積雪や凍結に加え検索現場は、段差や釘など散乱し、更には余震等の二次災害の危険性のある悪条件下で、隊員は神経を張り巡らせての活動をしいられた。

またいつ終わるとも分からない活動であったため、隊員は身も心も疲弊したなかでの活動であったが、それを癒してくれたのは後方支援隊の献身的な活動であった。出場隊員の全てが後方支援隊に感謝していることと思う。

３月１８日の岩手県の復興宣言を受けて活動停止宣言が出され、明朝の１１時に現場引き揚げ指示が出されたが、「もっと出来る。」「まだ、帰れない。」とその場にいた誰もが思ったと思う、野営地から被災地の大槌町までの片道５０キロの道のり、消防車の車列を見れば通り過ぎるまで、沿道に出て来て頭を下げている被災者の方々の思いに応えられたかと、自問自答してみる。限られた時間の中、出来る限りの活動を実施したと、自分自身に無理矢理言い聞かせて荷物の整理をした。

我々消防職員は、常に助けられる側の気持ちを忘れてはいけない。そんなことを思いながら私の生活は、平常に戻っている。私が経験した岩手県での６日間を一生忘れることなく今後の消防活動に活かせることが、今回の震災で助けられなかった方々へのせめてもの償いだと思っている。亡くなられた方々に哀悼の意を表するとともに、被災地の早期の復興を願うばかりである。

職員手記
消防本部　後藤　実　（緊急消防援助隊第６次派遣　任務：消火隊）

私は、平成２３年３月１３日から２０日までの間、緊急消防援助隊大阪府隊の消火隊として、岩手県の釜石市と大槌町へ出動しました。

私は、地震発生当日、自宅にてテレビ等の報道番組による大規模地震及び大津波による被害状況が確認できました。尋常でない状況と大津波の凄まじい破壊力を目の当たりにし恐怖を感じたことを覚えています。緊急消防援助隊の派遣要請について東北地方と遠方ですが可能性があるため、参集を考え自宅で待機しました。

次の日、１２日に出勤すれば、すでに箕面市消防本部から二隊が派遣されたことを知り、早い対応に驚きました。「日本全国の消防隊」がこの災害に立ち向かう姿勢であると感じました。

１３日の１５時、万博公園駐車場に集合し緊急消防援助隊大阪府隊として出発。

目的地は「東北地方」と漠然的で、活動場所が山沿いか海辺かは不明でした。東北地方への道のりは遠く、大多数の隊行動であるため長時間の行程となりました。車中、テレビ等の報道番組での情景が思い出され、昼夜問わず活動するため、体力の温存と体調管理を第一に考えました。途上、ラジオやインターチェンジのテレビでは、想像を絶するような事態の報道が流れ、自分の体力と気持ちは耐えうるだろうかと不安でした。

１４日、実際に釜石市に到着し町並みを見たとき、あまりの壮絶な光景に驚き、自然災害の被害の甚大さに驚きました。また、地震発生から何時間も経過しているのに、まだ手つかずの場所も多く、大多数の大阪府隊でも人員不足のように感じました。さらに、道路脇は、倒壊し流され幾重にも家屋や車などが積み重なっており、今までに見たことも経験したこともない状況でした。

そのまま大槌町まで行き、先陣隊と合流するも日没のためベースキャンプに引き揚げ、資器材及び個人装備品の整理を行いました。

余震が頻繁に発生する中、１５日から１８日まで大槌町で活動を行いました。活動内容は人命検索でした。大津波による被害が著しく、津波発生時間等を考慮して、生存の可能性が高い大型スーパーマーケット周辺及び内部の検索活動を行いました。

二次災害の危険性が常にあり非常に緊張した時間でした。瓦礫を手で除き、声をかけて生存者を捜しました。日ごとに活動範囲を広げ、時間が経つにつれ家屋や瓦礫にペイントされた「検索済み」の印が目立つようになり寂しさを感じたことを覚えています。

私たちの隊では、生存者を救出することはできませんでしたが、大阪府隊として１名の生存者を確保することができました。最後のベースキャンプでの報告の時、派遣隊員４００人で喜ぶことができ、改めて団結感を感じました。緊急消防援助隊の派遣は、精神的にも体力的にも過酷でしたが、私自身「日本全国の消防隊」の一員になれたことを誇りに思います。

最後に、被災地での活動を考え心配してくれた職場の皆様、同派遣隊の皆様ありがとうございました。

職員手記
消防本部　広田　大造　（緊急消防援助隊第 6 次派遣　任務：消火隊）

被災地への派遣が決まった時は、被災地の助けになりたいと思うと同時に、今までにない経験と報道される状況や情報から予想のつかない現地の状況に対しての戸惑いとが入り混じった気持ちだった。

被災地に到着した時、目の前にはテレビなどで報道されているそのままの光景が広がっており、辺り一面が瓦礫の山であると同時に周囲の山の斜面に炎が燻っており、その光景にどこから手をつければいいのだろうと感じた。

到着の翌日から要救助者の捜索活動に従事したが、瓦礫の傍らに立つと一段と被害の凄まじさを感じた。活動を行う中で、次々に要救助者が発見されていったが、残念ながら生存された状態ではなく、目にする光景からも生存者の発見は難しいかもしれないと感じてしまう状況だった。

しかし、そんな状況の中、奇跡的に高齢の女性の生存者が見つかったとの情報を耳にした時は、他にも同じような状況で生存している方がいるかもしれないと感じ、なんとか生存者を見つけたいと、活動に一層力が入った。

活動を行っていると、他市の隊の中に私が消防学校に派遣されていた際の教官や同期生の姿を見つけ、一緒に訓練を行ってきた仲間が同じ緊急消防援助隊として、被災地で活動している事に心強さを感じた。捜索活動を行った夜、教官の元に挨拶に行くと他の同期の隊員も自然と集まってきて、それぞれの活動の事などを話した。

その時、教官がその日の活動内容を話してくれた。教官が「要救助者がいる。

」との情報を得て、現場に捜索に向かうと、そこには一台の乗用車があったそうだ。車両の中には要救助者の姿があったが、残念ながら既に亡くなっており、状況から恐らく親子だろうということだった。

そのご遺体の発見された状況は、運転席のご遺体がシートを倒し、後部座席の子供をかばうようにして亡くなっていたそうで、自然とその時の状況やその行動はどんな想いでとられたものだったのかと考えた。

親ごさんと思われるその方は、津波から逃げきれず、それでもなんとかわが子だけでも助けたいとその行動をとったのかもしれないし、死を覚悟してお子さんを抱き寄せようとしたのかもしれない、と教官は言われていた。

死に直面したその状況を考えた時、まだ小さいお子さんがどれだけ怖かっただろうか、そして、その状況の中でそれでもお子さんの事を想ってとられたのだろう、その方の最後の行動、その方の想いと無念さを思うと、悲しさがこみ上げてきた。その活動の話は耳に残り、今でもはっきり記憶に残っている。

この様な状況がいたるところであの震災の時に起こり、誰にも伝えられないたくさんの無念と悲しみがあったのだと思う。活動の中でその内の一つを耳にし、私は改めて亡くなられた被災者の方と被害の事を考えた。

緊急援助隊として私は、被災地の役に立つことが出来なかったと感じている。派遣されなかった消防職員も多くの方が、被災地の力になりたいと強く派遣を希望していた。そして、消防職員以外にも同じ想いを持っていた方は大勢いたと思う。たくさんの方が一人でも多くの人を助けたいという想いを持っていたが、それでも助けられなかった多くの方が亡くなってしまった。

災害は何の前触れもなく突然に襲ってくるし、どうしても防ぎきれない状況があるのも確かだと思う。しかし、このような大きな災害を経験し、その経験をもとにして防ぐ事が可能な被害もたくさんあるはずだ。今回の経験を無駄にせず今後に活かすためにも、被害や被災者を少しでも減らせるよう、私達一人一人が災害に対して考え、行動をとらなければならない。

職員手記
消防本部　西川　順喜　（緊急消防援助隊第６次派遣　任務：消火隊）

私は、震災２日後の平成２３年３月１３日から２０日までの間、緊急消防援助隊大阪府隊の消火隊として、岩手県の釜石市と大槌町へ出動しました。

私は震災があった日は非番日で、自宅で休息をしており、ふとテレビを付けた時、仙台空港が津波に襲われている衝撃的な映像が目に入ってきました。「日本で何が起きたのか。」と一瞬目を疑いましたが、すぐにテレビから次々と映し出される悲惨な映像で理解をしました。

そして、この大規模災害ならば、間違いなく緊急消防援助隊の招集がかかるかもしれないと直ぐに思いました。震災後、職場からの連絡もないため、職場も慌ただしくなっているだろうと思い連絡を待ちつつ、テレビ等の報道番組で被災状況を確認していました。

震災当日は職場からの連絡はなく、翌日１２日に出勤すると、職員８名が緊急消防援助隊大阪府隊として出動していた事を知らされました。

職場は思っていた通り慌ただしく、通常の箕面市での災害、救急の対応はもちろん、一次隊からの情報整理等に追われている中、二次隊の編成も同時並行で進んでいました。そして、二次隊のメンバーが発表され私の名前があった時は、一人でも多くの人を助けたいという気持ちと、テレビ等で報道されている悲惨な現場に行くという恐怖や不安の気持ちが入り交じっていました。

そして１３日、緊急消防援助隊大阪府隊が向かう東北地方までの道のりは遠く、現場での活動は過酷で長時間を予想されていたため、体調を万全にしておかないといけないと思い行動していました。

釜石市に入り景色が急に変り、周りの建物は津波により破壊され、車や船、瓦礫があちらこちらにあり、それはもう想像以上の光景でした。その一方で消防車が通る度、被災地の方々が深々とお辞儀をしたり、手を振ったりする姿を見ると、「頑張らなくては。」という思いがわき上がりました。

実際に活動を開始すると、人命検索は想像以上に過酷で瓦礫でうまく進むことも出来なければ、要救助者を捜す事にも障害になりました。大雪による悪天候が続いたため、二日間しか現場で活動する事が出来ず、また生存者を捜し出す事が出来なかったので非常に悔しい思いをしました。岩手県が復興宣言し、緊急消防援助隊が解散になった際、誰もが「まだ活動出来る。」と思っていたのではないか。まだまだやりきれない思いを胸に岩手県を後にしました。

今回の東日本大震災の写真や映像は数々あると思いますが、私は写真や映像では伝えられない事を自分の目で見てきました。これから次々と入ってくる後輩職員にもその事を伝えていけたらと思っています。そして、緊急消防援助隊での経験をこれからの消防人生で大切にしていきたいです。

職員手記
消防本部　松浦　光洋　（緊急消防援助隊第６次派遣　任務：消火隊）

私は東日本大震災発生時、１週間後に署内対抗で行う予定であった警防技術錬成会の訓練に励んでいました。地震発生から約４５分を経過した頃、ある上司から「東北地方が地震と津波で大変なことになっている。」と聞かされ、すぐにテレビを見ました。その時、テレビから流れる被災地の映像を見た瞬間、「これはただごとではない。緊急消防援助隊の現在の決まりでは、大阪部隊の派遣範囲は東京までとなっているが、これは出動命令がかかる。」と思い、訓練は即座に中止して、私は非番日であったことから自宅に帰り待機しました。

その間、たくさんの後輩から「出動命令はかからないのですか？いつでも出動できる準備はしておきますので何か情報が入れば連絡してください。」との内容のメールをもらい、後輩の大災害に対する危機管理能力の高さに勇ましさと同じ共感であることに嬉しさを覚えました。結局、その夜には出動命令はかからず、上司から１次隊が出発したことを聞かされました。

翌日、出勤すると「２次隊（６次隊）の小隊長として明日出発して下さい。」との命を上司から受け、翌日の１３日、１５時に大阪万博から岩手県釜石市に向け出動しました。

現地には、翌日の夕方に到着し１９日まで滞在したのですが、大雪のための天候不良が何日かあり、実際の活動は１５日と１７日の２日間だけとなりました。

箕面隊は両日とも人命検索に当たりましたが、１７日の人命検索では私は中隊長を命ぜられ、現地の大槌消防署の消防職員１名と所属の違う約５０名の隊員とともに活動をしました。

その際、広範囲な現場であったことから前線指揮所を設定し、私はそこから

指揮をしたのですが、地理等の情報提供を受けるため大槌消防職員の方とずっと一緒に居ました。現場は悲惨なほど壊滅状態でしたが、津波が到達した時間帯に町人がたくさん集まっていたと予想される場所を教えてもらいながら、その場所を中心に人命検索を進めました。また、津波被害にあった大槌町役場や大槌消防署も教えてもらいました。

その時です。その方が突然涙ぐみ、「私の家も消防署の近くにあったのです。家族の安否も未だわかりません。私は大津波が来たとき消防車で山へ逃げたのですが、車を降りた瞬間に車は津波に飲み込まれ炎上したんです。今の私は行く場所がなく、昼間は毎日現場に来ているんです。これからこの町も私もどうなるんでしょうか。」と私に訴えてきました。それを聞いてからは、私も涙が止まらなくなり、本当に辛くて悲しくて言葉もでませんでした。

こうした中、その方の助言もあり最終的に要救助者数名を発見することができました。そして、薄暗くなり雪が舞い始めた頃、お互いが涙を目に浮かべ握手をして別れました。

私の涙は「くじけずに頑張ってください。」との意味であったのですが、その方の涙には計り知れない程の深い意味が込められていると思います。私はいつになるかは分かりませんが、この町をもう一度訪れその方に再会したいと思っております。

職員手記
消防本部　依田　崇　（緊急消防援助隊第６次派遣　任務：救急隊）

東日本大震災が起こったのが、平成２３年３月１１日。そして、私が緊急消防援助隊の一員として被災地へ派遣されたのが、二日後の平成２３年３月１３日第６次派遣隊（箕面消防としては第２陣）としてであった。

平成２４年２月の今、こうして手記を書く機会をいただき、当時のことを思い返してみると、まず驚かされるのが、既に１年が過ぎようとしていることである。この未曾有の大災害は、現在も進行形であり、とてもそんな時間が過ぎたようには感じられないからだ。確かに、思い出せない内容もあるが、被災地で見た情景は、私の中で未だ鮮明であり、また、その光景を思い浮かべると同時に表現し難い感情が滲みでてくる。こういった、未整理であった部分を整理する意味でも、順を追って思い返してみる。

そもそも、今回の地震を初めて知ったのは、非番日に家でテレビを見ている時であった。恥ずかしながら、当時の揺れに関しては特に意識していなかったように思う。しかし、各局一斉に映し出される被災地の状況は、どれも切迫しており、港や街が破壊されていく様は不謹慎ながら、特撮映画のワンシーンの様に感じたのを覚えている。思えばその時から、現実を現実として捉えきれていなかったかもしれない。

次の日の朝出勤後直ぐに、箕面市の緊急消防援助隊第１陣は既に出発しており、自分は第２陣としてメンバーに入れていただいているのを聞いて、とても気分が高揚した。

災害現場で活躍する姿に憧れ、この仕事を選んだのもあり、今こそ全力を出す時ではないかと考えたからだ。出発は次の日であったので、その日は夕方に帰宅し身支度を整え、家族には心配をかけることになるが、頑張ってくることを伝え、準備万端に次の日を迎えた。

早朝、万博公園に大阪府隊は集合し、現地へ向け出発。箕面消防隊員は他所属の方々と共に高槻消防のバスに乗せてもらった。１３日朝から出発し、現地の岩手県大槌町へ着いたのは１４日の夕方頃、２７時間の移動であった。その間すし詰め状態の車内で、正直不満を感じていたが、被災地の状況が目に飛び

込んできた瞬間、自分がどこへ何をしに来たのかを思い出し、恥ずかしい気持ちになったのを覚えている。

その道中のことである、被災地入りして瓦礫の間の道路を走行中、突如車列は停車し、前方の車両がご遺体を発見した旨の無線を発報していた。このことがあったので、私はこの緊急援助隊の活動中、もちろん生存者を発見するのが目標であるが、かなりの数のご遺体を見ることになるのだと覚悟した。

被災地での緊急消防援助隊の活動は安全面も考慮し、基本は日の出から日没までである。

したがって、被災地入りした１４日は第１陣との交代とそれに伴う申し送りのみで、実活動を開始したのは１５日からであった。

この時点で発災日より既に４日が経過しており、えも云われぬ焦燥感が全体に感じられた。特に私は、救急隊として派遣されていたので、はじめは救急車内でひたすら救助者を待つという仕事が与えられていた。これも大部隊が組織として動く以上、とても重要な仕事である。そう分かっていながらも、内心もどかしさで終始落ち着いてはいられなかった。

実際災害現場の情景は悲惨なもので、道路は自衛隊による復旧のおかげでなんとかその体裁は保ってはいるものの、街並みは大型の店舗や工場が辛うじてそこに建っているが、他はあるべき場所にあるモノは一切なかった。

かんしゃくを起こした子供が両手で積み木をぐしゃぐしゃにかき回した様に、元ある姿が全く想像できない状態である。さらに、手付かずの山火事による煙があちこちから立ち上がっており、あたり一帯に立ち込めていた。

あれだけ、大部隊に見えた大阪府隊の車列や隊員数も、破壊しつくされた被災地の中にあっては、物足りなさを感じてしまう程である。

その後、１９日大阪府隊引き上げまでの救急隊としての主な業務は、被災しつつも基幹病院である県立釜石病院から他院への遠距離転院搬送業務であったが、結果としてご遺体と接触することはなく終えられた。

積雪のため全く活動できない日もあり、全体的に「思うような働きができていない」「もっともっと何かできるのではないか？」というような熱い気持ちと、それに比例するように、焦りやくすぶった雰囲気が充満していた。

そんな中、大阪府隊として１名女性を生存救出できた事は、本当に嬉しいことであり、経過時間的にも奇跡的であった。私自身、この報告にどれだけ心が救われたか分からない。

今回参加した隊員で全力を出していない者は一人もいないと思う。また消防職員として、計り得ない貴重な経験が出来たと思うが、大阪府隊として、輝かしい成果を残しそこに救いを感じつつも、正直私の中ではなんの達成感も得られなかった。

そのように感じている隊員は他にもいるのではないだろうか。理屈ではないかもしれないが、災害の規模があまりにも桁外れに巨大であり、また、自分には帰る家も待っている家族も居ながら、被災者を残し当時まだ復興の兆しのないまま被災地から引き上げなければならなかったからであろうか。

私にはまだまだ大きな目線で見る事はできていないが、緊急消防援助隊自体、阪神大震災の教訓により組織され、結果今回それが十分に活かされたのだと思う。私自身、今回得た経験を教訓にし、今後の消防人生に役立てて行きたいと思う。

職員手記
消防本部　山口　慶太郎　（緊急消防援助隊第６次派遣　任務：救急隊）

私は今回の地震に伴う緊急消防援助隊大阪府隊の一員として、一人でも多くの命を助けたいという気持ちから緊急消防援助隊への参加を志願し救急隊の交代要員として参加しました。

テレビでは東北は地震が起き津波で建物も何もかも流され、辺り一面水没している映像が映り、建物の屋上で取り残された人をヘリコプターで救出する光景が印象的でした。しかし実際に現地を見た時は、辺り一面建物も木々もすべて流され、土手の上に船が打ち上げられており、想像以上の惨状でした。野営地のある遠野市から検索活動を行う大槌町までの道のりでは、消防隊・救助隊・救急隊が車列を組み走りました。道行く人が皆、長い車列に向かい深々と頭を下げる姿を見た時は本当に心苦しく、絶対に助けるぞという思いの反面、この惨状の中で、いったい私達に何ができるのだろうか、できることがあるのだろうかという不安や無力感も感じながら、活動現場へ向かいました。

実際の捜索活動は想像以上に困難でした。津波は建物も人も何もかもを流してしまい、救助隊・消防隊の器材も役に立たず、結果として人の手で瓦礫をかき分け土砂を掘っての検索活動となりました。そして要救助者の救出はあるものの、大多数の発見には至りませんでした。

私は救急隊として現地へ行きましたが、当初の主な任務は『待機』でした。生存者の救出があった場合に、病院までの搬送を担うため検索活動現場近くに列を作り待機していましたが、救急車の中で、「一人でも多くの命を救うために来たのに、なぜこの待機時間に捜索させてくれないのか。」と、とても悔しさ・はがゆさを感じる待機でした。

その後、地元病院の耐震強度の低下により、入院患者の転院搬送で数件の救急搬送を行いました。搬送した患者も同乗した医師も皆被災し、家が流され運良く入院していたから助かった人もいました。それにも関わらず、明るく振る舞い、大阪から来たことや、救急車で転院することに「ありがとう」と言われた時は、辛かったです。

緊急消防援助隊として東北へ行ったことで「大変だったね。」とねぎらいの言葉をいただくこともありますが、消防職員の一人として現地に行き結局何もできなかったという無力感・悔しさが一番辛かったです。それは私だけではなく大阪府隊として参加していた皆が同じ気持ちであったと思います。私は救急隊として現地に行き、転院搬送という任務で被災された方に直接接することができたことは貴重な経験でした。要救助者を捜索しに行けないことを悔しいとも思いましたが、被災地での救急隊のできることとして少しは貢献できたのかなと思います。

今後も大地震が起こる可能性が高いと言われていますが、災害時のさらなる被害の軽減を考え、日常の災害に対しても、あの悔しい気持ちを忘れず訓練を行っていきたいと思います。

職員手記
消防本部　黒木　達明　（緊急消防援助隊第６次派遣　任務：救急隊）

私は、平成２３年３月１３日から３月２０日までの間、緊急消防援助隊大阪府隊の救急隊として、岩手県の釜石市と大槌町へ派遣されました。

地震発生当初から「もしかしたら被災地に派遣されるのではないか」と心構えはしていたのですが、いざ自分が被災地に行くとなると、色々な事を考えるようになり、不安な気持ちになったのも事実です。しかし、家族の支えもあり、前向きな気持ちで被災地に出発することが出来ました。

被災地までの道中は、出発してからしばらくの間は普段と景色は変わらなかったのですが、東北地方に入った辺りから高速道路も緊急自動車しか通っておらず、段々と被災地が近づいてきているのを感じました。

実際に被災地である釜石市の現状をバス車中から見たときには、正直驚きました。テレビなどで報道されている被害状況はほんの一部分であり、地震による津波の恐ろしさを肌で感じ、その時に初めて恐怖を感じました。

バスはそのまま進み、第一陣が活動している大槌町に到着しました。大槌町の被害も甚大で、到着してからすぐにでも捜索活動に加わりたかったのですが、日没が近いこともあり、その日はベースキャンプに戻り先遣隊と交替して終わりました。

翌日から救急隊として活動したのですが、ベースキャンプから大槌町の活動現場へ向かう途中、釜石市の住民の方々が我々の隊列に向かい手を合わされていました。その姿を見たときに私はできる限りのことをして帰らなければここまで来た意味がない、精一杯の活動をしなければ、と心の中で思いました。

到着と同時に消火隊は捜索活動に加わり活動を開始しました。一方救急隊はほとんどの時間が待機で、「救急隊として早く活動したい」と強く思っていたのですが、今思えばもっと積極的に指揮本部に対しこちらから、避難所などへの巡回等を具申するべきであったと反省しています。

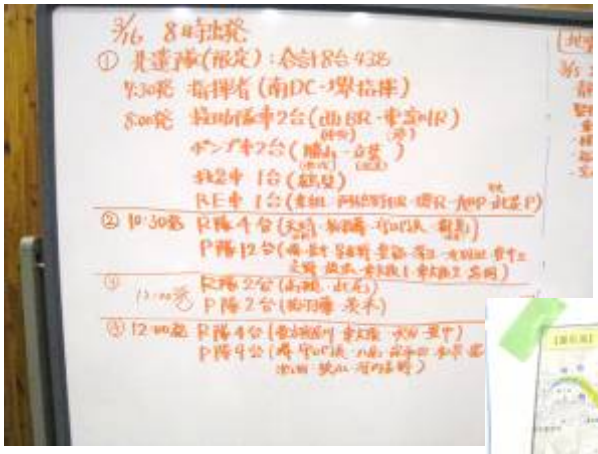
計４日間の活動で、県立釜石病院から遠方の病院への転院搬送がメインの活動となり、計３件の出場となりましたが、少しでも被災者の方々の役に立ちたいという思いだけで活動しました。

今思えば私個人としては大した活動が出来なかったと反省もあるのですが、緊急消防援助隊大阪府隊として派遣されたこの経験を、今後の消防人生に活かしていけたらと思います。

【参考写真】

ベースキャンプのようす

OSAKA
FIRE DEPT
2011/3/17



釜石市津波浸水予測図

（両面印刷用調整白紙）

２．避難所支援・給水支援

Contents

箕面広報課取材　「箕面市職員が被災地支援に出発！」
現地からの職員レポート
　総務部　小林誠一／市民部　松本宜之　（任務：避難所支援）
派遣報告書
　総務部　小林　誠一　（任務：避難所支援）
　市民部　松本　宜之　（任務：避難所支援）
職員手記
　市民部　松本　宜之　（任務：避難所支援）
現地からの職員レポート
　市長政策室　岡本秀／みどりまちづくり部　田中幸雄　（任務：避難所支援）
派遣報告書
　上下水道局　　山本　貴行（任務：応急給水支援）
現地からの職員レポート
　上下水道局　（任務：応急給水支援）
職員手記
　上下水道局　山本　貴行　（任務：応急給水支援）
　上下水道局　江口　朝日光　（任務：応急給水支援）
　上下水道局　白井　康昭　（任務：応急給水支援）
　上下水道局　江口　善浩　（任務：応急給水支援）

箕面市職員が被災地支援に出発！（2011/03/26 撮れたて箕面ブログ掲載）
箕面広報課取材

3 月 26 日（土曜日）、箕面市職員 2 人が他の大阪府内の自治体職員 20 人とともに、東北地方太平洋沖地震の被災地である岩手県へ向けて出発しました。

26 日（土曜日）午後 2 時 40 分から、大阪府市町村会館で、「岩手県への派遣職員出発式」が行われました。

今回派遣される職員は二手に分かれ、被害が甚大であった大槌町と陸前高田市に向かいます（箕面市職員 2 人は大槌町に）。

現地では、遺体収容班、避難所対応班、食料物資班、埋火葬班などに分かれ、遺体安置所（体育館）で、身元確認に来た人の応対、棺を運ぶ際の手伝い、体育館内の掃除、遺体の数確認などを行います。

出発式には、派遣職員 22 人のほか、倉田市長ら各自治体の首長も出席し、橋下大阪府知事らから派遣職員に激励の言葉がかけられました。

式の終了後、橋下大阪府知事や倉田市長らが見送る中、派遣職員を乗せたバスは、岩手県へ向けて出発しました。

箕面市では、今後も引き続き職員を派遣していく予定です。

現地からの職員レポート（2011/03/30 撮れたて箕面ブログ掲載）
総務部　小林誠一／市民部　松本宜之　（任務：避難所支援）

箕面市では、箕面市職員 2 人が他の大阪府内の自治体職員とともに、東北地方太平洋沖地震の被災地である岩手県大槌町に派遣されています。その職員から現地レポートが届きましたので、お伝えします。

3 月 27 日に岩手県大槌町に派遣されて、はや 3 日が経ちました。何度となくテレビや新聞で大槌町の光景は観ていましたが、実際に目の当たりにすると、言葉で説明出来ない程、想像を絶するものでした。辺り一面瓦礫の山で、役場や消防庁舎をはじめ、市街地の家屋は全て倒壊し町の機能が完全に破壊されている状況です。

私たち箕面市の職員は、岸和田市の職員とともに、避難所対応班のお手伝いをしています。午前中は、自衛隊の方と一緒に物資の搬出入を行っています。

午後から町内の避難所に県や町、企業からのお知らせ物を配布し説明を行い

ます。また、避難所生活での困り事や要望などを伺い、出来る限りの対応を行います。大槌町の避難所では、衣・食は比較的充実してきています。お風呂も自衛隊により週１回用意されます。

しかし、一時避難に伴う子どもの学校のことや仮設住宅の入居、再就職などの相談が多く、被災されたかたは今後の生活を再建するうえでの不安を強く抱いておられます。行政としては、これらの不安を少しでも解消できるよう、きめ細かな支援策を迅速に取りまとめ、発信していくことが必要であると感じました。

（上）物資の搬出入のようす

（右）大槌町の広報紙を作成しているようす

私たちの食事です。毎食これを食べています

今日の午前中はパソコンで避難者名簿の作成をしています

また、大槌町は３分の１の職員が死亡もしくは行方不明になっており、通常業務が完全にストップしている状態です。一刻も早く通常業務を復活させるためにも、私たち自治体からの支援は、お手伝い型ではなく窓口課業務などのセクションをまるごと請け負うなど大槌町職員のかたの負担を大幅に軽減させ、復興計画などに集中してもらうことが大事だと感じました。

そのためには、4 日間という短い期間では、直ぐに引き継ぎが起こり、大槌町職員も業務に集中できないため、もう少し長い期間での派遣支援が必要であると思います。30 日には次の部隊が来ます。今、感じたことは、岩手県や大槌町さらには次の部隊にも、しっかり伝えて１日も早く行政機能が回復するよう願っています。

派遣報告書
総務部　小林　誠一　（任務：避難所支援）

派遣先：岩手県大槌町

派遣期間：平成 23 年 3 月 26 日～平成 23 年 3 月 31 日

１．応援職員

所　属		氏　名	担当業務
大阪府	市町村課	城間　正樹	統括
豊中市	消防本部予防課	井上　裕貴	食料物資班(リーダー)
吹田市	地球環境課	伊勢田　直道	〃
	体育振興室	坂元　宏基	〃
茨木市	広報広聴課	武部　伸彦	〃
箕面市	収納整理担当	松本　宜之	避難所対応班
	しごと改革推進担当	小林　誠一	〃（リーダー)
岸和田市	保育課	東　久義	〃
	生活福祉課	大田　和史	〃
守口市	危機管理準備室	藤田　将司	遺体収容班(リーダー)
	産業労働課	中村　英樹	〃
合　　計		１１名	

※埋火葬受付班は岩手県の市町村が対応

２．日程

２６日（土）	13:00 箕面市役所･･･14:00 大阪府庁･･･14:40 出発式･･･15:00 出発･･･（名神高速・北陸道・磐越道・東北道・釜石道）
27 日（日）	11:30 岩手県釜石合同庁舎･･･（打ち合わせ）･･･14:00 大槌町･･･（打ち合わせ・避難所業務）･･･19:30 岩手県釜石合同庁舎･･･19:45 リーダーミーティング･･･21:30 終了（就寝）
28 日（月）	7:30 岩手県釜石合同庁舎･･･8:00 大槌町･･･（物資搬出入・避難所業務） 19:00 岩手県釜石合同庁舎･･･（リーダーミーティング）･･･20:15 終了（就寝）
29 日（火）	7:15 岩手県釜石合同庁舎･･･7:45 大槌町･･･（物資搬出入・避難所業務） 19:30 岩手県釜石合同庁舎･･･（リーダーミーティング）･･･21:30 終了（就寝）

30 日（水）	7:15 岩手県釜石合同庁舎･･･7:45 大槌町･･･（広報誌印刷・名簿入力業務）･･･15:30 岩手県釜石合同庁舎･･･（釜石道・東北道・磐越道・北陸道・名神高速）
３１日（木）	10:00 大阪府庁･･･（派遣報告会）･･･10:30 解散

３．現地の状況

（１）岩手県釜石合同庁舎

・ライフラインは、携帯電話の電波状況も含めてすべて問題なし

・湯沸かし器使用可、シャワー室は輪番で使用可

・アルファ米、カップ麺、水、毛布、寝袋などは大阪府が用意しており、衣食住に問題はない

（２）大槌町

・役場庁舎、町内のガソリンスタンド、店舗を含め市街地は壊滅状態

・一面瓦礫の山で自衛隊が道路上の瓦礫を撤去

・近日中に小学校のグラウンドに仮設庁舎を建設予定

(3) 大槌町中央公民館（災害対策本部）

・ライフラインは問題なし

・携帯電話はドコモ OK、ａｕ・ソフトバンクは場所によって使用可

・公用車は津波被害により使用不可（レンタカーを使用）

(4) 町内避難所

・ライフラインは問題なし

・指定避難所の衣、食は比較的充実している

・在宅避難者の把握ができていないため、町として在宅避難者名簿を作成中

・山間の避難所については、携帯電話使用不可

４．各班の業務内容

（１）食料物資班

・町指定避難所や在宅に避難されている方をエクセルで入力し名簿を作成

→食料物資等の管理、搬出入は自衛隊が中心となって業務遂行

（２）避難所対応班

・大槌町や岩手県、企業からのお知らせ文を３９カ所の避難所に４班体制で配布し説明

・各避難所の要望を聞き、災害対策本部に伝達

（3）遺体収容班

・収容されている遺体の身元確認のお手伝い

（4）埋火葬受付班

・死亡届の受理、埋火葬許可証の交付

・土葬の説明

５．各避難所での主な意見

・火葬場が一杯のため仮埋葬（土葬）するとのことであるが、身元不明者はどうするのか

・個人宅に避難している方の把握と支援物資を届けてほしい

・会社を解雇されたため医者に行きたくても社会保険が使用できない。国民健康保険証を早急にほしい

・自衛隊や県の医療チームが巡回に来たが昨日もバッティングした。事前に調整し効率的な巡回をしてほしい

・小中高の再開に向けた今後の方向性を教えてほしい

・県外への一時避難所の案内があるが、学校や仕事のことなど、詳細を提示されないと判断できない

・津波により浸水はしたが、かろうじて家が残っている方の衛生面の消毒は保健所が行ってくれるのか（案内がない）

・早急に仮設住宅を建設し入居させてほしい

・避難所の代表者をしているが、避難所の世話をしながら仕事勤めは厳しい。県や町から企業に対してボランティア休暇（有給扱い）の創設を要請してほしい

・ガソリンを確保してほしい

６．感想

・何度となくテレビや新聞で大槌町の光景は観ていたが、実際に目の当たりにすると、言葉で説明出来ない程、想像を絶するものであった。

・辺り一面瓦礫の山で、役場や消防庁舎をはじめ、市街地の家屋は全て倒壊し町の機能が完全に破壊されている状況である。

・被災者は、一時避難に伴う子どもの学校のことや仮設住宅の入居、再就職などの相談が多く、被災されたかたは今後の生活を再建するうえでの不安

を強く抱いている。

・また、大槌町は約 3 分の 1 の職員が死亡もしくは行方不明になっており、通常業務が完全にストップしている状態であり、一刻も早く通常業務を復活させるためにも、私たち自治体からの支援は、お手伝い型ではなく窓口課業務などのセクションをまるごと請け負うなど大槌町職員のかたの負担を大幅に軽減させ、復興計画などに集中してもらうことが必要である。

・そのためには、4 日間という短い期間では、直ぐに引き継ぎが起こり、大槌町職員も業務に集中できないため、もう少し長い期間での派遣支援が必要である。

派遣報告書
市民部　松本　宜之　（任務：避難所支援）

派遣先：岩手県大槌町

派遣期間：平成 23 年 3 月 26 日～平成 23 年 3 月 31 日

１．支援業務内容

自衛隊の方との物資搬送業務及び被災自治体職員との避難所対応業務（人数確認・要望聴取・行政情報等の提供）を支援するとともに、最終日に在宅避難者名簿の作成に着手しました。

２．支援業務を通じての感想

被災現場に身を置き、被災者と接することにより「人の命とは」「市民生活とは」「行政とは」改めて考えさせられました。

また、士気の高い大阪支援隊、自衛隊及び被災自治体の職員と協働することにより、職務に対する姿勢について再考するきっかけとなりました。

３．今後の復興支援業務への提言

被災地における行政機能は、深刻な状況であることから短期的、断片的支援では十分ではなく、組織的に長期にわたり、被災自治体の早期復興に向けた人的支援が必要不可欠であると思います。

職員手記
市民部　松本　宜之　（任務：避難所支援）

派遣先：岩手県大槌町
派遣期間：平成 23 年 3 月 26 日～平成 23 年 3 月 31 日

昨年の３月１１日に発生した未曾有の被害をもたらした東日本大震災からもうすぐ１年が経とうとしています。災害派遣として岩手県大槌町に赴いた時のことは、少しずつ記憶が薄らいできたような気がします。

発生直後から連日、津波が押し寄せ、無残にも建物や車が流されるシーンがテレビに映しだされ、自然の驚異を改めて感じさせられていました。
ちょうどその頃、職場から緊急連絡として災害派遣の志願者募集の連絡が入り、正直なところかなり悩んだことを覚えています。そして翌朝、志願のメールを送り、数日後に自分が選出されたことに誇らしく思える半面、とまどいがあったことも。
また、その頃は、被災地に行ってどんな仕事をするのか、どんな生活になるのか、自分に何ができるのか、全く分からない状況で、出発までの２週間はとても不安な気持ちでした。
「どうなるか分からない」という心理は、被災者の方々が日々感じられていると思いますが、かなりストレスになることを実感しました。
今後の支援内容、復興計画、生活、仕事、住居、将来、放射能の影響等々、「どうなるか分からない」これはかなり辛いことだと思います。行政として被災者の方が少しでも安心できるよう、できるだけ早く明るい展望を示していくことが大事なことだと思います。

被災地に向け出発する当日朝には、気持ちの整理もつき「できるだけのことを」と冷静に思っていました。
市役所まで荷物を取りに来た後、市長が大阪１次派遣隊の出発地である大阪府庁まで見送りに同行していただき、また、知事からも「公務員にしか出来ない仕事だから」との激励をいただくなど、かなりハードな仕事になりそうな予

感から緊張のピークに達していました。

一次派遣隊は、大槌町へ１１名、陸前高田市へ１１名の計２２名の編成で、箕面市は大槌町でした。他市からの派遣職員は、私よりも若い２０代から３０代の方が多く、中には消防職の姿もあり更にプレッシャーを感じました。

正午過ぎ、方面ごとに２台のバスに分乗し、一路、大槌町に向け出発しました。途中、２時間おきに休憩をとりながら、日本海側を北上する経路で２０時間以上の行程でした。車内ではほとんど寝ることはできませんでしたが、現地が近づくにつれ緊張と使命感？でテンションが上がり眠気は感じませんでした。被災地近くのサービスエリアでは、箕面市役所とプリントされた作業服を見てか、地元の方から声をかけていただき、おにぎりを１つ渡され「頑張ってください」って励まされました。

宿舎は、岩手県庁釜石支部の庁舎で、会議室の床で寝袋を敷いての生活でした。食事は乾燥米をお湯で戻すアルファ米という便利なご飯とカップ麺でした。あと、「大阪府のおいしい水」っていう水道水をボトルに入れた飲料水で派遣中は過ごしました。

庁舎に着くと岩手県庁の担当者から職務が発表され、箕面市と岸和田市は避難所対応班を担当することになりました。その他の職務は、食糧物資班、遺体収容班などがありました。そして岩手県職員から携帯電話、地図、腕章などを渡され、公用車に分乗し大槌町の臨時庁舎になっている公民館まで向かいました。

大槌町は、町の中心部のほぼ全てが津波被害を受け、官庁施設も含め壊滅状態で町長を含む町職員の３分の１が亡くなられた町でした。

公用車が大槌町に近づくと、テレビで見たあの光景が広がり、道路は自衛隊のトラックが慌しく走り、空にはヘリコプターが飛び、さながら戦場の様相でした。砂ぼこりの中、自衛隊の隊員が瓦礫の撤去作業を黙々とされていた姿が今でも心に残ります。

高台にある公民館は津波を逃れ、町の臨時庁舎、自衛隊の指揮所、避難所等を兼ねており、多くの人でいっぱいでした。駐車場には自衛隊の軍用車両が並び、迷彩服を着た隊員が行き来し、大きな声が飛び交うなど、非常事態を実感しました。

公民館の前からは被害を受けた市街地から海までが一望できました。そのたもとに誰かが供えただろう花束が置いてあり、多くの命が一瞬にして奪われ、瓦礫の下に多くのご遺体があることを思うと、感傷的な気持ちになりました。

初日は、地元職員との顔合わせや避難所対応班の業務レクチャーの後、地元職員とペアを組み、公用車で担当する避難所１３箇所を回りました。各避難所は津波の被害を逃れた高台にある様々な施設が利用されており、その全てが被災者でいっぱいでした。

地震発生から２週間が経過している中で、入浴もできず、トイレの水も出ない状況だったので衛生面がとても気になりました。担当する避難所の中で規模が最も大きい弓道場を訪問した時、トイレの使用ルールが壁一面にマジックで書かれていました。このような状況下で集団生活を長期間する場合、かなり具体、詳細に様々なルールを決めておかなければ、トラブルの原因になることを感じました。

派遣期間中のスケジュールは、午前中自衛隊と共に全国各地から寄せられる救援物資の搬入や仕分け作業を行い、昼過ぎから避難所と在宅避難の情報があったところを訪問しました。行政情報の提供・説明、避難者の異動の確認、要望事項の聴取・回答が主な業務でした。

どの避難所にも、しっかりしたリーダー的役割の方がおられたため、予想していたより円滑に業務が遂行できました。

一方で、ストレスがかなり溜まっている被災者の方も多く、また、腕章が「岩手県」となっていたこともあって、かなり厳しい苦情を受けたことも事実です。数人に囲まれ、感情的に苦情を捲くし立てられることもあり、その時は箕面市役所とプリントされた作業服を見てもらい、大阪から来ていることを話し、世間話で窮地を脱していました。

ただ、残念なことは、岩手県民には「みのお市」と言うと岐阜県「みの市」と勘違いされるなど、ほとんどの方が箕面市を知らないことでした。また、説明するにしても滝・紅葉・猿・柚子などの話をしても大阪イコール大都会というイメージから、あまりピンときていないようで、箕面市民で芸能人の話題などで盛り上げていました。

最終日には、地元職員から避難者名簿の作成を依頼され、公民館の視聴覚室

から使えそうなパソコン３台を移設し、事務所は地元職員の仮眠室を借りることになりました。住民情報等は役場にあったサーバーもすべてが津波に流されており、正規のデータはない状態だったので、私と岸和田市の職員２人は各避難所から提出された名簿と職員がバックアップしていたデータの両方を照合しながら作業を開始しました。

避難者の多くの方が避難所間を頻繁に異動しており、他県からの避難者や逆に他県へ避難しているケースなど、在宅避難者の把握も含め、かなり煩雑であることが分かりました。

フォームが完成し１００件ほどのデータ入力が終わった時点で、大阪からの二次派遣隊が到着し、私たちの業務が終了しました。

最後に、災害派遣を通じて感じたことは、被災し支援される側も支援する側も皆「人」であり、相手の立場を理解し、思いやりの気持ちを持って行動することが絆を深め、円滑な支援活動の遂行に必要不可欠なことだと思いました。

現地からの職員レポート（2011/04/20 撮れたてブログ掲載）
市長政策室　岡本秀／みどりまちづくり部　田中幸雄　（任務：避難所支援）

派遣先：岩手県大槌町
派遣期間：平成 23 年 4 月 9 日～平成 23 年 4 月 16 日

4 月 9 日（土曜日）から 16 日（土曜日）までの 8 日間、岩手県大槌町の支援に派遣された箕面市職員 2 名の報告です。

3 月 30 日（木曜日）の「現地レポート」でも現地の惨状は報告されていますが、その場に実際に立つと、胸が締め付けられる痛みを感じます。大槌町の場合、地震の被害もあったのでしょうが、それを覆い隠してしまうほど津波の被害がひどく、3 月 11 日以前のまちの様子を全く想像できません。また、わずかな高低差で、津波に襲われ建物が全くない地域と津波の難を逃れ全く以前と変わりないように見える地域に、明確に二分されていることが印象的でした。

瓦礫の撤去はまだまだ進んでおらず、埃などもひどいため、マスクが必需品でした。しかし、震災から 1 カ月が経過し、電気・水道などのライフラインや道路の復旧は着実に進んでいました。救命活動、支援物資の配送などの役割を担う、災害時における道路の重要性を特に再認識しました。

私たち箕面市の職員は、高槻市の職員とともにグループを組み、自宅や親族の家に避難している人たちの情報をデータ化し、地図に転記したほか、仮設住宅の希望調査票をデータ化し、ニーズの把握を行いました。

私たちは土地勘が全くありませんでしたので、住宅地図との「格闘」でした。また、町内を移動するときにも地図が欠かせず、いざというときのために、様々な縮尺の地図を用意し、共有する必要を感じました。

大槌町の避難所では、おおよそ衣・食は充実しているように見えました。しかし、あくまで「寒くない」や「食べ物がある」レベルですので、栄養が偏り、ビタミンやミネラルなどが不足しがちです。また、プライバシーも確保されていない状況が殆どです。気丈に振る舞われている被災者が多いのですが、心身ともに疲労が蓄積されているはずです。色々な課題もありますが、仮設住宅の建設など、早急に対応する必要があると思います。

また、自衛隊の働きの凄まじさには驚きました。冒頭に申し上げた「道」づくりにおいてもそうですし、物資の配送、入浴所の開設などの避難

所運営の支援も、非常に効率的で効果的に行われていました。避難所をはじめとして、被災地の多くの場所で自衛隊に対する信頼と感謝の声を聞きました。

（上）支援物資を保管する大テント

（右）自衛隊が開設した入浴所にて

私たちがいる間に、仮設の町役場が完成しました。色々なところから集まった不揃いの机や椅子を運び込みながら、大槌町の一日も早い復興を願わずにおれませんでした。

住民票の発行も始まりました。しかし、もともとのおよそ三分の一の職員が亡くなったり行方不明であることから、住民票の発行や戸籍事務に精通した職員の数が不足しておられました。今後は、そういった窓口業務に従事した経験のある職員の派遣が必要であると思います。

いくら支援したいと熱い気持ちをもって現地入りしても、支援される側のニーズに応えられなければ、何の意味もありません。日々刻々と変化する現地の情報が迅速に集約され、支援する側と機動的にマッチングできる仕組みづくりが必要だと思います。

毎日、毎日、少しずつであっても復興への取り組みは進んでいます。

職員派遣においても、短期から中長期に切り替わり、じっくりと腰を据えた支援体制になりつつあります。支援する側も支援される側も頑張りすぎず、そして諦めることなく取り組むことが大事だと思います。

１週間という短期の派遣で私たちができたことは、本当にささやかなことでした。これからも大したことはできないと思います。しかし、それでも、引き続き復興のお手伝いをしていきたいと思います。

派遣報告書
上下水道局　　山本　貴行（任務：応急給水支援）

派遣先：岩手県大船渡市
派遣期間：平成 23 年 4 月 9 日～平成 23 年 4 月 16 日

・箕面市水道災害派遣第一陣として出発。
・４月９日（土）午後１２時５５分に新大阪駅から他市の派遣隊とともにバスで出発。
・翌４月１０日（日）午前７時に基地となる盛岡市新庄浄水場に到着。
・午前７時１０分からミーティング開始。事務局である豊中市から派遣先等の説明があった。箕面市は豊中市と２名２班体制で大船渡市の赤崎地区を担当することとなった。
・基地から乗用車で大船渡市に向けて出発。移動距離約１２０ｋｍ、高速と一般道を使い所用時間約２時間であった。
・午前１０：３０に活動中の池田市部隊と合流。そのまま作業を開始し、午後１２時２０分に宿泊先である民宿に到着。
・池田市から活動内容の説明を受けながら昼食をとった。
・我が班は、赤崎地区の合同避難所１箇所、山間の集落２箇所を担当することになった。

・活動内容は午前と午後に１回ずつ、給水車及び移動用乗用車の２台で出動し、給水車で広報を流しつつ、運転者以外は徒歩にて車に併走し、家から出てこられる被災住民の方が持参する灯油缶、ペット

ボトル、漬物用樽、鍋、ヤカン等に給水車から水を入れ、手渡しで水をお渡しするという形式だった。

・被災住民の方によって、持参される容器は多種多様で、数も２個というところもあれば、ペットボトル１００本持ってこられる方もおり、それに１本ずつ水を入れては手渡すという作業内容で、急傾斜の坂道などもあり肉体的にかなりきつい作業であった。

・給水車の水が無くなった時点で、その旨広報し、給水拠点まで給水車で向かい、活動場所まで戻ってくるという反復作業であった。休憩が取れるのはその間の約２０分程度だけであった。だいたいであるが、午前に２回、午後に２～３回給水拠点で水を補充することが必要であった。

・現地の状況は、避難所付近の標高の低いところは住宅等ほぼ壊滅。集落は山間部はほぼ被害なしだが、山裾付近は壊滅。電気は仮設電柱にてほどなく復旧した模様。携帯電話は繋がる状態であった。ガスはプロパンのところが多いらしく、水道水だけが無いというような状況であった。

・水道管の被害状況などを調べるため、市役所を訪れたが、市役所内は混乱を極めており、水道管のどこが破損し、復旧の目処はいつかなど全くわからない状態であった。

・毎日、午前６時に起床、洗顔・朝食を取り、午前７時３０分から作業開始、午前分を廻りきった後で昼食、その後は午後５時３０分～６時頃まで給水活動、宿舎に戻り夕食を取ったあとで班内ミーティングを１時間程度行い、改善点等について話し合いを行った。

現地からの職員レポート（2011/04/13 撮れたて箕面ブログ掲載）
上下水道局　（任務：応急給水支援）

4 月 9 日（土曜日）に出発し、翌 10 日（日曜日）から 16 日（土曜日）まで、岩手県大船渡市で応急給水支援活動を行っている箕面市上下水道局職員 2 人から、中間活動報告が入りましたので、お伝えします。

活動を開始した 10 日の大船渡市の水道復旧状況は、15,600 戸中 660 戸で、復旧率 4.2 パーセントとのこと。翌 11 日には 10,500 戸が復旧したものの、12 日も前日と同じ状況でした。

現地での給水は、避難所等の定点で給水車を止めて行うのではなく、個別の家を訪問して給水する方法で行っています。箕面市は豊中市と班を組んで活動しています（給水車は豊中市のものです)。

現地の方はこんな大変な状況にもかかわらず､優しく接していただきました。本当に良い方ばかりです。私たちの方が被災者のみなさんからたくさんの笑顔と感謝をいただきました。

出発前は、避難所等の定点での給水活動と思っていました。しかし、高齢者の方などは重いポリタンクを運ぶことは困難です。私たちが、ポリタンクを抱え個別の家へ給水を行っています。

重労働になり大変ですが少しでも被災者の方々の要望に応えるべく活動を行っています。

職員手記
上下水道局　山本　貴行　（任務：応急給水支援）

私は神戸市在住で、先の阪神淡路大震災では一被災者として災害を体験しました。あのときの記憶はいまも脳裏に焼き付いており、一生忘れることができません。

体験者の体験談として、大災害が起こった際には、まずもって一番重要なことは、**「生き残る」**ことです。

まず、自分自身と家族の身の安全を確保し、近隣への声掛け、住宅の破損状態、周辺環境の破損状態の確認を迅速に行わねばなりません。

そして、安全を確認できたあとにくるのが、「この先どうやって生き延びて行くか。」です。

大規模な災害が起きた場合、都市機能は完全に麻痺します。逃げ出したくなる気持ちもわかりますが、車での移動は大渋滞を引き起こし、緊急車の妨げになります。阪神淡路大震災のときに一番活躍したのはマウンテンバイク（自転車）でした。

次にすべきことは、水と食料の確保です。水道管は阪神淡路大震災以降、耐震管が使われるようになりましたが、今回の東日本大震災の派遣先では完全に断水状態でした。

私は当時、お風呂にためていた水を煮沸し、ろ紙でろ過して少しずつ飲んでいました。周辺のコンビニやスーパーなどは完全に閉鎖され、近隣市では買い占めが横行し、水も食料も入手できません。緊急時用の災害バッグがあったとしても、家族４人で分け合うと３日と持ちません。

現在では、各地域ごとに災害時避難拠点があると思いますが、救援が届くのは居住地にもよるでしょうが、最短でも３日ほどかかるのはないでしょうか。

水も食料もなく、電気・水道・ガスがない状況下で時間を過ごすのは大変なストレスとなります。

東日本大震災が起きたとき

TV のニュースで東北の悲惨な状況を目にしたとき、私は全身に鳥肌が立ちました。恐るべき津波の破壊力･･･　家や車がおもちゃのように流されていく･･･

私が体験した震災とはまた違う惨状。季節は冬、しかも東北ではどれだけの寒さだったでしょうか。

家も家族も何もかもを無くし、途方にくれる被災者の方を見たとき、私はすぐに決断しました。

「必ず水道の応援要請がくる。自ら志願し災害派遣に行こう。」と。

そして、予想どおり応援要請が日本水道協会を通じて箕面市にも来ました。災害対策担当の上司から電話をいただき、「お前、東北行くか？」と聞かれたとき、「行きます！行かせてください。」とお願いしました。

私は水道職場に配属されて２０年。この間、水道に関する様々な知識・技能を得ることができました。

そして、被災地では絶対に水で困っているはずと確信し、いつでも出発できる準備を行いました。

水道水だけは、個人ボランティアではどうすることもできません。水道の組織力を発揮しなければ被災地に水を届けることはできないと知っていました。

しかし、派遣第一陣に任命はされたものの、被災地の受け入れ態勢が整わず、出陣まで約１ヶ月足踏み状態が続きました。

その間、私はネットで広がる支援の輪を知り、それに参画しました。

ネットに次々と情報がアップされ、その悲惨さが身にしみてわかりました。毎日涙をこぼしていました。

いったいどれだけの人が亡くなったのだろうか･･･

毎日、映像やブログ、twitter 等で情報を得て、自宅からネットでできる支援を続けました。家族で義援金募金も何回となく行いました。

そしてようやく、箕面市水道災害派遣第一陣の出陣日が決定しました。

家族に必ず無事に戻ってくることを約束し、家を出ました。

被災地に着いたとき

基地局である盛岡市新庄浄水場周辺は、高台にあることもあり、穏やかな様子でした。

ですが、大船渡市に着いたとき･･･

一面に積み重ねられた瓦礫の山、山、山･･･

ひしゃげた鉄道レール。中身が完全に無くなり、外壁だけ残っているコンビニやマンション。　老齢と思われる大きな木の枝にぶらさがった自動車、あり得るはずのない場所に留まっている船。

ニュースやネットの動画ではわからなかった現地の想像を絶する光景･･･

絶句しました。

そして、現地でしかわからないこと。

それは､なんとも表現しがたい臭いと、風が吹くたびに舞い上がる砂塵。

「これは本当に想像を超えている。真剣に取り組まねばならない｡」と改めて決意を込めました。

応援給水活動中

私たちの班が担当した赤崎地区は、港に近く、平野部は完全に壊滅。家が建っている地盤の高さがおおよそ５ｍ違うだけで、完全に家ごと無くなっているか、まったくの無傷かのどちらかでした。

しかし、そんな状況下にあっても、現地の人々は力強く、我慢強く、試練を乗り越えようとされていました。

給水車で広報を流すと、みなさん家から様々な容器を手に出てこられました。

みなさん一様に笑顔でした。元気な子どもたちもいました。

「悲惨な状況下にあっても、前を向いて生きていくしかないんだ。」

そんなお気持ちが伝わってきました。

毎日の給水応援活動は､拠点給水ではなく移動給水だったため､身体的には相当にきつい活動でした。

お年寄りが多いため、水を入れた20Ｌタンクを坂道を登って玄関先に置くということもしばしばでした。

「いやいや、大丈夫。自分で運べるから。毎日ありがとうな。」という元気なおじいさんもいらっしゃいました。

毎日、「ありがとう。」のお言葉を頂きました。幼いかわいらしい姉妹は毎日私達が来るのを外で待ってくれていました。この子達の笑顔に毎日どれだけ励まされたかわかりません。

普段、通常業務をしていて、「ありがとう。」を言っていただけることは皆無です。

ですが、東北の方たちは、ご自身が被災していらっしゃるにも関わらず、毎日「ありがとう。」と一緒に、「公務ですから･･･」とお断りをしても、「いやいや、みなさんで飲んでください。」と栄養ドリンクをくださったり、手焼きのパンをくださったり。

毎日クタクタになりながらも、優しい方々にふれる喜びが翌日の活力をくれました。

水道職場で働いていて良かった。派遣にこさせていただけて良かった。と実感できました。

そして、任期を終え、次の班に引き継ぐ日の朝。

一人のおばあさんがおっしゃってくださいました。

「あなだがだは、ほんどに優しい。遠い所がらぎで、毎日水さ運んでぐれで、感謝しでます。まんず忘れねがら。」

派遣活動中に悲しみをみせる方はいらっしゃいませんでした。だからこそ、私も絶対に涙は見せるものかと誓っていましたが、このお言葉をいただいた時に思わず涙がこぼれてしまいました。

帰阪して

派遣前は、「何とか力になってあげたい。水を運んであげたい。助けに行くんだ。」という気持ちでおりました。

ですが、無事に任務を終え帰阪した際に感じたのは、日本人本来の優しさ、たくましさ、力強さ、我慢強さでした。

応援に行ったつもりが、励まされて帰ってきた気持ちになりました。

私は、東北は必ず復興すると信じています。

なぜならば、「人の強さ」を真に持っていると肌で感じたからです。

いまだに仮設住宅にお住いの方、遠い知らない土地で暮らしている方、家族を亡くし、仕事を無くし、絶望の淵にあってもなお前を向いている方。

本当にすばらしい方々にお会いすることができました。

一刻も早い復興を願ってやみません。

最後に、派遣されるに当たり、送り出して下さった上司、その間通常業務を担ってくださった職場のみなさん、お守りをくださった友人、家族。

みなさんに心からのお礼を申しあげて、私の手記とします。　　平成２４年２月２４日

職員手記
上下水道局　江口　朝日光　（任務：応急給水支援）

派遣先：岩手県大船渡市
派遣期間：平成 23 年 4 月 24 日～平成 23 年 5 月 1 日

私達が担当した大船渡市の後之入地区と山口地区は、それぞれの集落の入口が津波の被害をもろに受け、流された家や漁船、ガレキが入り混じっていた。給水活動を行った区域は、高低差などによりなんとか難を逃れた家々が多かったが、中には数日後に取り壊されるという家もあった。

給水活動を始めるうえで助かったのは業務の引き継ぎ方法であった。実際に現地を回り具体的な注意点を聞いたり、給水活動を行っている様子を見学させていただいた。これで活動に対する不安はかなり解消され、割とスムーズに給水活動へ入ることができた。

活動中心がけたのは、気配りと安全確認である。水の入った重い容器を何度も往復して運ばれているおじいさんを見かけたら玄関近くまで給水車を着けたり、遠い所から一輪車を押して来られているおばあさんがいるのが分かればルートを増やすなど被災された方々の負担が少しでも軽減できるように気配りをしたつもりである。

私は給水車の運転をしていたが、少し慣れてきた頃、後ろに乗っていた班長

さんが降りようとされているのに気付かずバックしそうになりヒヤッとしたことがあった。それからは、お互いに声かけを行うなど事故防止に心がけた。

応援給水活動を通じて一番心に残ったのは、現地の人々の謙虚さと忍耐強さである。

給水活動中にかけられた言葉は「ありがとう」など感謝の言葉ばかり。長期間水道が使えず不自由な生活が続いているはずなのに、苛立ちや怒りの言葉は聞かなかった。そればかりか、「遠い所からご苦労様」と栄養ドリンクやお菓子など沢山いただいた。なかでも、「お昼ご飯にでも」といただいた大きなおにぎりと漬け物の味は心に染みた。

６日間という短い活動期間だったが、生涯忘れることのできない貴重な経験をさせていただいた。いつの日か、復興を遂げられた大船渡を訪れてみたいものである。

職員手記
上下水道局　白井　康昭　（任務：応急給水支援）

派遣先：岩手県大船渡市
派遣期間：平成 23 年 4 月 24 日～平成 23 年 5 月 1 日

派遣前、現地の状況は、マスメディアの情報等でしか知り得る術はなく応援給水を具体的にどう行うのか、不安があったのは事実です。被災地までの 14～16 時間程度の道のりのなかで、次第に応援給水のイメージを膨らませていたように思います。現地到着日の午後から具体的に応援給水を開始したことから、活動をしながら現地の被災状況や被災者の置かれている環境等を 1 つずつ確認しました。

大船渡市では、沿岸部がほぼ壊滅状態にありましたが、幹線道路のがれき等は撤去されており、津波の被害を直接受けていない丘陵部においては、津波が到達しておらず日常的な風景のままでした。

我々は、主に津波の受けていない丘陵部における戸別の応援給水活動行いました。

給水先は、沿岸部で被害を受け、家屋等が流され住居をなくした方々が丘陵部の親戚の家に避難され、生活されているところへの給水でした。お年寄りの世帯がほとんどで、その家屋の玄関先まで水を運ぶことが多々ありました。

派遣における活動の指揮系統は、大船渡市との情報共有を大阪市が行い、派遣者のまとめ役に豊中市がなっていたのですが、大船渡市における水道施設の被害状況などは活動中、ほとんど情報を得られないような状態であり、修繕や補修計画の規模など全くわからない状態にありました。

派遣の目的が応援給水活動でしたので、現地における活動の中心は給水のみとなっていたわけですが、派遣者は、給水活動に関わる以外の施設の被害状況など情報として確認しておきたい事象もあった訳ですが、残念ながらそれはかないませんでした。

災害の規模や被害状況等により応援規模は変わると思いますが、被災地に応

援活動のコーディネート役をかってでてもらうのは、非常に困難であり、かつ不可能であると感じました。裏をかえせば、派遣をする側でとりまとめ役やコーディネート役を必ず決定し、現地においてはそのまとめ役に従って活動するという、普段当たり前に想像できることを現地で実践できなければならないと痛切に感じました。

今回、幸いにもそのとりまとめ役を担っていた豊中市は、きっちりと的確にその役目を果たしており、それを実践するための準備が、常日頃からできていたんだと感じました。

応援が的確に行える人的余裕やそれを可能にする環境等、本市においても課題が残ると感じました。

職員手記
上下水道局　江口　善浩　（任務：応急給水支援）

派遣先：岩手県大船渡市
派遣期間：平成 23 年 5 月 9 日～平成 23 年 5 月 16 日

私は、震災直後の支援第１陣（3/16～21）として３月１６日に岩手県盛岡市の新庄浄水場へ出発する予定でしたが、現地の支援受け入れ態勢が整っていないとのことで、前日の夕刻に待機となりました。

実際の出動は、５月９日から１６日で箕面市からの第３陣として応急給水作業をして参りました。

当手記においては、第１陣として出発するために準備した当時の状況と内容、ならびに第３陣として実際に現地で活動した際に見聞したこと、気づいたことなどをまとめることとします。

１．震災直後の出動準備

当初、日本水道協会から本市への出動要請が３月１３日の夕刻にあり、第１陣として局内で出動要請があったのが３月１４日朝でした。１３日夕刻の日本水道協会から本市への出発要請の時点では、行き先が福島県郡山市でしたが、１５日には岩手県盛岡市に変更となっており、現地での支援受け入れに対する混乱がうかがえます。

そのような状況で、実際の支援基地（宿舎）、給水活動都市も決まらないなか、如何にして支援隊員の体調管理をすればよいか悩みました。被災地の様子は、テレビ報道などから厳しい寒さが見て取れ、宿泊は屋外でテントもあり得るとのことでしたから、防寒対策と自炊できる食料確保に努めましたが、これで十分なのか、不足がないのか、現地調達など期待できないなかで、かなり不安を感じながら、支援隊員の寝食に関する準備に時間を要しました。

物資確保においては、被災地支援のため乾電池やカセットコンロのボンベが店頭からなくなり、調達に苦労しました。ガソリンについても、被災地に供給できていない状況でしたので、携行タンクを用意しました。

２．派遣先の様子

派遣先は、岩手県大船渡市で日本水道協会大阪府支部の応援給水部隊として、現地で５日間の給水活動に従事してきました。

実際に現地へ支援に入ったときには、被災後約２ヶ月が経過しており、主要な道路のがれきは撤去されており、車両の通行は可能な状況でした。それでも、信号機の倒壊、橋梁の継ぎ目の段差、道路排水不良による路面冠水などがあり、車両運行には神経を使わなければなりませんでした。

道路周辺の宅地は、津波により建物の基礎部分のみを残し壊滅的な被害をうけており、事前に報道等で被害状況は認識していたものの、実際に現場に立つと被害のスケールと油と潮の混ざり合った臭いに衝撃を受けました。

３．応援給水活動

応援給水した地域は、配水ポンプ場が津波で破壊されており断水状態であったため、朝・昼の１日２回給水車で各戸への移動給水をしました。各戸に用意されている容器は様々で、ポリタンク、ペットボトル、たらい、鍋と大小形状まちまちでした。中には、支援都市が配布した容器もあり、支援都市の日頃の備えが見て取れました。給水を受けに来られる方の大半が高齢の方で、大きな容器は玄関内まで運搬を手伝うなど体力的にハードでしたが、必ずかけてくださる感謝の言葉をエネルギーにしていました。（かなりの数のドリンク剤の差し入れももらいました）

各戸で確保される水は飲食用で、入浴は地区会館の風呂を使い、洗濯などは地区を流れる河川の上流でされていたようです。地区の中には、井戸や河川表流

水を昔から使用されており、給水を必要とされないお宅もあり、自然の中で代用できる資源があることの貴重さ、ありがたさを痛感しました。大都市であれば、入浴や洗濯が出来る水量を給水車で配ることは不可能に近いと思います。

４．支援体制

日本水道協会大阪府支部のなかでも、北大阪ブロックは大船渡市内の民宿が確保でき、支援地域には１５分程度で到着できる環境にありましたが、他ブロックは北上市内のホテルから約２時間をかけて通わねばならない状況でした。また、同じ大船渡市内でも他県からの団体は、公共施設で寝袋、風呂なしという処遇のところもあったので、支援活動外の生活面は不自由ない状況で恵まれていました。

活動で使用した給水車は豊中市の車両で、加圧ポンプも実装しており機能面に問題はありませんでした。本市の給水タンク（トラックにタンクを積載するだけ）では、出動したとしても拠点給水など活動範囲に制約があると感じました。

服装などの装備に関しては、先発隊からの情報もあり、不足することはありませんでしたが、現地で出会う他都市との情報交換では、がれき処理などの過酷な作業であっても安全靴がないなど、派遣職員の労働安全面で問題のある都市も見受けられました。

支援する側が怪我をしていては、現地に迷惑がかかりますので、支援するからには現地の状況を的確に判断して万全の体制で臨むべきであると思います。

３．保健業務支援

Contents

派遣報告書
健康福祉部　中島　佐和子　（任務：保健業務支援）
健康福祉部　糸川　真実　（任務：保健業務支援）
職員手記
健康福祉部　糸川　真実　（任務：保健業務支援）
現地からの職員レポート
健康福祉部　糸川　真実　（任務：保健業務支援）
派遣報告書
総務部　勝川　美和　（任務：保健業務支援）
職員手記
総務部　勝川　美和　（任務：保健業務支援）
現地からの職員レポート
総務部　勝川　美和　（任務：保健業務支援）
派遣報告書
健康福祉部　西村　智美　（任務：保健業務支援）
職員レポート
健康福祉部　西村　智美　（任務：保健業務支援）

派遣報告書
健康福祉部　中島　佐和子　（任務：保健業務支援）

派遣先：岩手県山田町
派遣期間：平成 23 年 5 月 29 日～平成 23 年 6 月 2 日

【大阪府による保健師派遣】

震災当初より、大阪府庁・府下保健所保健師が被災地に派遣され、避難所の衛生管理や避難者の健康管理、心のケアを実施してきた。Ａチームが織笠地区、Ｂチー ムが豊間根地区を担当し、避難所への支援に加え、徐々に地区の全戸訪問を実施していたが、一 時的な被災地支援から長期的な保健福祉活動の機能再建に役割がシフトチェンジされることを見越し、23 班を最後に２チーム派遣を終了することになっていた。６月中は１チームの７日間派遣、７月以降は全国市長会と調整し中期派遣体制になる予定である。

【事前説明】

５月 23 日（月）大阪府庁において事前説明があった。参加者は 22 班 23 班のＡ・ Ｂチーム計８名の保健師が集まり、保健師派遣についての注意事項等を聞いたが、大阪府からは １チーム体制に以降するための準備をしてほしいという要請があった。

【地区概況】

宮古市下閉伊郡山田町は山田湾の沿岸の町で、今回の震災では海からの津波と織笠川の氾濫、津波後の火災での被害を受けている。活動拠点となった山田町役場は海を望む坂の上に建ち、隣接して保健センター、社会福祉協議会の建物が残っていた。（写真１）担当した織笠地域は山田町役場から車で 15 分ほどの「津波」「氾濫」「火災」の被害を受け、また小学校、中学校、県立高等学校、保育所が高台にあり、すべてが避難所となっていた。（写真２）大阪府Ｂチームの豊間根地区は同じ山田町でも山手にあり、津波被害がなく、避難所には他地区で被災された方や自宅では不安で過ごせない方が集まっており、状況が異なっていた。

【被災地での保健師活動　被災地行政との連携】

山田町は宮古保健所管内の町である。

宮古保健所：月～金、午前８時 30 分～９時　管内で支援する都道府県の支援グループリーダーによるミーティング（心のケアチーム・保健師グループ）。保健所保健師が司会進行。活動拠点及び連絡の取れる携帯電話番号、リーダー・メンバーの確認と情報提供。

山田町役場：毎朝、午前９時 50 分頃から　地区担当保健師と当日の活動内容の確認。

月・水・金　午後４時～　山田町内の支援グループリーダーによるミーティング（心のケアチーム・保健師グループ）。山田町役場保健師が司会進行。活動内容の報告と新たに発生している全体的な課題などを町保健師に伝える。

その後、検討すべき課題があれば各自、地区担当保健師と話し合う。

緊急時においては宮古保健所でのミーティングのように、外部支援の把握と相互連携のしくみが必要。また地域での具体的な地区診断から発生する課題については町でのミーティングが有効で、ミーティングでの課題について町保健師が町内関係機関と連携するきっかけともなっていた。

【被災地での保健師活動　日々の活動】

１．初日（５月 29 日　日曜）

台風とともに北上、ペアとなる保健師とは盛岡のバス乗り場で待ち合わせし、バスの中で自己紹介や説明会を聞いての所見などを話し合う。

18 時ホテル着　20 時からＡチームの前任より引継ぎ。避難所の様子、全戸訪問の状況、要フォロー者の状況などを聞く。宮古保健所や山田町との連携などを聞き終わったのは、22 時 30 分。その後、我々２人で翌日の行動計画を立て、23 時 30 分終了。

２．活動日１（５月 30 日　月曜）

宮古地域に大雨洪水暴風警報　波浪注意報

宮古保健所、山田町役場でのミーティング等の後、避難所と在宅生活者の個別カルテの確認。前任者の引継ぎでもれているケースがないかを把握したうえで、活動期間中の要訪問事例を抽出。

午後から大雨の中、全戸訪問の未把握分と在宅酸素療法中のかたや妊婦など継続支援が必要だが２度目の訪問ができていないかたなどを尋ねる。津波で仕事も自宅も無くしたかたが、避難所で眠れず、空き家を借り、また服薬の効果もあり、震災後１ヶ月でやっとゆっくり眠れるようになったという声や、障害

のある孫が地元の支援学校が被災したために遠方に引っ越し、さみしさから酒量が増えてきているという家族の相談を聞いた。いずれもこころのケアチームにつなげるほどではなかったが、被災者の様々な疲れや喪失感を知ることとなった。

３．活動日２（５月 31 日　火曜）

午前中は、先日、冠水のため訪問できなかった地域を回る。（写真３・４）未把握世帯が地図上多く残っていたが、実際は津波で１階部分が抜け、居住できない一帯であることがわかった。その中にも、畳をあげ、アルミサッシの玄関枠を外して洗っているお宅等があり、住み慣れた自宅に再び戻る準備をしている姿があった。

午後からは大阪府心のケアチームとの同行訪問。全戸訪問中に妻から「夫が津波に遭い、命からがら生還したが、それ以降自宅で眠れず荒れている」と相談があり、心のケアチームと保健師が後日訪問し、服薬を開始しているという経過のあるかたであった。２度目訪問となる 31 日は、服薬の効果で眠れるようになり、気持ちも安定してきたと本人から話を聞く。訪問の前半は医師や看護師とともに本人の話を聞き、後半は保健師のみ別室に移動して妻の気持ちを聞いた。妻自身も夫や子どもが津波以降精神的に不安定で、どう支えるべきかを試行錯誤していた。

その後、隔日に実施する避難所巡回相談。トイレの衛生状態や風呂、居室の清掃状況などの点検や健康管理を実施。町からの連絡事項なども管理者に届ける。織笠小学校講堂には夜間は 85 人のかたが生活されているが、日中は 20 人程度。年齢層は 30 代から 70 代の男女。睡眠障害と高血圧症で医療チームや再開した地元開業医から処方を受けている方がほとんどであった。講堂を段ボールで６つに仕切り、６つの班で生活していた。一班は 14 人程度。一つのコミュニティになっていた。織笠保育所は夜間 20 人程度の入所者がいるが日中は高齢者４～５人程度が残り、ほとんどが不在である。保育所の３室を使用しているが、部屋の中でのしきりはなかった。この時まで、仮設の入居者の当選が個人に知らされてはいるが入居は６月半ばと聞いていたが、管理者や入所者から明日６月１日から入居が始まるという話を聞いた。保健師が巡回すると血圧手帳を出し、今日の体調を話してくれたり、避難所内で咳き込んでいる人がいるなどの情報提供がある。この日は、地区担当保健師が休みで、山田町役場のミーティングもないことから仮設入居に関する情報提供はなかった。

４．活動日３（６月１日　水曜）

前任者から引き継いだ全戸訪問も織笠地区全体で残り 9 件ほどとなり、町からもらっていた地図も訪問終了の印だらけとなっていたため、残り９件と点在する要フォロー者が浮き出すようなマップ作りとリスト作りを行った。住民でない我々にとって織笠の住所表示は本当にわかりづらい。第 12 番地割 32-10 といった表記がされるが、地割の範囲も飛び地があったり、32 の 次の数字が続かないなど目当ての家を探すことが地図上でも難しい。そこで勝手に「希望ヶ丘団地」「高校前」等地図上に地名をつけ、地区ごとに訪問者数をまとめた。午前中、そのリスト作りなどの作業をし、残り時間は全戸訪問に出る計画であったが、前日からＡ・Ｂそれぞれのパソコンの調子が悪く、午前中かかって作成した表が印刷も登録もできなかったため、午後から再度の作業となってしまった。この作業により、Ａチームは、要フォロー者の緊急度合に合わせた介入時期や全戸訪問の未把握住居などが整理された。

夕方の山田町役場保健師とのミーティングでは、やはり仮設入所についての話となった。山田町の仮設入居の特徴としては、一つの避難所からまとまって仮設に入居するのではなく、町内の避難所から当選者が入居するというものである。６月１日時点では、山田町内に６つの仮設住宅が完成していたが、いずれも織笠地区からは少し離れている。織笠地区内では避難所のある織笠小学校内に仮設住宅を建設中であるが（写真５）、ここも小学校に避難している方が優先的に入所避難所の健康管理を仮設住宅で継続させたいという意志はあるが、６月６日まで準備を待ってしいとのことであった。その後、地区担当保健師に本日作成したリストと全戸訪問の残り件数を報告する。Ａチームでは仮設住宅入居先がわかれば、個人別の健康相談記録を仮設住宅ごとの　世帯票に添付でき、継続支援が可能であることを報告する。

この日は 18 時にホテルに戻ると、次のチームが大阪から到着。22 時 30 分まで、仮設住宅の最新の情報も含め、保健師活動の引継ぎを実施した。

（医療・保健・福祉）

・医療課題：医療機関が浸水したため、一時的に地元の医療機関の機能がストップした。

内科・精神科…他府県からの医療チームやこころのケアチームが震災直後から動き、５月末には開業医も診療再開しており、医療チームの撤退が

徐々に始まっていた。

整形外科…関節疾患の手術の延期や手術後のリハビリができない事例があった。

避難所では、寒さ予防のために毛布を床に敷き詰めている所も多く、バランスを崩すという理由で椅子生活ができなかった。

歯科…６月に入り、開業医が診療を再開。震災後３ヶ月が経ち、そろそろニーズが出てきた頃であった。

・福祉課題：介護…ケアマネジャーが震災数日後から動き始めていた。
停電のため、褥創マットが止まり、床ずれをつくった事例もあった。

５月末の時点で訪問入浴サービスやホームヘルプサービスは提供されていたが、ホームヘルパーは人材不足のためボランティアセンターが調整していたようである。

障害福祉…義足を津波に流されてしまったかたがおられたが、義肢等の業者が機能しておらず、６月末に巡回相談があると聞き、待たれていた。

・保健：山田町や宮古市では母子健康手帳の交付や母子健診などは通常通り実施されていた。母子健診にこころのケアチームが出務し、子どものメンタルヘルスにも気をつかわれていた。

（所感）

今回、被災地支援にあたり、３日間の活動期間でどれだけのことができるかという不安はあった。その中で、①大阪府からのミッション「１チーム制に向けた業務整理」②被災地の行政保健師と派遣保健師の連携　③被災地での直接支援 を大きなテーマとして活動した。３日間の保健師活動は、感染症予防、避難所や全戸訪問を通した健康管理、健康課題の抽出、こころのケア、次の健康問題への提言等多岐にわたっていたが本当に保健師らしい活動ができたと思う。津波が地域や人々の心に残した傷は本当に深い。町が再興するまでにどれくらいの時間がかかるのか、その土地に実際に行き痛感した。せめて人々が心身共に健康な状態を保て、これから先のことを考える元気がもてればと思う。

被災地への支援を認めていただき、貴重な経験をさせていただきましたことを感謝いたします。ありがとうございました。

派遣報告書
健康福祉部　糸川　真実　（任務：保健業務支援）

派遣先：岩手県宮古市
派遣期間：平成 23 年 8 月 1 日～平成 23 年 9 月 30 日

＜宮古市の概況＞

宮古市は、岩手県沿岸地方に位置し、岩手県内最大面積の約 1,260km^2、人口は 58,917 人で、水産業が主な産業である。

＜被災当時の宮古保健センターの様子＞

3 月 11 日 14 時 46 分に震度５強の強く長い揺れが起きた。宮古保健センターでは１歳６か月児健診が行われており、３組ほどの親子がフロアに残っていた。屋外に避難し、アスファルトにしゃがみこみながら長い揺れがおさまるのを待った。

14 時 48 分：津波第１波到達（0.2m）。

14 時 49 分：岩手県に大津波警報発令。職員全員が親子を誘導しながら高台へ避難した。

15 時 26 分：最大波到達（8.5m以上）。最大遡上高は 38.9m。

防波堤より高くなった波は一気に市街地へあふれ出た。

津波が建物を壊しながら進むのを見て、保健センター職員と親子は高台から山を登り、中学校へ避難した。

・宮古保健センターは完全浸水、半壊・使用不能となり、宮古市役所は床上浸水した。
・宮古市最大の被害が出た田老地区では田老万里の長城と呼ばれた堤防の半分が崩壊し、田老保健センターは床上浸水した。

＜宮古保健センター仮事務所＞

５月、避難場所であった中央公民館２階に宮古保健センター仮事務所を開設した。以前の保健センターは改修せず、移転先や移転時期は全く不明。

冷房がない夏は暑く、わずかな暖房で冬は寒さが厳しい。

田老保健センターも床上浸水で修繕中のため、田老保健センター保健師２名もこの仮事務所へ移動した。

＜８月、９月の宮古市の様子＞

ヘドロはなくなり、瓦礫の撤去が進められ、解体待ちの家屋が残っていた。二車線以上の大きな交差点の信号が復旧している途中だったが、単線道路の信号は壊れたままであった。交通量の多い時間帯には県外警察官により交通整理が行われた。節電のため 19 時には店舗が閉まり、街灯がほとんどないため、日没後の町は真っ暗で自転車のライトを点灯しないと移動できない場所も多い。（９月末の派遣終了までに街灯の数は増えてきている。）

8 月 10 日に最後の避難所が閉鎖され、仮設住宅や民間住宅へと移った。修繕中または修繕待ちの家屋に住む人は、２階で生活し、１階は未だに使えない状態であった。修理業者のマンパワー不足で、2011 年内に修繕完了できればよいが、修繕できずに冬を越さねばならない家屋が多いと予想される。

宮古市の被害状況　８月時点

死者	518 名
行方不明者	124 名
家屋倒壊	4,675 棟

市役所近く、鍬ヶ崎地区住宅街

市役所すぐ横の地域

気持ちを表出できることは良い。
「今までありがとう」という書き込みも見た。

田老地区メインストリート。両脇は商店街だった。

田老地区。約２百人が亡くなった。

<u>＜８月、９月の宮古市への保健師の派遣状況＞</u>

大阪府・大分市・下関市・東京都などからも同時期に保健師の派遣があったが、７月で大阪府以外からの派遣は終了となった（大阪府より８月…３人体制、９月…２人体制）。

大阪府の派遣形態は宮古市と併任勤務で宮古市職員となるため、災害業務以外の通常業務へも従事した。９月末で大阪府から宮古市への保健師派遣は終了、私たちが最後の県外派遣保健師となった。今後は岩手県保健師へ応援要請していく。

<u>活動内容＜災害業務＞</u>

①仮設住宅家庭訪問

岩手県内では半年毎に保健師が仮設住宅の全戸訪問ローラー作戦を行う計画である。

宮古市では５月から入居が始まり、建設完了にあわせて随時入居している。

入居後の住人名簿を片手に、対象者の家を訪問するが、名簿が間に合わない場所では、住人を聞き取ることから始まった。

世帯住人全員の健康状態を聞き取りで確認し、必要な人には血圧を測定し、８月は熱中症予防啓発、９月は冬の寒さ対策についての資料を配付した。自分のプライベート空間が確保されたことから、ようやく安定したという人が大多数だが、避難所とは異なる孤独感や無力感を感じる人（特に独居世帯）や、考える時間が増えたので漠然とした不安がぬぐえないという人もいる。

他市町村から宮古市に逃れてきた人も訪問対象であり、山田町民や大槌町民は居住環境の変化から、心身ともに疲労が大きい。

次回ローラーは平成 23 年 10 月から開始予定。なお、保健師と同様に栄養士も岩手県栄養士会の協力を得て、全戸訪問を行っている。

→保健センターで地区担当保健師（宮古市職員）と全件カンファレンスを行う。
　　要フォロー者：派遣保健師または宮古市地区担当保健師が再訪問を行う。
　　必要時には、栄養士や心のケアチームへつなぐ。
　　フォロー無し：半年後の全戸訪問ローラー作戦で確認。

（事例）

・消防団の仕事があったため、被災時は妻と別々の方向へ分かれ、妻を失った 70 歳代男性。
・エアコンを使用せず玄関・窓も閉め切り、安否が心配される高齢者独居男性。
・山田町民。津波の被害は免れたが自宅が全焼して「悔しい」と怒る鬱病の妻をもつ夫。

仮設住宅。建築業者によって、作りだけでなく、湿気や寒さ対策なども異なる。

②被災地区家庭訪問

被災直後の３月～４月に派遣保健師が被災地区を全戸訪問しているが、避難所や他市・他県に逃れて不在だった者を８・９月に再度全戸訪問し、居住者の把握と健康状態の確認を行った。また、要フォロー者の継続訪問も多い。住民名簿と地図を頼りに訪問するが、家がなかったり、道が機能していないなど地図と実際の景色が全く異なるので、道に迷いやすく、家に辿りついても居住していない世帯も多く、訪問活動は困難だった。

仮設住宅住民が重視されやすいが、一方で被災地区の家屋が残った住民も被災者である。仮設住宅には野菜の移動販売、慰問イベントなど人の出入りが毎日多数あるが、残された家々への支援の手はほとんどない。また、家が残った＝津波が到達しにくい場所だったことから、多くの人が高台や自宅の２階から津波が来る景色を目撃している。

「家が残ったのだから私は恵まれている」と自分の気持ちを表出しない人が多く、仮設住宅入居者だけでなく、被災地区居住者も閉じこもりや鬱病のリスクが高い印象を受けた。修理業者マンパワー不足のため、家屋修理が完了している者は半数で、現在も被災した１階部分の修理を待ちながら２階で居住している人がいる。修理後に２階から１階へ荷物を下ろす際、ボランティアに来てほしいと言う高齢者が多い。

→保健センターで地区担当保健師（宮古市職員）と全件カンファレンスを行う。
要フォロー者：派遣保健師または宮古市地区担当保健師が再訪問を行う。
必要時には、栄養士や心のケアチームへつなぐ。
フォロー無し：フォロー終了。

（事例）

・避難所生活の頃から他人の話し声が気になって不眠が続く 50 歳代女性。
・血圧が 200/100mmHg 以上だが、服薬管理不良の女性高齢者。「病院に連れてってもらうために息子の仕事を休ませられない」と話す。

高台のため、家屋に津波の被害はない。

高台からの景色。（津波の被害をすべて見てしまった人が多い。）

工事未定。１階部分は被災したまま、２階で暮らしている

地図上ではこの先に家があるため、進む

③仮設住宅健康教室・健康相談

各仮設住宅の集会所または談話室で、検尿・血圧測定と個別健康相談を実施した。

健康相談のあとに、保健師や栄養士が鬱病予防・熱中症予防・高血圧予防の講義、運動実習などを行う。

地域の精神科医による PTSD 予防・自殺予防の講義では「絶対に自殺しないでください」という直接的なメッセージを発信した。口角をあげる『あいうえにっこり体操』には見本に宮古市保健師と市長の顔を起用し、市民の気持ちを勇気づけた。「避難所でがんばりましたね。仮設に移ったこれからはがんばらな

いでください。」という精神科医の言葉に涙ぐむ人が多かった。

集会所や談話室で事業を行う際には、事前に保健師や保健推進員がチラシやポスターで案内をした。参加者数が多い所は、もとの自治会の結束力や地域のつながりが強く、住人同士がお互いの健康状態を把握して、熱中症注意の声かけや散歩に誘い合うなど主体的に健康管理が行えていた。

血圧を測定して、健康相談

あいうえにっこり体操

介護予防教室４回シリーズ

高血圧予防の指導をした

<u>活動内容＜通常業務＞</u>

①乳幼児健診（１歳６か月児、３歳児）

５月から再開。津波でカルテが流されたため、以前の健診情報がなく、丁寧な聞き取りが必要であった。被災後から栄養士も全児対象に面接指導を行っている。毎回、保健師と栄養士が全ケースを振り返り、健診従事者全員でフォロー方法を検討した。

②成人がん検診

８月から再開。問診業務に従事。

③特定健診事後結果説明会

８月から特定健診再開。今年度は特定保健指導を実施できないため、特定健

診事後結果説明会を行い、希望者に個別面接で健診結果の説明と保健指導を実施した。集団健康教育では保健師がメタボリックシンドローム、栄養士がバランス食・減塩について講義した。

感想

赴任して半月後、宮古市民の多くが初盆を迎えました。宮古市のお盆は 8/1、8/7、8/13、8/14、8/15、8/16、8/20、8/31 に自宅前で松明かしと花火を灯して先祖や亡くなられたかたの霊を祀ります。連日灯される松明かしに、宮古市民はもともとお盆を大切にされている印象をうけました。まだ行方不明の家族が見つからない人、祭壇を流された人など、どのようにお盆を迎えたらいいかと戸惑いを抱える市民も多数いました。お盆を区切りに前を向き始めた人、被災や死を受け止められないままのお盆行事に疲労を感じた人など様々でしたが、このお盆は一つの節目となりました。

災害業務の中では、特に訪問業務の重要性を何度も感じました。「通常、PTSD の治療は半年程度だが、今回の被災の PTSD 治療は１年以上要する見込みだ」と現地の精神科医師は判断しています。被災当時の苦しみを抱えたままの孤立や PTSD、鬱病のリスク者を訪問先で発見し、心のケアチームにつないだケースが８・９月にもあります。これらのケースは「今まで誰にも言えなかった」「人前で泣かないようにがんばっていたのに」など泣きながら話され、訪問は長時間に及びます。訪問をしなければ発見できなかったケースです。

気持ちを表出しにくい東北地方の気質がありますが、室内の様子を観察し、会話の中から健康面を聞き出し、心身の不調や健康課題を引き出す家庭訪問業務は保健師活動の原点です。精神科医や臨床心理士による“心の相談”には「大丈夫です」と最初は消極的になる市民が多いのですが、日頃から訪問や健康相談で地域に出向いている保健師には気持ちを表出することができ、保健師から心のケアチームへつなげることができていました。訪問業務を仮設住宅だけでなく、被災地区の残った家屋にも行ったことが、宮古市の素晴らしい保健活動の一つだと思います。

９月の派遣終了時点で、宮古市保健師に聞くと、「今、災害業務と通常業務は７：３」だと言っていました。通常の母子健診フォローや成人の特定保健指導

に十分に取り組めない状態がしばらく続きそうです。10 月から２回目の仮設住宅ローラー訪問が始まり、これから発見するフォローケースは深い課題を抱えて長期化することが予想されます。まだやるべきことはたくさんありました。帰らなければならない私たち派遣保健師が次にすべきことは、伝え続けることだと考えています。宮古市の保健師だけでなく、健康課事務職員からも動画や写真をたくさん託されたので、被災の現状と復興への取り組みを忘れないように、そして、確実に起こり得る東南海地震に備えて、多くの人に伝え続けたいです。

最後になりましたが、今回の被災地派遣では多くの人に支えられ、役割を終えることができました。宮古市職員と市民が一丸となって復興に取り組む、そのお手伝いをさせていただく機会を与えてくださった宮古市、大阪府、箕面市に心から感謝しています。今後も宮古市を訪れ、変化の様子を見聞きし、宮古市職員と市民に協力し続けたいと思います。

職員手記
健康福祉部　糸川　真実　（任務：保健業務支援）

派遣先：岩手県宮古市
派遣期間：平成 23 年 8 月 1 日～平成 23 年 9 月 30 日

報告書に書けなかったこと…

・２か月間の食生活の変化
　ホテルで朝夕食の提供がありました。昼食は定食屋で外食したり、保健センターで宅配お弁当を頼んでいました。

　全ての料理の味付けの、醤油・味噌などの塩分がとにかく濃いんです。薄口醤油がない。
　みんなで気をつけて残していましたが、他市保健師も私も血圧が 20 上昇しました。帰阪後 10 は下がりましたが、その後なかなか下がりません。

　また、毎日魚ばかり食べていたので、最初は下痢になりました。大阪に戻って肉／魚が半々の生活に戻ると、帰阪 10 日後に急性虫垂炎（盲腸）になってしまいました。
　結構、身体に応えていたように思います。

・心理面
　被災地での生活は毎日しんどいことが多かったですが、書くことが多すぎて日記は１週間でギブアップしたほど、充実していました。
　それよりも、大阪に帰ってからの１か月が人生で一番しんどく、毎日泣いていました。
　被災地で店が 19 時に閉まるから夜は真っ暗で、街灯もないので真っ暗というより真っ黒の世界。　夜はローソンの光しかなく、ローソンぐらいしか行く所がない生活から一変し、　大阪の街が明るすぎて、目眩がして気持ち悪かったです。

震災を忘れたぐらい平和な大阪の暮らしも申し訳なく思っていました。
まだまだたくさんの仕事があったのに、帰ってこなければならなくて、大阪での仕事へ向き合うことができませんでした。
箕面市の風景で宮古と似ている場所を見たとき、カルテで宮古で会った人と同じ名字を見たとき、宮古のホテル朝食でほぼ毎日出た納豆・卵・きんぴらごぼう…などを食べたとき、そんな物凄く些細なことで、宮古の風景や被災者の顔がフラッシュバックして仕事中でも泣いてました。
電車のアナウンスの「都島方面…」と言うだけで、「宮古」にフラッシュバックしてしまうこと、想像できますか？？
そうやって大阪にある宮古につながる物事を見つけては泣いていましたが、少しずつ納豆や食事や景色を見ても「悲しい」から「懐かしい」という感情に変わって、今は宮古市のニュースも見られるようになりました。

そして、これは一番驚いたのですが、派遣前の職場に戻るだけなのに、仕事が全然分からなくなっていたことです。
人の名前、地区の名前、物品の場所など全てが宮古市に上書きされてしまい、取り戻すのに苦労しました。あれだけ関わっていたリスク重度の虐待ケースの名前を言われても　全く誰のことだか分からなくなっている自分に驚きました。
元の職場に戻る・元の家に帰るのではなく、「新しい職場に移動する・新しい家に引っ越す」という感覚に近かったです。

また、自分の気持ちを打ち明けられる人がなかなかいませんでした。
「現地に行った人にしかこの気持ちは分からない」というのは、相談されたほうも私も感じているため、大槌町に行った西田さんや勝川さん、宮古市で一緒に過ごした他市保健師と電話をして、岩手に戻りたいという、帰阪後に味わう苦しみを共有し、ピアカウンセリングしていました。
健康増進課の先輩たちが私がしんどそうなことに気づいて、帰阪後に休めるように事業調整してくださったのでありがたかったです。

「岩手に戻りたい」とずっと思っていましたが、帰ってから２か月経った 12 月ぐらいから、ようやく、「行きたかったらまた行けばいい」と自分で切り替えることができました。

宮古市職員が代わる代わる週に１回は連絡をくださるので、今も絶えずメール交換をしています。

１月は被災以来東北を出ていない宮古市職員を大阪に招いて、観光をしました。

３月１週目の週末は宮城県気仙沼にボランティアに行きました。

３月２週目の週末（３・１１）はとても大阪にいるような気分になれないので、宮古市支援に行っていた吹田市・河内長野市・泉南市保健師と宮古市に行きました。

遺品返却ボランティアをして、追悼式に出席し、保健センターの人に会い、被災地を車でまわりました。宮古市長にもお会いする機会がありました。

５月には宮古市長が「震災復興フォーラム」のため、関西に出張に来られるので、宮古市派遣の大阪チームで食事をする予定です。

こうやって、きっと半年に１回以上は宮古市や岩手県などの被災地に戻って、一緒に働いた宮古市職員、仲良くなった市民、安否が心配な市民を訪ねたくなると思います。

でも、この被災地派遣のおかげで、大阪の防災にも興味をもつようになり、東南海・南海地震への対策は個人レベルで徹底して準備しなくてはいけないと思いました。今回の宮古市職員と市民の経験から学び、次の災害に役立てることを私も東北の人も望んでいます。

だから、いつか来る近畿の地震のために、そして岩手の人のためにも保健師の仕事をずっと続けたいと思うようになりました。

こんなふうに自分が思うとは、予想していませんでした。

宮古市で働けたことを、宮古市・箕面市・大阪府に心から感謝しています。

もし、今後も岩手県に保健師派遣の要請があれば、ぜひ行きたいです。

今年の 3/11 に宮古市に行ったあと、大阪に戻っても違和感なく働けています。切り替えの方法が分かったので、今後、被災地支援の機会があっても、戻ってから大阪への順応もできると思います。

秋以降であれば、個人的には調整できると思うので（職場が了承するかは分かりませんが）、もしも要請がありましたら、お声かけてください。

現地からの職員レポート　（後任の参考に、現地での生活状況を報告したメール）
健康福祉部　糸川　真実　（任務：保健業務支援）

2011/08/29（糸川→職員課）

宮古市

宮古市の状況と保健師活動

・宮古市は町が合併して大きくなったばかりで、お金に若干余裕があった。政策は早めに判断できている。
・生死未把握なし。避難所は 8/10 に閉鎖した。
・仮設住宅を 8 月末までに全件訪問予定。3 回不在なら訪問したとカウントする。
・土地柄で、お盆を大切にされている。今年は初盆になる人が市民にも職員にも多いため、お盆期間は 9 割くらいが休み。お盆の訪問は良くないということもあり、派遣保健師はその間 5 日間入力作業の手伝い。
・派遣保健師は 17:30 には保健センターを出るように言われているので、残業はなし。
・冬は 16:00 日没、17:15 には真っ暗になる。
・8 月に保健師の新規採用募集をしている。

宮古市の宿舎（沢田屋）と生活

・旅館の 2 人部屋。トイレは室内とパブリックスペースにいくつかある。お風呂は室内のユニットバスと大浴場があり、大浴場を利用している。食事は朝食と夕食が出る。2 日に 1 回部屋の掃除をしてくれる。
・徒歩 10 分のところにコインランドリーが洗濯機 6 台、乾燥機 3 台で混雑。2 日に 1 回洗濯しており、1 回 2 時間かかる。
・泉南市の保健師と同じ部屋。その人は大槌町の戸籍担当事務職員と仲がよく、休日は一緒に出かけようとしているが、相手が忙しすぎるため、会わない日もある。
・衣食住には困らないが、マイカーがないため、息抜きできない。
・週末は宿舎にいると職場にいるような感覚が離れず、リフレッシュできない。街は被災しているため、土日のうちどちらか 1 日でも遠くへ行かないと気分

が減入る。

・移動手段は自転車かレンタカーで、自転車だと遠くに行けない。レンタカーは 1 日 1 万円で費用が高くなってしまう。タクシーで花火を見に行ったら片道 20 分で 3400 円かかった。街から出られないストレスをお金で解消する感じ。

・週末どう過ごすかを決めるのもストレスあり。観光案内所は 18 : 00 までで早く閉まってしまう。すべて自分で計画・調べて出かける。

感想

期間の長さ

・1 週目は慣れない 2 人生活でとても長く感じ、ホームシックになった。2 週目は慣れた。3 週目には生活に自信が持てるようになったが、今後のことを考えると長いと思う。

・最初の 2 週間を乗り越えると後は短く感じられるかもしれない。しかし、1 か月以上は長い。今回はお盆があり、供養の花火や盆踊りなどの行事で一息抜けた。1 度帰省できることもあって区切りがつけるが、秋・冬はそんなイベントもないため、とても長く感じると思う。

保健師活動

・人口が少なく、保健師活動が丁寧。

・地域の人は保健師として認識してくれるので、素直な保健指導ができる。

・全戸訪問を行うので、保健師活動の原点が学べる。

・全件カンファレンスで全ての家庭状況を把握している。大阪では考えられないことなので、ゆとりがあると思った。

・ボランティアではなく、宮古市の公務員として活動するため、地域の人に感謝されながら働くことができる。公務員になれて良かったと思った。

・宮崎チームや東京チームなど、派遣チームは避難所を担当するが、今回のように職員として派遣されると、乳幼児健診やがん検診、それらの入力などもできる。普段の保健師活動に近いので、地域の状況をよく理解できる。

心理的負担

・家庭訪問で対象者の話を聞くごとに涙していた。代理体験で、保健師も心的

ストレスを受ける。1 日 2 時間話を聞くだけでも心的障害（PTSD）のスイッチが入ると現地の臨床心理士に教えられた。
・一人でご飯を食べることのストレスがある。保健センターの人や相部屋の泉南市保健師と食べることもあり、それも良いが、3 日に 1 回は普通の話がしたくて、大阪の人に電話している。

大槌町

大槌町の状況

・宮古市より被害が大きい。
・職員被災が多く、保健師は 7 人中 5 人死亡。2 人しかいない。
・役場がなくなり、指導者がいない？（みどり街づくり課の西田さんも一人でやっている？）
・今年だけお盆は全庁閉鎖。
・信号が普及していないため、危険。がれきも多い。
・通勤は宿泊先の遠野町から大槌町の役所まで 2 通りのルートしかなく、両方とも峠道で、片道 1 時間 30 分かかる。
・派遣職員はマイカーが 1 台割り当てられるが、道路事情が悪いため危険。
・泉南市から派遣されている戸籍担当の事務職員は、毎日 20:00～21:00 まで残業。毎週土日もどちらか 1 日は勤務している。今週は土日両方勤務。時間外手当が 1 か月で 25 万円になるほど働いている。
・残業が多く通勤時間が往復 3 時間になるので、帰ったら寝るだけの生活。

大槌町の保健師活動

・保健師情報なし。
・避難所がまだあるかもしれない。

大槌町の宿舎と生活

・2 人部屋。手前と奥で 1 人 1 人使えるようになっているが、手前はテレビあるが奥の人が出入りするたびに通られるため、プライバシーが確保できない。逆に奥の人はプライバシーが確保できるがテレビがない。
・鍋や皿、掃除道具、シーツは持参。
・風呂、トイレ、キッチンは共同だが、掃除は自分達でしなければならない。

掃除の役割分担や掃除方法の違いなど、気を使うことが予想される。
・自炊もできるが、帰宅時間が相部屋の人とそれぞれ違うし、帰宅が遅いため、外食になってしまう。
・冷暖房がなく暑さで寝ることができないため、休日は車を走らせ、車の冷房で暑さをしのいだりしている。
・割り当てられるマイカーがみどり街づくり課と合わせて 1 台になってしまうと、週末も一緒に行動もしくは譲り合いで気を使うことになる。
・週末リフレッシュできない恐れあり。

大槌町の冬

・冬の遠野は雪道のため、圧雪のため、スケートリンクの上を車が走るような状態。軽自動車は危険、四駆がいいと勧められている。
・ブレーキを踏まない特殊な運転が必要。時速 20km 以下となり、通勤の 2 ルートのうちひとつ（笛吹き峠）はかなり危険なため、地元民も「絶対使ってはだめ」と言う。
・もう一方の仙人峠に集中し、更に渋滞する。雪が降った翌日などは、朝 7:30 出勤していた人なら朝 6:00 出勤になる。
・雪の怖さを知らない観光客などは、ブレーキを踏まずに運転することを知らないため事故を起こす人が多い。
・冬は外に出られず、更にリフレッシュできないのではないか。
・現地の人からも雪を体験している人が派遣されたらいいのにと言われた。
・大槌町で働くにしても、同じ 1 時間半通勤なら遠野町ではなく宮古市の沢田屋に泊まって海岸線を通ったほうが峠道を通らなくて済む、雪のリスクが減るのにという宮古市職員の助言あり。

他市の保健師派遣状況

・大阪市　８月から宮古市へ 2 人を 1 か月ずつの予定だったが、8 月 1 人派遣で終了することに変更。
・岸和田市　9 月中旬から宮古市へ 3 週間の予定だったが、中止となった。

（2011/09/05　糸川→健康増進課）

健康増進課の皆様
宮古市の糸川です。
一時帰宅のときに総務課が貸してくれたパソコンがようやくネットにつながりました！これからは写真で報告もこまめにできると思います。
やっぱりパソコンは必要でした…。今まで報告が少なくて申し訳ありませんでした。

大槌町にいる西田さんが職員課と私にも派遣状況報告のメールをくださったので、抜粋して転送いたします。
現地の様子では宿泊先の遠野市⇔大槌町の車移動は冬は不可能の判断のようです。
宿泊先を宮古市または釜石市も検討しているみたいですが、雪は降らないけど、毎日凍結はします。
沿岸部は北から宮古市⇔山田町⇔大槌町⇔釜石市となっていて、私も週末に車で通りました。カーブが多くて、交通量も多いです。雪と同じで、時速２０キロ以下の運転と、ブレーキを使わない特殊な運転方法が必要だそうです。
のろのろ運転で冬は渋滞するので、２時間の通勤は見ていたほうがよさそうです。

私の相部屋の泉南市保健師さんの泉南市同期が大槌町で戸籍事務をしているので、聞いてもらった新たな情報としては、８月は高石市の保健師さん（４７歳）、９月は東大阪市の保健師さん（５７歳）がいて、相部屋しているらしいです。
今までの保健師は１か月交代のようです。
大槌町は生存保健師の数が少ないので、その場で判断することが求められるためか、経験年数の長い保健師が行っているみたいです。

ちなみに、支給されている車はカーナビなし、コンパクトカーではなくプリウスのやや大きめの普通車らしいです。（大きくないと冬は無理だそうです。）
派遣期間の短縮や宿泊先を変更しても、根本的に雪と凍結運転に自信がなけ

れば、派遣は難しいのではないかというのが現地職員や現地にいる派遣職員の意見です。

（2011/09/20　糸川→健康増進課）

健康増進課の皆様

おはようございます。
近畿の雨が心配です。大丈夫でしょうか。
こちらも台風と前線の影響で今週は雨です。
昨日から最高気温１６℃、朝夕は１２℃になり、秋がなく冬になった印象で大阪チームはぶるぶる震えています…。

１８日（日）に大槌町にいる西田さんと会って話をすることができました！
西田さんがＡさんが大槌町に来ることを広域連合のＢさんに聞いていて、釜石市の宿泊をかなり心配していました。
「知らないで来るとびっくりするから伝えてあげて」とおっしゃっていて、
大槌町・宮古市には私たちがいるけど、釜石市には誰もいないので情報が少ないから釜石市の様子を見に行ったらいいかも、とアドバイスを受けて、１９日（月）に私も車で行ってみました。
Ａさんが泊まるホテルマルエも行ってみました！
もう少し暗くなるまでいたかったのですが、釜石市→宮古市に暗くなると２時間で戻れないのですみませんが１７：１５までで退散しました。１７：３０には完全に日没でした。

西田さんに聞いたお話と私が見たことを以下にまとめました。
急いで書いたのでまた箇条書きで申し訳ありません。
出発までに気になることがあったら教えてください。
西田さんも私も、こっちにいる間にたくさん情報を伝えたいと思っているので、すぐに調べます☆

近畿の台風被害が出ませんように…皆様、気をつけてください。

ホテルマルエの情報

・ホテルの１階共有スペースに電子レンジ、お湯などがあります。
・女子風呂は湯船が１．５人の広さ、シャワーは１つでした。浴室は鍵がかけられます。脱衣場は洗面台とイスが２つずつ。２人用の風呂なのか１人用の風呂なのか不明…
・女性のみコインランドリーが使用できるが、洗濯機１台、乾燥機１台のみ。
・自転車は無料レンタルできる。玄関に５，６台ありました。
・この日は女性客４人、男性客５人の姿を見ました。（宮古市ホテルは圧倒的に男性客が多いです。）
・部屋の広さはベッドがぎりぎり入る広さなので、人が１人立つとスーツケースを広げるスペースがないらしいです（西田さん談）。
・ホテルマルエ近辺にコインランドリーはないそうです（ホテル従業員談）。

ホテルマルエの近辺（西へ）

・徒歩１０分の場所に釜石駅やローソンあり。
・徒歩１５分の場所にスーパー「マイヤ」夜 22 時まで、クリーニング屋、薬王道、ケーズデンキあり。
・マイヤは夜に行くとお総菜やお弁当はほとんど売り切れているらしいです。
・薬王道はドラッグストアで何でもそろいます。
・こちらへの道は舗装が残っているので、凍結していなければ自転車でも行ける。街灯も信号もあり、交通量は多い。
・釜石駅から徒歩１分にまんぷく食堂がありますが、11:30～15:00 営業。
・その他、こちら側には外食できる店はない。

ホテルマルエの近辺（東：市街地へ）

・商店街があるけれど、壊滅的でぼろぼろの店や家が残されています。
・店は全く営業していない。
・夜は危険なので来てはいけない。
（なぜ危険か？）街灯が全くない、信号が止まっている、交通量は多いので事故に気をつけて歩行しなくてはいけない、暗い色の服だと車から見えない、瓦

礫や歩道が崩れている状態なので自転車は絶対に禁止、歩くのも障害物につまずきやすい。もしも歩くなら懐中電灯が必要。人通りも少ない。
・こちらの方向にホテルサンルートとベイシティホテルがある（ホテルマルエから気をつけて歩いて１５分ほど)。大槌町勤務の人も滞在しているが、堺市の建築職は９月末までで、今後の釜石市滞在者がいるのかは不明。
・こちらの方向に車で２０分の距離に弁当屋があるらしいが、ここしか食事とれる場所がなく、弁当屋待ちの車で渋滞になる。弁当屋には歩いては行けない（危険なので)。

釜石市の衣食住

・食事は毎日外食だけど、スーパー「マイヤ」で買ってくるという選択肢しかないです。
・コインランドリーと浴室は取り合いが予想されます。
・部屋が狭いので荷物たくさん持参してはいけない、なるべく荷物を少なくする努力が必要かもしれないです。必要な物が出てきたらあとで送ってもらう。

釜石市の印象（宮古市糸川）

・被害のひどさと言うよりも、宮古市に比べると復旧が遅い印象です。
・宮古市は毎日家が解体・撤去され、空虚な何もない空間が広がっていたのがしだいに草が生い茂って、何があったか思い出せないぐらい草原のようにも見えます（それも悲しい景色なのですが…)。
・宮古市も解体・撤去してない家がごろごろあるけれど、釜石市のほうがごろごろごろごろ…とある印象でした。解体・撤去がすすんでないので、町が荒廃している景色です。解体・撤去がある家にはカラスが群になって集まってました。
・歩道の整備ももう少し時間がかかりそうで、道がぼこぼこ、石やコンクリートがごつごつしています。
・商店街の店が再開していないので、灯りがないです。
・街灯もありません。宮古市は私がいる２か月でずいぶん街灯ができました。
・町の印象として宮古市の２か月前ぐらいの状態なのかなぁ、と思いました。もちろん、教育・福祉・医療や仮設住宅やどの分野の復旧を急ぐかは自治体によって違うので、宮古市が優れているわけではありません。宮古市もまだ

まだです。

<u>その他</u>（大槌町西田さんの言葉をそのまま使ってます。）

・大槌町での昼食はローソンまたは救援物資で余っているレトルト、インスタント食品の二択だけ。大槌町の仮設ローソンは周囲に店がローソンしかないため、全国一の売り上げらしいです。
・スキーやスノボをしない人には冬は観光は温泉以外ない。小岩井牧場も冬季は休園。
・毎週温泉では、リフレッシュできるのか心配。
・ぎりぎりの生活が成り立つぐらいの復旧だけど、あくまでも気をつけた方がいいというレベルの話です。どれだけ我慢できるかで、住みやすさが決まると思います。２日続けてローソンのオニギリは無理、という人には釜石市と大槌町は厳しいと思います。
・大槌町や宮古市は私たち派遣職員がいるので、情報を渡せますが、釜石市の詳細は分からないので、事前になるべく釜石市の写真や被害状況を見ておいてください。知らないで来るとびっくりすると思います。
・大槌町の状況は現地で引き継ぎ受けられるので、現地で知れば大丈夫です☆

派遣報告書
総務部　勝川　美和　（任務：保健業務支援）

派遣先：岩手県大槌町

派遣期間：平成 23 年 10 月 5 日～10 月 31 日

１．勤務場所

大槌町役場（仮庁舎）　福祉課　健康推進班

２．健康推進班の概要

（１）　主たる業務内容

母子保健・成人保健にかかる業務

（２）　班員

班長以下７名　班長：栄養士　１名

主任主査保健師１名

保健師３名（うち１名新規採用職員）

栄養士１名（新規採用職員）

事務（臨時職員）１名

３．勤務状況について

（１）通勤方法

車の貸与を受けていなかったため、同時期に大阪の市町村から派遣されている職員（本市含む）で、大槌町から車の貸与を受けている職員の車に同乗

し通勤。退庁時間が異なる場合のみ、路線バスを使用。

（２）１日の流れ

８時３０分　　始業開始とともに朝礼

１２時　　昼休憩開始

１３時　　午後の業務開始

１７時１５分　　終業

＊派遣保健師については残業なし

（３）業務における派遣保健師の役割

町役場の保健師は各担当業務が割り振られているが、派遣保健師には業務を主担で割り振られてはいない。遅れ遅れになっている通常の保健事業を再構築し、実施していくために、各保健師の担当業務のサポートが派遣保健師の役割でした。

（４）実際に従事した業務

【仮庁舎内にて】

◆H23 年度予防接種者（定期接種以外）の履歴表の作成

◆予防接種履歴の一覧発行（町民さんから依頼があった場合）

◆健康管理システムへの予防接種（定期接種）履歴の入力

◆高齢者インフルエンザ予防接種に関すること

・町民向けのインフルエンザ予防啓発の資料作成（健康相談や健康教室で使用）

・医療機関へのインフルエンザ予防接種事業の説明書の作成

・インフルエンザ予防接種に関する案内（Ａ４で４枚）（広報とともに全戸配布）

・その他関係資料の作成

◆ガン検診対象者抽出・名簿作成

◆電話・窓口対応

仮設庁舎

【仮設保健センターにて】

◆３歳児健診

◆ポリオワクチン予防接種（２回）

仮設保健センター

※保健センターでの業務実施時には、保健師学生（実習生）も参加。

【仮設住宅集会所にて】

◆仮設住宅への巡回健康相談（２回）

４．生活面について

（１） 滞在先

大槌町役場から車にて２，３０分の釜石市内のホテルに滞在。滞在ホテル自身も津波で被災しており、津波警報時には高台への避難を必要とする場所にあったことから、念のため、常に避難できる準備をしていました。

（２）生活物資について

ホテルから向かって駅方向では、スーパーやコンビニ、飲食店などが被災前と変わらない様子で営業されており、生活に必要なものは全て徒歩圏内で賄える状況にありました。

（３）通信状況

職場、滞在ホテル共に携帯電話やインターネットなどの通信状況に特段問題はありませんでした。

５．被災地の状況

震災から７カ月が経過しようとしている時期でしたが、瓦礫が山積みされ

た場所があったり、解体を待つ建物がかなり多く残っていたり、復旧していない信号もまだ多く、交通量が多い場所では警察官が手信号をしている場所がありました。また、地盤沈下で大潮の際、道路が冠水する地域がありました。

冠水のようす

６．派遣任務を終えて

大槌町の保健事業が少しでも早く元の軌道に戻り、町の保健師さんたちが少しでも多く町民さんと関わる時間がもてるよう、陰ながらお手伝いさせて頂けたらという思いで、約１ヵ月間過ごしてきました。

１か月という時間は非常に短いもので、あっという間に過ぎていきました。

私が着任した時期は少し事業が落ち着いてきている頃でしたが、全ての資料がなくなり、何もないところからもう一度作り上げていく作業は本当に大変なものだと感じました。４月末の仮庁舎開庁以来、ずっと走り続けてきて町の保健師さんたちは、皆、今の方が疲れを感じていると仰っていましたが、そんな状況にも関わらず、町民や仲間を想い合いながら、一歩一歩着実にしっかりと前に進んでいく保健師さんたちの姿からは “真に生きること、生きる力、働くこと” など多くのことを学ばせて頂きました。

また町民をはじめ、岩手県の方から、何度も心の琴線に触れるような心のこもった「ありがとう。よろしくお願いします。」という言葉をかけて頂き、人を想い合う大切な心を多くの場所で感じました。

無事に１か月の任務を終えることができたのも、多くの方のサポートがあったからこそだと感じています。現地で感じたことや経験してきたことを、これ

からの仕事に生かしていくとともに、今後も被災地への支援で、自分ができることをやっていきたいと思います。

最後になりましたが派遣に際しお世話になった各関係者の皆さまに、この場を借り感謝申し上げます。ありがとうございました。

職員手記
総務部　勝川　美和　（任務：保健業務支援）

今回の被災地派遣の話は、全く予想をしていなかった話でした。

でも被災地の悲惨な状況をテレビなどで見た時から、どんな形であれ支援をしたいと思っていましたから、話を聞いた瞬間、心が迷わず行くことを決めました。

ただ、被災地からの派遣要請は、地域保健師であり、先輩派遣保健師から「未経験で行くことには無理がある」などと言われておりましたから、経験のない私が行くことには、やはり不安はありました。　【編者注：勝川保健師は、産業保健師として箕面市に勤務】

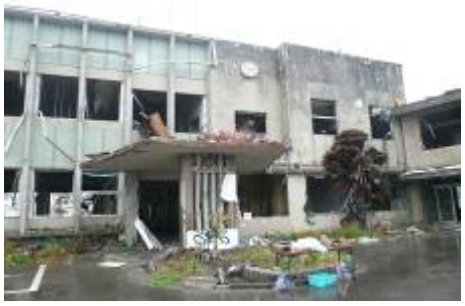
しかしながら、自分にしかできないことがきっとあるはずという気持ちもあり、微力でも力になれればと思い、派遣を決めたのでした。

赴任当日は、朝一番の飛行機で飛び立ち、その日の午後から勤務に就くことになりました。

大槌町の役場は津波で流され、仮庁舎であるということは現地へ行く前から聞いて知っていましたが、実際流された役場や町並みを目の当たりにすると、言葉では言い表せないほどの壊滅状態で、震災から半年以上の月日が経っているのにも関わらず、復興は程遠い状態でした。

役場の業務も復興途上の真っ最中という感じを受け、実際、復興までにはまだまだ時間がかかるなという印象でした。

旧大槌町役場



大槌町役場仮庁舎前

業務自体は、最初の２日半で地域保健の全体像、実際に進行している事業、どういう部分をサポートする必要があるのか、自分に何ができるかということを大まかに把握できましたので、今後１か月間、ここでやっていけるという手ごたえを感じることができました。

業務に関しては、限られた時間の中で通常の保健事業が軌道に乗るよう、陰ながらお手伝いさせていただくというスタンスで臨めたのもよかったのかもしれません。

私が職員の皆さんと接して感じたことは、震災後、４月末に開庁して以来、ずっと走り続けてきたせいか、今の方が辛いと訴える方が多く、ミスに誰も気付かなかったり、忘れっぽくなっていたり、集中力が落ちていたり、抑うつな気分や不眠を呈している方が多くおられた点です。

派遣期間中、時折、職員さんが同じ課のメンバーには話せないということで、相談に来る方もいました。仕事をしながら、町民のみならず、職員さんのフォローもこれからの課題ではないかなと強く実感しました。

滞在先については、被災したホテルで余震も続く状況であったことから、力を抜いているつもりでも、軽く緊張が続いた状態で、慣れるまでに時間がかかりました。

週末は、派遣前、先輩派遣者から「元気に任務を全うするために、休日に内陸へ出かけるのが大切」というアドバイスを受けていましたから、なるべく出かけるようにして過ごすことにしました。

週末のうち一日は被災地をゆっくりと歩いて回ったのですが、テレビでは伝わってこなかったものが五感を通して強く伝わってきました。

津波が来る瞬間までそこにあったいつもの時間が、瞬時に消えてしまった様子が手に取るように分かる建物がまだ多く残っており、その空気感は何ともいえないものでした。

解体を待つ建物の前には旗が立てられており、その旗があちこちで靡く様子や遺体が発見された場所を示す赤い×印が記された建物があちこちに立ち並んでおり、その光景は何とも異様でした。
町を歩きながら、涙が自然と溢れだしたこともありました。

このように、切ない気持ちで一杯となって、週末は少し気持ちが沈む時もありましたが、職場に行くと決まって強い気持ちが身体から溢れてきて、今日もしっかりがんばろうという気持ちになりました。

それは、一緒に働いた仲間から、生きていく上で大切なことや生きる大きな力を感じたためです。

命の別れ際に関わった方、津波にのまれた方、大事な人を亡くされた方、家を流された方など、みんなそれぞれ本当に辛い経験をされているのにも関わらず、前を見て一歩一歩しっかりと歩んでおられたのです。

その力は、人と人とのしっかりとした繋がりがあるからこそだと感じましたし、その繋がりの中には、相手を思いやる気持ちがたくさん溢れていると感じました。

ある時、地元の住職さんが「今必要なのは物ではなく心」と仰っていましたが、まさにそうだなと思ったものです。

ただ、その想いも独りよがりになってしまっては力を発揮できません。被災地支援にお

いて、自分の持っている力を発揮することが大前提ですが、何よりも“協調”してやっていくことが一番大切なのではないかと思います。

今回、自分自身と深く向き合うことができ、生き方や人生観が変わる大きな経験をさせていただきました。

派遣を終えて振り返ってみると、本当に学ぶことが多い派遣だったと思います。

学んだ経験は、今後、仕事に、そして自分自身に生かし続けて行きます。

最後に、私が無事に仕事を全うできたのは、私個人の力ではなく、多くの方のご支援の賜物だったと強く感じています。

派遣に際し温かいご支援を頂けたこと、貴重な経験の機会を与えて頂けたこと、この場をお借りして深く感謝します。

現地からの職員レポート　（現地での生活状況を報告したメール）
総務部　勝川　美和　（任務：保健業務支援）

（2011/10/06　勝川→総務部長・副部長・職員課・厚生会）

お疲れ様です。
大槌町派遣中の勝川です。

昨日無意識に国際線カウンターに並ぶといった恥ずかしいエピソードもありましたが、無事に岩手県に到着しました。
皆さんからたくさんのお気持ちを頂き、感謝しております。ありがとうございます。
封筒に同封されていました皆さんの名前の紙は手帳に挟んで持参しました。

今回派遣が決まりバタバタと時間が過ぎていきましたが、そんな中、いつも以上にみなさんのあったかい気持ちに触れることができ、感動ものにはかなり涙もろい私の涙腺は毎日ウルウルでした。
一人でこちらに来ましたが、職員課の皆さんをはじめ、たくさんの方に支えられている気持ちが大きく、一人でありながら一人でない気がしています。

大槌町に来てからも広域連合の方をはじめ、箕面市から派遣中の西田さんや大阪の市町村から派遣されている職員さんにかなり気にかけてもらい面倒をみてもらっています。
人に恵まれているなあとほんと感謝感謝です。

今回派遣の話を聞いた時、直感で迷わず行こうって思いました。
即戦力を求められるであろう場所で、未経験の仕事というところは気になりましたが、こういう機会に恵まれたってことは何かお役に立てれることがあるんだろうし、何か今後の産業保健に活用できたり、自分自身の成長に繋がるのではないかと思い、出発まで気持ちがぶれることはありませんでした。
まだ右も左も分からなく、何ができるのかまだ初日の昨日は見えては来ず、

（そりゃそうですよね）慣れない環境に疲れはいつも以上でしたが、気持ちをニュートラルに自分らしさを発揮できたらと思っています。

不在中は皆さんに多大なご負担とご迷惑をおかけいたしますが、どうぞよろしくお願いいたします。

追伸：ご用意頂いたホテルなどの環境は思った以上に良いです。
また大槌町派遣中に使用できるよう、フリーアドレスを取得しました。

（2011/10/13　勝川→総務部長・副部長・職員課・厚生会）

おはようございます。
みなさまお疲れ様です。
大槌町に派遣中の勝川です。

岩手入りして１週間が経ちました。
日に日に生活や仕事に慣れていく感覚を体感しています。
初日は浅い睡眠でしたが、今では大きめの余震にさえ気づかないほど、ぐっすりと眠っています。
意外に鈍感だったのか？と思っている今日この頃です。
食欲も全く落ちることなく、３食しっかり食べていますし、（時には間食も・・・）元気にやっています。

滞在ホテルは釜石にあるのですが、毎日釜石の市内をボランティアさんが清掃されたり、解体されたりしていて、日々変化していっていることもあり、また信号も少しずつ増えていっているようで、岩手に来る前に想像していたよりも全然ストレスなく生活ができています。

ホテルライフですが、一昨日お部屋のお引っ越しがありました。
バス・トイレなしの大きなお部屋からバス・トイレなしの小さなお部屋への移動のはずが、ドアを開けるとバス・トイレ付の小さなお部屋だったんです。
備品もグレードアップしていて。

ホテルの方のミスということで、料金は事前に言っていた料金で月末まで、バス・トイレ付のお部屋を使わせて頂けることになりました。ツイテいます。

物理的な面もそうですが、西田さんや堺市の職員さんにとても気にかけて頂いていて、ホームシックにかかることなくいけています。いろんな意味で恵まれています。

こうやってここで滅多にできない経験をさせてもらっているのもやはり職員課の皆さんに助けてもらっているおかげなので、皆さんにもとても感謝しています。
ありがとうございます。そしてご迷惑をおかけして申し訳ありません。

日常、こんなに感謝することが溢れているんだなって、ここにきてとても実感しています。生きているだけでもありがたいなって思います。

さて仕事ですが、町の保健師さんたちは課内で仕事をしていることが多く、今現在私が受けている印象は、一旦ストップしていた保健事業を再構築していく部分に力が注がれているということです。
全ての書類が流されたことで１からやらなければいけないこと、健康推進班としての保健師経験が浅い方が半数（４人中２人）なので、いろんなことに時間をとられてしまっている感じです。
また仮庁舎ができ半年が経ち、今の方が皆さん疲れを実感しているようで、全体的に能率が下がっているような印象があります。小さなミスも連発している状態ですが、回覧中にチェックされることなく流れていっている状況です。
班の状況を見ていて、今現在は豊富な知識や経験よりも、町保健師さんのペースや雰囲気を乱さず、そっと自然と支えることが一番求められているのかなと感じます。
健康推進班が管轄している仕事は全く従事したことのない分野でしたので、果たして役に立つのかなと思っていましたが、対象者と扱う法律が違うだけで、仕事の基本的な部分は一緒なので、今のところ困惑することなくできています。
箕面でこれまでやってきた様々なことがとっても役に立っています。

この５日間で、班の状況がつかめ、求められる仕事の成果のラインのような部分が分かったことで、だんだん力を抜いて仕事ができるようになってきています。

長々と書いてしまいましたが、こんな感じに暮らしています。
ちなみに、福祉課のもう一つの班に栗東市から派遣されてきている職員さんがいるのですが、よく栗東市から電話が入っています。
電話は何台もありますので、福祉課直通で電話をかけてもらうことは全然問題なさそうですので、何かありましたらいつでもお電話いただけたらと思います。

こちらでも朝晩は冷え込みます。
大阪でも一昨日は寒くなったと聞きました。
皆さんどうぞお体を大切になさってください。

（2011/10/19　勝川→総務部長・副部長・職員課・厚生会）

お疲れ様です。
勝川です。

こちらではだいぶ秋が深まってきていますが、箕面はどうでしょうか？

いろいろ仕事面ではご迷惑をおかけして申し訳ありません。そしてありがとうございます。
早いもので、ついこの間来たばかりと思っていましたが、もう帰る日が近づいてきました。カウントダウンがはじまると少し寂しい気持ちにもなってきています。

この週末再びゆっくり釜石の町を歩いてみたのですが、ここに来た当初には営業していなかったお店がちらほらと再開していたり、信号機が増えたり、パナマ船の撤去作業が始まっていたりと、少しずつ復興しているなと感じていま

す。

この週末ホテルの近くにトレーディングカードのお店が再開したんですが、外から中をのぞくとすごく賑わっていました。たまたま親子連れが嬉しそうな顔でそのお店に入る姿を見かけ、私まで嬉しい気持ちになっていました。

ホテルライフですが、来てすぐに仲良くなったチーム岐阜（←勝手に命名）の保健師さんといろいろ情報交換をしたりしていて、寮生活のような感覚で過ごしています。

そう言えば週末の雨で少しお部屋が雨漏りしました。地震の影響なのかもしれません。

今過ごしている部屋は６階のため、震度１の余震でも震度１以上ありそうな感じがします。昨日の朝は、久々余震に気づき目覚めました。

さて今週に入り、さらに生活にも仕事にも慣れてきました。

少し忙しくなってきたのですが、町の保健師さんと一緒に元気に仕事をしています。

今現在、主にどんな仕事をしているかといいますと、インフルエンザ予防接種に関することです。

町民向けのインフルエンザ予防啓発の資料作成（健康相談や健康教室で使用）、医療機関へのインフルエンザ予防接種事業の説明書の作成、インフルエンザ予防接種に関する案内Ａ４で 4 枚分ほど（広報誌に挟み、全戸配布）の作成、その他関係資料の作成などをしています。

これらは全部、保健師たちで印刷をして仕分けまでしなければなりません。

10 月 20 日発行の全戸配布の資料は､医師会や関係機関とのやりとりを経て、昨日ようやく原稿が完成しました。箕面のように町民さんへ出す資料をチェックする部署はありませんので、班のみんなのチェックのみで印刷にかけます。

少しドキドキです。

自分が作成したものが、大槌町の全家庭に配布されると思うと、ちょっと感慨深いものがあります。

近隣市町村は既にインフルエンザの予防接種がはじまっていますので、大槌町はちょっと出だしが遅れましたが、２０日の広報には間に合いそうなのでホ

ッとしています。

今回の震災でストップしていた事業の影響が町民にでてきているようで、少しでも早く各事業が軌道に乗るようお手伝いできたらなと思っています。

毎日毎日、素敵な仲間と貴重な経験をさせて貰えているのも、皆さんのご理解とご協力があるからだと思っています。
ありがとうございます。
ここで感じたことなど、また帰ってからゆっくりお話させてもらい、共有できたらいいなと思っています。

（2011/10/26　勝川→総務部長・副部長・職員課・厚生会）

おはようございます。
みなさまお疲れ様です。
大槌町派遣中の勝川です。
ついこの間岩手に来たばかりだと思っていましたが、あっという間に残りの勤務日数が５日をきってしまいました。

昨日の帰宅時、２回目のバスでの帰宅でしたが、停留所を間違えて一つ前で降りてしまい、被災地のど真ん中を歩いて帰りました。
懐中電灯は持っていて、町の明かりも少しずつ増えてきているので、大槌のように真っ黒（真っ暗より暗いイメージ）ではありませんが、昼に歩く感覚とは各段に違いました。

以下、またこの１週間の様子を書いてみましたので、お時間がある時に読んで頂けたらと思います。

＜生活編＞
生活にはすっかり慣れたというより、自宅にいるかのような気分に時々なっています。

ホテル内での知り合いもまた増え、さらに毎日が充実しています。
そういえばホテルにいるといろんな音がします。
釜石駅が近いため、ＪＲの何とも言えない寂しそうな汽笛。（この音を聞くたびになぜか、砂の器が頭に浮かびます。）
鳥の鳴き声。
エレベーターの音などホテル内の生活音。
そして「キー」という鳴き声。先日やっと「キー」という鳴き声の正体がわかりました。
それは“野生の鹿”でした。なんとホテルの前に流れている川に鹿が来ていたんです。
びっくりしました。
ホテルの方に聞くと、「鹿、来るんですよ。後はウサギも来ることがあります。」と。
思わず「熊はないですよね？」と聞くと、
「（このホテルの避難先の）小学校に上がっていく道に熊のふんがあったようなので、近くの山にはいるようです。」と笑顔であっさり言われました。
私は結構ビビり者なんですが、「へぇ~熊も出るんだぁ。」と心で淡々と思っている自分に驚きました。
岩手に来て、確実に大阪で暮らしている時の自分の感覚と違うなと良く感じます。
こっちに来て、“あっこれが軸”だって分かる感覚が増していて、仕事をしている時はもちろん、余震があるなどなにかあった時にもいつもその軸にどっしりといる感覚があります。
ここに来て、人生観というか、生きる意味というか、生き方というか、そういったものが確実に変わったなと感じています。
大阪に帰ってもこのままこの感覚を持ち続けたいなと思う今日この頃です。

さて前置きが長くなりましたが、ここ最近の仕事状況について報告したいと思います。

＜仕事編＞
先週末は人生初の３歳児健診に挑みました。

前日に当日の役割分担の発表があったのですが、保健師の数が私を入れて５名（うち１名新人さん）のため、みんなみっちり役割が与えられました。

健診前夜は健増の方からの情報やホテルマルエ滞在中のチーム岐阜の保健師さんに本をお借りし、３歳児の保健指導のポイントを勉強しました。

当日、町の保健師さんがやっている姿を見学するなんていう時間的余裕もなく、ぶっつけ本番で一夜漬けの知識を頼りに、自分なりのやり方で実施しました。

なんとか無事に終えることができました。

奮闘ぶりを班長さんが写真におさめてくださったので、また帰阪したら披露したいと思います。

昨日はこれまた人生初のポリオの予防接種に従事しました。

当初４月にポリオの予防接種が実施される予定だったのですが、震災の影響で実施できなかったため、予想をはるかに超えた受診者数でした。

親御さんからの質問も、答えられるものばかりで、無事終わりました。

（後一回ありますが。。。）

今はインフルエンザの予防接種を通知したばかりなので、問い合わせが殺到しています。

福祉課全体の電話の鳴りようは職員課の電話の鳴りようを超えていますが、ここ数日はさらに増すことが予想されています。

町外や避難先で受ける高齢者にはいろいろ手続きが必要で、もう一人の保健師さんと今、その対応に追われています。

次の派遣の方にバトンタッチするまでには落ち着き、他に任されている仕事をやり遂げたいなと思っている所です。

職員さんのメンタルはやはり気になりますが、１カ月でできることは限られているので、先週末、仕事の後にお疲れの班長さんと中堅保健師さんたちと５人で一緒にアートワークをやりました。

作品として出来上がったアートがこれから先何かの支えになればいいなと願って。。

さて以下はこの１週間に感じたことです。

＜感じたこと編＞

この１週間は親子、地元の先生（お医者さん）と接する機会がありましたが、印象的な場面がありました。
「先生に会えただけで、それだけで元気でる」と子どもをもつお母さんがおっしゃって、先生もニコニコ笑顔でその言葉にこたえている場面であるとか、何人もの方が先生に満面の笑みで話しかけてそれに笑顔で答える先生の場面など。
そんな雰囲気をみていて、この町にこの先生たちがいてくれることがみんなの安心に繋がっているのだろうなって感じ、人間と人間が繋がりあって支え合って生きている町だなと改めて感じました。
住職さんが先日おっしゃっていました。
まだ支援物資が不足していて、おにぎりを分け合って食べないといけなかった時、みんなが大きい方を相手に渡しているのを見て、絶対立ち上がっていけると思ったと。
今回健診などの様子をみていて、この町の人たちの底力はすごく、住職さんと同じようなことを感じました。
ここに来て、学ばせてもらっていることの方が多いなと感じています。
これまでよく「生きているのではなく、生かされている」ということを耳にしていたのですが、分かるようで分からないでいました。
それが大槌町で働いてみてこういうことかと分かった感じがありました。

さてごろっと話は変わりますが、
毎週１回は釜石市内をゆっくり歩いて回っているんですが、少しずつ解体もはじまり、パナマ船の撤去も進み、一歩一歩進んでいっています。
歩いて回っている時に岸壁の一番被害がひどかった場所で、一人電気工事をされている方を見かけました。なぜかその方を見た時にふと足を止めてじーっと眺めていたんです。
普段だったら、工事をしているんだなって思って何も感じないんですが、その時その人の背中を見ながら、仕事には小さいも大きいもなくて、小さい大きいを区分けしているのも他でもない自分で、自分ができることを着実に行うことが一番大事なんだなって思いました。

日常、たくさんの気付きやきらめきがあるんだなとここに来て実感しています。

それに気づくか気付かないか、どう捉えるか、全て自分次第ですね。
大槌に来る機会に恵まれて、本当に感謝しています。
送り出して頂いてありがとうございます。
ご協力頂いてありがとうございます。
箕面の仕事の面ではみなさんにかなりご迷惑をおかけしているようで申し訳ないです。
本日、甘～いものがみなさんのお手元に届くかなと思います。お疲れを少しでも癒して頂けたらと思います。（岩手のもので、私のお気に入りの一品です。）

大槌の職員さんが、こうおっしゃっていました。
「送りだす側の職員さんも職員さんを危険な場所に行かせるという不安があるだろうし、職員を一人派遣することで、仕事の負担も増えるだろうし、本当に来てもらえることだけでもありがたいです。最初は土地勘のない人に来てもらうことはどうかなと思っていたけど、来てもらって本当に助かっています。」と。
みなさんに感謝されていた気持ちをこの場を借りて、伝えさせてもらいます。

さて、長々と書きましたが、こんな感じに今週は暮らしていました。
これで岩手から送る報告も最後になるかなと思います。
最後までお読みいただきありがとうございます。
それでは今日の一日もみなさんにとって素敵な一日となりますように。

派遣報告書
健康福祉部　西村　智美　（任務：保健業務支援）

派遣先：岩手県大槌町
派遣期間：平成 23 年 12 月 1 日～平成 23 年 12 月 28 日

１．大槌町の概要

上閉伊郡大槌町は岩手県沿岸部にある面積約 200 平方キロメートルの東西に長い町です。西の北上山地から大槌湾へは大槌川と小鎚川という 2 つの川が注ぎ、三陸鉄道や国道 45 号線など主要道路をはじめ町の中心は沿岸部に集中していました。主な産業は水産業で、定置網による漁業や牡蠣の養殖、水産食料品の製造業も盛んでした。農業従事者は少ないですが、西側山地の山菜やきのこ類は品評会で賞を取るなど山の幸にも恵まれた自然豊かな町でした。

東日本大震災以前の人口は約 1 万 5 千人、年間出生数約 100 人で、65 歳以上人口は 32.4%と岩手県平均 27.2%を上回っていました（平成 22 年国勢調査による）。震災後は、平成 23 年 11 月 30 日現在で 13,404 人と、震災前に比べて約 2,600 人減少（16.2%減）しています。これらは亡くなられたり行方不明になったりされたかただけではなく、震災後、町外へ流出されるかたが多くなっているとのことです（平成 24 年 2 月 1 日では 12,463 人）。

岩手県上閉伊郡大槌町
-------隣接自治体--------
北　：下閉伊郡山田町
北東：宮古市
西　：遠野市
南　：釜石市

・釜石市へ働きに行く人も多く、朝は釜石市方面、夕方は大槌町方面へ通勤ラッシュがあります。
・コンビニエンスストアやスーパーはありましたが、ファーストフードやドーナツ店などのお店はなく、若い世代の人は宮古市や盛岡市へ買物に行くのが楽しみだったそうです。

２．東日本大震災による被災と復旧状況

＜東日本大震災と津波の状況＞

発生日時：平成 23 年 3 月 11 日（金）14 時 46 分頃

規　　模：マグニチュード 9.0(モーメントマグニチュード)

周辺の震度：震度６弱（釜石市）

津波浸水高：町役場付近 10.7m、吉里吉里 16.1m、吉里吉里漁港東側 22.2m、赤浜 12.9m、新港町 12.7m、波板（津波遡上高）19.1m（資料：国土地理院）

痕跡高最大：安渡 13.7m（資料：岩手県県土整備部河川課）

浸水面積：4 平方キロメートル（住宅地・市街地面積の 52%）（資料：国土地理院）

＜大槌町の被災・復旧状況＞

人的被害：1,256 人（死亡者 802 人　行方不明者 505 人）で、町の人口の 7.8%である。津波による被害のほか、町中心部で発生した火災による被害の影響もある。（平成 23 年 11 月 30 日現在）

家屋被害：3,878 棟（全壊・半壊 3,717 棟、一部損壊 161 棟）で、全家屋の 59.6%である（平成 23 年 9 月 28 日現在）。公共施設や産業の物的な被害総額は約 768 億円。

避難状況：城山公園体育館の避難者数 1,128 人。当日の他の避難所状況は集計不能。避難所・避難者数は 3 月 16 日に最大で 38 箇所 6,173 人にのぼる。やがて仮設住宅への移転が進み、8 月 11 日に全ての避難所が閉鎖された。

仮設住宅：4 月 29 日に最初の応急仮設住宅が完成し、順次建設が進んで 48 団地 2,106 戸が完成。入居世帯数 2,080 世帯、入居者総数 4,769 人（平成 23 年 11 月 30 日現在）。冬季に水道管がたびたび凍るなどの支障があった。

支援状況：①警察や緊急消防援助隊等により、震災当日から生存者救出、行方不明者捜索活動が行われた。自衛隊は 3 月 12 日～7 月 24 日まで、復旧･生活支援、防疫活動を行った。全国の警察や消防からは、救出・捜索活動のほか、治安維持や拾得物返還などの支

援活動が行われた。

②ボランティアは 3,518 団体、49,029 人にのぼり、被害住宅の泥出し、炊き出し、イベント運営、避難所や仮設団地での支援などが続けられている。（資料：大槌町社会福祉協議会　復興支援ボランティアセンター　11 月 30 日現在）

※「大槌町東日本大震災津波復興計画（基本計画）」を基に作成

３．大槌町役場の状況

＜大槌町役場の状況＞

旧大槌町役場

町役場では、地震の後すぐに災害対策本部を立ち上げるため、町長はじめ幹部職員のかた達が庁舎 2 階へ集合されたそうです。しかし、庁舎は津波に襲われ、課長級のほとんどのかたが亡くなられたそうです。町長のご遺体も数日後発見されました。

他の役場職員は近くの高台にある中央公民館、城山公園体育館へ避難し、そこに避難された町民の救護等を行いました。職員の中には、家族の安否もわからないまま仕事を続け、家に 2 週間帰れなかったかたもいらっしゃいました。

大槌町役場はそのままで、献花台が立てられていました。

大槌町役場は旧大槌小学校の校庭に建設されたプレハブ（４月 9 日完成）へ移転しました。将来的には隣接する旧大槌小学校を改修して移転する予定です。

（左）役場のプレハブ（手前）と旧大槌小学校（奥）
（下）旧大槌小学校の正面（火災の跡あり）

・震災で町長が亡くなられた後は総務部長が兼任されていました。8 月末に町長選挙が行われ、碇川豊町長が誕生し、副町長 3 人体制で 11 月 1 日から部局制になりました。
・新町長のもと、復興計画作成に向けて各地域協議会の意見を受け、12 月末に基本計画が作成されました。
・役場職員は、40 人近くが死亡や行方不明で書類等も津波で流されたため、岩手県や国をはじめ、全国の自治体からの派遣された職員が多いです。震災後９か月経っても、通常業務はなかなかできない状況でした。
・役場から町民へのお知らせは「広報おおつち」、町外に避難している人はモバイルメールでの案内でしたが、復興用の仮ホームページは重要な点のみ掲載していたため、町外避難の人からの電話問い合わせが多かったです。正式に町のホームページができたのは平成 24 年 1 月からで、以前に比べて情報量が多くなっています。

＜役場の設備＞
・役場は警察や消防と同じプレハブで、棟の間に屋根があり、下には砂利が敷かれています。
・申請手続きなどの窓口は各課にありますが、狭いため、２～3 人来客があるといっぱいになります。また、物を置くスペースがほとんどなく、支援物資はあらかじめ電話確認されてから受けていました。
・水道設備はなく、水は給水タンクに給水車が補給します。職員の飲料水は各自で持参するか、役場外の自動販売機を利用します。
・プレハブから離れた場所に仮設トイレがあり、手洗　い場には屋根もシンクもありません。
・12 月中旬に手洗いの簡易式水道が度々凍ったため、シャワー室の外にある水道を使用。
（このとき役場内で利用できる蛇口は 1 箇所のみでした）12 月末に水道管工事着手。

・役場の周辺はほとんどの建物が流されて何もないため、夜は真っ暗になります。瓦礫や釘などがあって危険な箇所もあるため、懐中電灯を持って歩きます。
・電話やパソコン、車などは寄付で充実していますが、紙類や文具が少ないため、節約されていました。
・昼食は役場近くの復興食堂（仮設店舗）でお弁当を注文できます。
・福祉課のプレハブ内は寒く、室内でも手袋を使用していましたが、12 月 9 日に庁舎内で引越しがあり、新しいプレハブへ移動してからは寒さがましになりました。福祉課（福祉班・健康推進班・介護班・包括支援センター班）は 4 班 1 つの棟になり、町民課向かいの建物へ移ったため、町民のかたへの案内もスムーズになりました。

４．町の状況

・小・中学校の仮設校舎での授業は 9 月から開始しました。スクールバスもあります。
・被災した県立大槌病院や町内の医療機関は、プレハブの仮設診療所で診療されていました。
・町民の買物は生活協同組合の宅配やスーパーの移動販売、コンビニエンスストアなどを利用していましたが、11 月に旧大槌北小学校の校庭にプレハブ店

舗（約 50 店舗分）が並び、賑うようになりました。こちらは水洗トイレがあります。また、12 月 22 日に町民待望の大型複合店舗「シーサイドタウンマスト」が開業し、クリスマスや年末年始の買物に大勢の人が来店して駐車場が混雑していました。

役場近くにある「シーサイドタウンマスト」

５．派遣業務について

＜所属課の体制＞

派遣先は民生部福祉課健康推進班で、福祉課には健康推進班、福祉班、介護班、包括支援センター班の４班が含まれます。健康推進班のスタッフは８人で、班長（管理栄養士）、主任主査（保健師）の他、管理栄養士１人、保健師５人（派遣を含めた数）、非常勤事務１人です。

＜健康推進班の 12 月の業務＞

（１）成人保健関連

①特定健診、後期高齢者健診、被災者健診（※）、肺がん・前立腺がん・肝炎ウイルス検診

12 月 8 日～22 日（町内 11 箇所の会場で、出張で行う健診。土日を含めて連続で 15 日間実施。）受診者数 2,227 人。

町民課の国保年金班、福祉課の健康推進班、包括支援センター班が出務。会場設置や問診、1 月に行う大腸がん検診の容器配布を実施。検査（検診車 2 台ほか）やアンケート確認は岩手県予防医学協会、歯科健診は岩手医科大学が実施。

※被災者健診：18 歳以上を対象に、岩手医科大学による被災者の健康状態の調査を兼ねた健診。健診会場で同意いただける方は、今後 5 年間健診を受診できる。国保以外も含まれ、全町民が対象。今年度受けな

いかたでも、同意を得られれば今後の健診を受けられる。

②各地区健康教育：高血圧予防の食事について、栄養士とさわやかウォーキングの会（ボランティア）が実施。

（２）母子保健関連

BCG・４か月児相談（6 人／対象者 7 人）、7 か月児相談（3 人/対象者 7 人）、12 か月児相談（8 人／対象者 19 人）、３歳児健診（15 人／対象者 21 人）

（３）その他

復興計画の基本計画作成、予算案提出。

表１　大槌町の特定健診・後期高齢者健診・被災者健診の受診者数

日付	曜日	午前会場（9:30～）	午後会場（13:00～）	受診者数(人)
12 月 8 日	木	桜木町保健福祉会館	桜木町保健福祉会館	220
12 月 9 日	金	寺野弓道場	寺野弓道場	209
12 月 10 日	土	寺野弓道場	寺野弓道場	149
12 月 11 日	日	中央公民館	中央公民館	131
12 月 12 日	月	中央公民館	中央公民館	151
12 月 13 日	火	長井清流館	小鎚多目的集会所	91
12 月 14 日	水	旧吉里吉里中学校体育館	旧吉里吉里中学校体育館	173
12 月 15 日	木	旧吉里吉里中学校体育館	旧吉里吉里中学校体育館	122
12 月 16 日	金	浪板交流促進センター	浪板交流促進センター	106
12 月 17 日	土	赤浜小学校体育館	赤浜小学校体育館	123
12 月 18 日	日	中央公民館	中央公民館	190
12 月 19 日	月	大ヶ口多目的集会所	大ヶ口多目的集会所	228
12 月 20 日	火	かみよ稲穂館	かみよ稲穂館	143
12 月 21 日	水	かみよ稲穂館	かみよ稲穂館	91
12 月 22 日	木	金沢小学校体育館	金沢小学校体育館	100
受診者数合計（人）				2227

＜ 従事した業務 ＞

（１）成人保健

①健診（特定健診、後期高齢者健診、被災者健診、肺がん・前立腺がん・肝炎ウイルス検診）出務。土日を除いた 11 日間、町内 10 会場へ出務。会場設営、問診を担当。喀痰容器と大腸がん検診（１月実施）の容器も配布。

町民のかたは１～2 時間も前から並びに来られます。役場のかたはそれより早くに現地に到着し、暖房をつけて準備されていました。

検診車を 2 台配置します。この日は雪が積もっていました。

長井清流館。どの会場もこのような配置で準備します。慣れてきました。

金沢小学校体育館で問診の準備です。この日は雪が降り、一番寒かったです。お腹と背中と足の裏にカイロを貼っています。

②予防接種に関する業務

・インフルエンザ、ヒブワクチン、肺炎球菌ワクチン、子宮頸がんワクチンなどの問い合わせや書類発送、電算入力などの事務。

③特定健診、がん検診等の準備

・配布文書や会場に貼付する案内、腹部エコー・大腸がん検診の流れ（案）を作成。

・乳がん・子宮がん・大腸がんのクーポン券を発送。

（2）母子保健

・12 か月児健康相談。

・3 歳児健診：計測（身長・体重・頭囲・胸囲）と個別保健指導。

（３）その他、電話や窓口対応など。

・時期的に、インフルエンザ、特定健診、大腸がん検診等の問い合わせが多い。

役場から車で５分のところにある仮設の保健センターです。母子保健事業はここで行います。

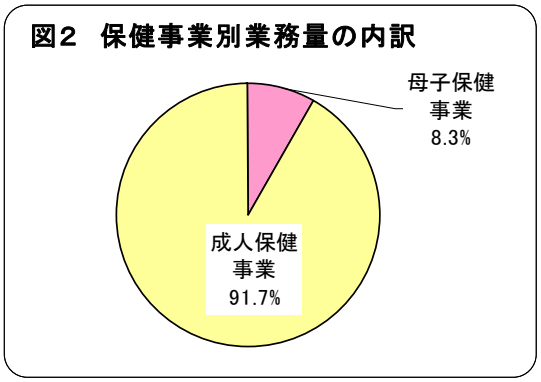
３歳児健診の計測
保健指導も担当しました。

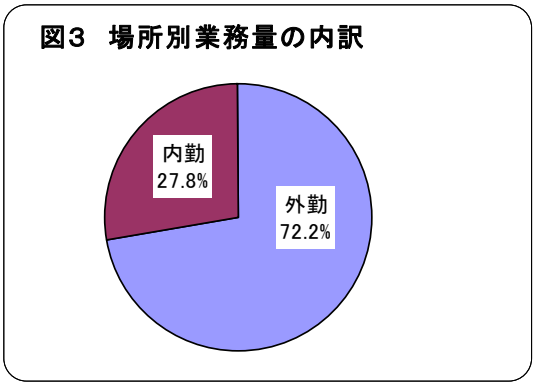
12 月は特定健診等が中心業務で、早朝出勤して町の保健師さんと会場へ行き、役場に帰るのが 16:30 過ぎになることが多かったです。ほとんど外勤業務でした。町の保健師さん達は通常業務に加えて復興計画や予算案の作成で忙しく、夜遅くまで残業されていました。派遣は内勤のときは電話･窓口応対・事務作業が中心となり、他の課や班へ電話をつなぐことも多かったです。

表２　従事した業務の日程表

日付	曜日	午前	午後
12 月 1 日	木	移動（大阪空港→花巻空港→ホテル→役場）	辞令交付、ｲﾝﾌﾙｴﾝｻﾞ予防接種の書類送付
12 月 2 日	金	３歳児健康診査準備（仮設保健センター）	３歳児健康診査（仮設保健センター）/健診打合せ
12 月 3 日	土		
12 月 4 日	日		
12 月 5 日	月	ｲﾝﾌﾙｴﾝｻﾞ予防接種の書類送付	大腸がん検診受診勧奨チラシ作成、電話対応
12 月 6 日	火	予防接種の接種歴入力、電話・窓口対応	１２か月児相談（仮設保健センター）
12 月 7 日	水	特定健診会場の案内作	特定健診会場準備（桜木町保健福祉会館）

		成、電話・窓口対応	
12 月 8 日	木	特定健診（桜木町保健福祉会館）	特定健診（桜木町保健福祉会館）
12 月 9 日	金	特定健診（寺野弓道場）	特定健診（寺野弓道場）
12 月 10 日	土		
12 月 11 日	日		
12 月 12 日	月	特定健診（中央公民館）	特定健診（中央公民館）
12 月 13 日	火	特定健診（長井清流館）	特定健診（小鎚多目的集会所）
12 月 14 日	水	特定健診（旧吉里吉里中学校体育館）	特定健診（旧吉里吉里中学校体育館）
12 月 15 日	木	特定健診（旧吉里吉里中学校体育館）	特定健診（旧吉里吉里中学校体育館）
12 月 16 日	金	特定健診（浪板交流促進センター）	特定健診（浪板交流促進センター）/ｸｰﾎﾟﾝ券発送
12 月 17 日	土		
12 月 18 日	日		
12 月 19 日	月	特定健診（大ヶ口多目的集会所）	特定健診（大ヶ口多目的集会所）
12 月 20 日	火	特定健診（かみよ稲穂館）	特定健診（かみよ稲穂館）
12 月 21 日	水	特定健診（かみよ稲穂館）	特定健診（かみよ稲穂館）
12 月 22 日	木	特定健診（金沢小学校体育館）	特定健診（金沢小学校体育館）
12 月 23 日	金		
12 月 24 日	土		
12 月 25 日	日		
12 月 26 日	月	電話・窓口対応、検体回収、容器配布	検診の流れ（案）作成、検体回収、容器配布
12 月 27 日	火	検診会場貼紙作成、検体回収、容器配布	検診対象者名簿管理、検体回収、容器配布
12 月 28 日	水	検診準備（記入例作成）、引継ぎ書作成	移動（釜石→花巻→花巻空港→大阪空港）





12月は前月に続いて高齢者インフルエンザ予防接種の助成期間であり、前半はその問い合わせや書類送付に関する業務が多かったです。また、8日から特定健診等が始まり、この月の業務の大半を占めました。したがって、保健事業別の業務量では、成人保健事業が9割以上となりました(91.7%,　図２)。場所別では、健診出務のために役場外で1日勤務していることが多く（72.2%)、役場内の仕事は4分の1程度（27.8%)でした（図３)。1月には腹部エコー・大腸がん検診、乳がん・子宮がん検診が始まるため、がん検診クーポン券の発送や案内作成等の準備も行いました。

地元保健師のように家庭訪問を担当することはなかったのですが、電話や窓口対応、健診業務などの外勤業務をこなすことで、地元保健師の活動がスムーズに行えるよう、派遣保健師としての役目を果たせたと思います。また、特定健診等に出務したことで、町内10か所の拠点となる集会所や周辺地域の状況を知ることができました。更に、健診で1,634人（受診者総数は2,227人）の町民のかたに接するという貴重な機会が得られました。

６．被災地支援を通しての感想

派遣の時期は震災から９か月経ち、復興計画を作成している段階だったので、復興に向けて町が変わっていく様子を見ることができると思っていました。

最初に見た町の様子は、「思っていたよりも瓦礫が整理されている」という印象でした。でも、それはテレビで被災地を見ていた時の視点でした。生活してみると不便なことが多く、建物の多くは放置されたままなので、計画に掲げている ８ 年で本当に復興の目途がつくのか、今後の生活がどうなるのか、町民のかたの不安はいっぱいでした。また、週に数回身体に感じる程度の地震も起こ

っていたので、水分や食料品などを常に携帯する癖がつきました。震災はまだそこにあるという感じでした。

業務では、出張型の健診で多くの町民のかたにお会いできて良かったです。各健診会場は避難所にもなった場所だったので、受診に来られたかた達が震災のときの苦労話やお互い無事で良かった事などを話され、再会を喜ばれていました。また、地元の保健師さんは町民のかたを家族ぐるみで把握されており、声を掛け合っておられました。

大槌町の町民のかたや保健師さん達には、「忍耐強さ」と「優しさ」を学ばせていただきました。健診に早くから来られてじっと待っておられる姿や、ありのままの状況を受け入れ、お話される様子から、大槌町の人の強さを感じました。また、「大丈夫です。何とかなります。」という保健師の言葉。それは、この震災を経験し、町民を支えてこられた保健師ならではの力強い言葉でした。しかし、復興への道のりは長く、忍耐強さの中にはご本人が気づかなくて無理をされている場合もあるので、「いつもと違う」というサインを逃さず、周囲の人が傾聴して専門家へつなぐことも今後の課題となります。

１か月という期間は、派遣に行く側にとっては調整するのに大変な期間ですが、現地ではあっという間の短さでした。その土地の風土や生活などが少しわかってきた時に終了するので、保健師活動という住民生活に密接な業務を考えると、何もできない感じです。しかしながら、地元の保健師さんが町の重要な施策に主体となって関われるような「派遣」としての役割は、どこでも同じで、応用できるものだと思いました。

今後は箕面市の防災や保健師活動においてもこの学びが活かされるようにしていきたいと思います。今回、皆様に派遣の機会をいただいたこと、支えてくださったことに大変感謝しています。ありがとうございました。

職員レポート（平成 24 年 3 月 11 日タッキー816 インタビュー用）
健康福祉部　西村　智美　（任務：保健業務支援）

【編者注】
※箕面マーケットパークヴィソラにおいて開催された東日本大震災復興支援募金活動･チャリティーコンサートにおいて行われたタッキー816 の公開生放送に、被災地支援に派遣された箕面市の職員 4 名が出演。以下は、インタビューのためにまとめられた原稿。

＜報告＞
健康福祉部健康増進課保健師の西村です。市民のかたの健康増進を目的に、乳幼児健診や育児相談、成人の健康教室・健康相談、家庭訪問などを行っています。

私が派遣された岩手県上閉伊郡大槌町は、震災前は人口約 15,000 人の町でしたが、震災後、死亡･行方不明（合わせて 1,300 人）･転出で人口が減り、約 13,000 人の町になっていました。箕面市の 10 分の 1 くらいです。

私は 12 月の 1 か月間、母子や成人の保健業務を担当する健康推進班で保健師として働きました。（地元の保健師さんは健康推進班に 4 人、地域包括支援センターに 2 人です。）

担当した業務は乳幼児健診や育児相談会、特定健診・被災者健診などです。特定健診・被災者健診は町内の集会所や体育館などに出張して、会場やレントゲン車を設定し、健診・アンケート調査を行うものです。町内 11 箇所、延べ 15 日間連続で実施しました。各会場には 100 人～200 人近く来られ、全体受診者数は 2,227 人でした。私は問診を担当し、1,634 人、町民の 1 割以上のかたにお会いしてお話することができました。

健診には、子ども連れのお母さんや働き盛りの世代の人、高齢の人、とさまざまな年代のかたが来られていました。会場は震災当時避難所にもなった場所

なので、健診に来られたかたは震災のときの苦労話やお互い無事で良かった事などを話され、再会を喜ばれていました。また、地元の保健師さんは町民のかたを家族ぐるみで把握されており、声を掛け合っておられました。

健診の問診を担当して感じたことは、健康的な生活を心掛けている人が多かったことです。タバコを吸っている人やお酒を飲んでいる人が意外に少なく、運動についても、仮設住宅の周りを散歩されているなど、生活環境が変わっても気をつけておられました。震災当時、避難のために高台まで全力で走ったことなどを聞くと、普段から健康づくりに取り組んでおくことは大切だと思いました。

また、避難所となる会場を知っておくこと、更に、そこへ避難するご近所のかたとの日頃のお付き合いがあることなどが重要になると思いました。

特にお子さんをお持ちのかたは、子どもが場所見知り・人見知りで不安にならないよう、地域の子育てサロンで慣れていた方が良いと思いました。

＜質疑応答＞

＜被災者の精神面は？＞

精神面では、震災当時は本当に大変だったようです。

駅のホームで電車を待っていた時に津波でホームごと流され、何とか近くの建物の屋上によじ登って助かったけど、誰もいなくて、寒さに震えながらたった一人暗闇で不安を抱えながら一晩過ごされたというお話を聞きました。

また、行方不明の家族の情報をあちこちの人に聞いて、足取りがわかったけれど、普段は避難訓練に熱心な人がなぜかその日だけは「もう少し様子を見る」と言って避難が遅れ、遺体で発見されたことも聞きました。

そうした不安や悲しみは計り知れませんが、「自衛隊のヘリで助けられた」、「遺体を見つけてもらえて良かった」と自衛隊や消防隊員の人に心から感謝されていました。

私が派遣された時は震災から９か月経っていましたが、多くの人がありのままの状況を受け入れ、お話される様子から、大槌町の人の強さを感じました。ただ、ご本人が気づかなくて無理をされている場合もあるので、周囲の人が「い

つもと違う」というサインを逃さず、お話を聴いて専門家へつなぐことも念頭に置かなくてはなりません。

＜町の様子は？＞

町の状況は、瓦礫が整理されているものの、新しく建てられるもの物はなく、壊れた建物がそのまま放置されているものもあります。特に役場の周りはほとんどが流されて何もない状態です。復興計画では８年がかりとなっていますが、今でも派遣職員は多いですし、日常業務もまだ震災前の通常業務には戻っていません。今後も人やお金の支援が必要だと思います。

＜支援できる物は？＞

物資は、意外な物があって当たり前の物がないと思いました。たとえば、パソコンは業者が寄付しているので充実しています。車もシンガポールや韓国からの寄付でありました。乳幼児健診の身長・体重計や子ども用のハイチェアなども、立派な物がユニセフの寄付であったりします。でも、紙や模造紙、筆記用具が不足していました。役場のトイレや手洗いは仮設で、凍って水が流せないなど、不便でした。

実際、物資を送られても置き場所がなかったり、運ぶ人手が足りなかったりというのがあるので、ニーズにあった物や時期が大切になります。

復興に向けての人材確保とお金が今後の支援に役立つと思われます。

（両面印刷用調整白紙）

４．学校建設・営繕支援

Contents

派遣報告書
　みどりまちづくり部　西田　昭浩　（任務：学校建設支援）
現地からの職員レポート
　みどりまちづくり部　西田　昭浩　（任務：学校建設支援）
派遣報告書
　みどりまちづくり部　平山　福太郎　（任務：学校営繕支援）
職員手記
　みどりまちづくり部　平山　福太郎　（任務：学校営繕支援）

派遣報告書
みどりまちづくり部　西田　昭浩　（任務：学校建設支援）

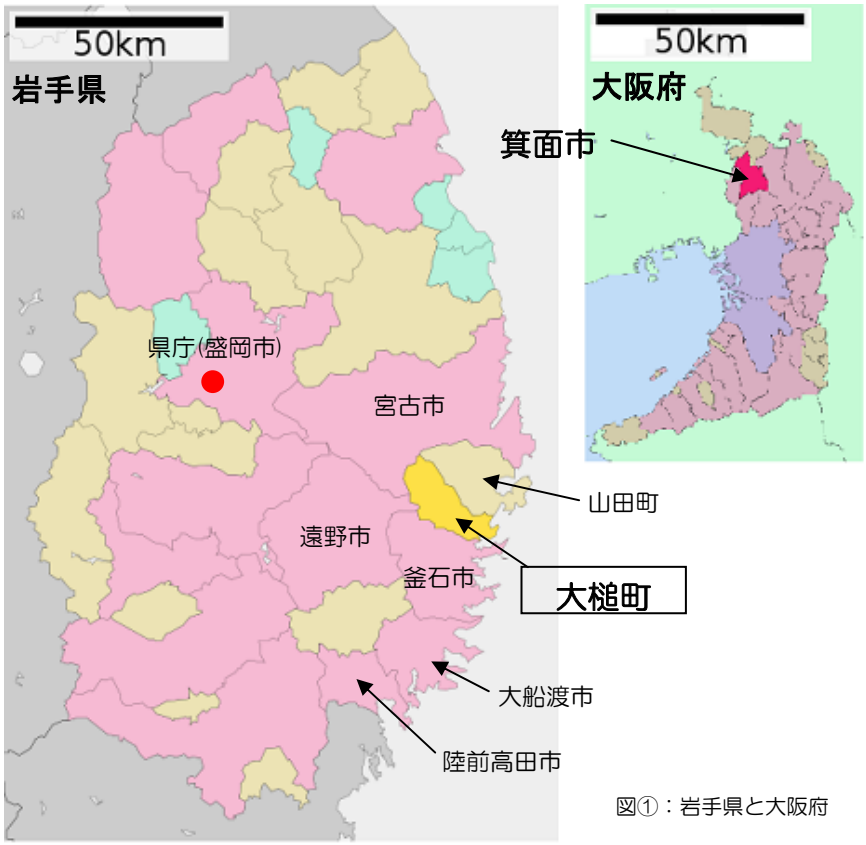
派遣先：岩手県大槌町
派遣期間：平成 23 年 8 月 1 日～平成 23 年 10 月 31 日

［１．　被災状況］

大槌町は岩手県の沿岸南部に位置しており、平成２３年３月１１日に東北地方を中心に発生した東日本大震災で被災した市町村の一つです。東西に広い町で町域は約 200 平方キロメートルと、箕面市の４倍ほどで、震災前の人口はおよそ 15,000 人でした。主な産業は水産業で、定置網による漁業や、牡蠣などの養殖も盛んに行われていたようです。

大槌町の中心市街地は大槌湾に面した海沿いに集中しており、三陸鉄道や国道４５号線といった主要交通網も海沿いにありました。市街地は、高さ 6 メートルほどのコンクリート製の防波堤と水門に守られていましたが、市街を流れる大槌川、小鎚川の２本の河川沿いに遡上した津波と市街地の広範囲で発生した火災により、およそ 3,900 棟もの建物が被害を受けるなど壊滅的な状況となっていました。

今回の震災でお亡くなりになられた方や、行方不明の方の人数は、人口のほぼ１割にも及びます。また、震災の影響で避難生活を余儀なくされてい



図①：岩手県と大阪府

る方も多く、１１月１日現在の人口は約 12,600 人と、実に震災前の 15%も減少しており、震災からの復旧はもちろん、人口流出対策も大きな課題となっていました。

箕面市に置き換えて考えると、止々呂美や粟生、如意谷、新稲などの高台の住宅地を除き、全て流失したようなイメージです。赴任直後に大槌の景色を目の当たりにした時は津波の威力の凄まじさに只々愕然とするのみでした。

（写真①）高台から見下ろした大槌町の市街地、写真右手奥の大槌湾から津波が押し寄せた。

大槌町の死亡者及び行方不明者数（2011年10月28日）

区分			人数
① 死亡者			802 人
	身元の確認状況	身元が確認された遺体数	703 人
		身元が確認されていない遺体数	99 人
	遺体の引き取り状況	遺族に引き取られた遺体数	549 人
		役場引取	253 人
		安置されている遺体数	0 人
② 行方不明者数			520 人
	うち、死亡届の受理件数		466 人

（表①）大槌町ホームページから転載

（写真②）大槌川に架かる橋
写真右側から津波が押し寄せ手摺が倒れていた。

（写真③）仮設役場前の幹線道路
火災で使用できない建物もそのまま残されていた。

（写真④）仮設役場前から見た大槌町の市街地
瓦礫は概ね撤去され、道路と電柱が復旧していた。

［２．役場の状況と復興へ向けた動き］

震災前の役場庁舎は市街地の中心部に位置していたため、津波によって市街地と共に全てを失っていました。また、町長や課長級の職員など数十名の方が津波の犠牲となって亡くなられたことにより、震災直後には行政機能が麻痺していたとのことです。

（仮設役場の様子）

震災後の役場は津波の被害により使用できなくなった大槌小学校の校庭にプレハブ２階建ての仮設庁舎が建設されており、役場、消防署、警察署の機能が全て集約されていました。

しかし、震災により業務量が増加したため、私を含めた多くの派遣職員やボランティア活動が行われており、町民の待合いスペースが屋外にあるなど、手狭で不便な状況でした。

全般的に職員数が不足しており、まだまだ多くの派遣職員を必要としていましたが、執務スペースが確保できず、派遣要請を断念せざるを得ないというのが実情のようです。

（写真⑤）被災した消防庁舎

（写真⑥）仮設役場正面

瓦礫の撤去や仮設住宅の建設、避難所の運営など最低限必要な業務は滞りなく進められており、近隣市町村と比較しても早い方でしたが、町長が不在であることが大きく影響しており、復興計画の策定など重要な政策の推進については大幅に遅れているように感じました。

職員数は８月末で約１４０名で、内３０名ほどが全国各地からの派遣職員で構成されていました。大槌町には部局が置かれておらず、町長職務代理者―課長―班長で組織が構成されており、組織の最小単位は「班」となっていました。

（職場の様子）

私が配属されたのは、教育委員会事務局 学務課 学務班で、職員の構成は次のとおりです。

・教育長	１名	（特別職、町職員）
・課長	１名	（町職員）
・班長	１名	（町職員）
・主任主査	１名	（町職員）
・指導主事	３名	（町職員１名、派遣職員２名）
・主査	２名	（派遣職員）
・主任	１名	（町職員）
・主事	３名	（町職員）
・臨時職員	１名	
計	１４名	

学務課１４名で本市の教育推進部にあたる業務を担当しており、通常の業務内容だけでも多岐に亘る上に、震災の影響で転入出、就学援助、学校への支援物資や支援活動に関する問い合わせが頻繁にあり、まだまだ混乱した状況が続いていました。

（←写真⑦）仮設役場の全景
奥に見える建物は大槌
小学校の校舎

（復興に向けた動き）

このような状況の中、８月２８日に町長選挙、町議会議員選挙が執行され、碇川町長が就任されました。新町長の施策方針では、復興計画の策定を年内（2011 年 12 月）に完了することとされています。また、１１月からは通常業務に加え、復旧復興事業に着手するため、３名の副町長制と部局制が新たに導入（別添１参照「大槌町ホームページから転載」）され、一日も早い復興に向けて新しいスタートをきりました。

［３．　学校の状況と仮設校舎建設］

大槌町には、町立の小学校が５校、中学校が２校ありますが、津波と火災の被害により、このうち小学校４校、中学校１校の施設が使用できなくなりました。

（写真⑧）大槌小学校
１階を完全に飲みこんだ津波と、火災により被災
現在、一部が仮設庁舎として使用されている。

（写真⑨）大槌北小学校
津波により被災した校舎には支援物資の自転車
が保管されている。

（写真⑩）大槌中学校
運動場には被災車輌が保管されている。

（写真⑪）大槌小学校
火災の発生した教室

学校施設の被害状況

学　校　名	浸　水　高	被　害　内　容
大槌小学校	３．７ｍ	校舎１階内装、建具等流失、火災により校舎内外部に被害、３、４階は焼失、体育館床全面沈下、ブレースの座屈
安渡小学校	浸水無し	地震により校舎３階の EXP.J が変形､各所にクラック発生、一部で雨漏り
赤浜小学校	校舎４．６ｍ 屋体１．０ｍ	校舎１階内装、建具等流失、一部は倒壊 体育館は浸水以外に被害は認められない。
大槌北小学校	４．２ｍ	校舎１階内装、建具等流失、体育館は外壁、建具等流失土砂の流入により床面が損壊
大槌中学校	３．４ｍ	校舎１階内装、建具等流失、火災により校舎内外部に被害、体育館は建具等流失＜土砂の流入により床面が損壊
吉里吉里小学校	浸水無し	被害は認められない。
吉里吉里中学校	浸水無し	被害は認められない。

（表②）大槌町教育委員会被害報告書から転載

８月１日現在の児童生徒数はおよそ９６０名でしたが、この内７４０名が、通い慣れた校舎を失い、高台にあって津波の被害を受けなかった小学校の体育館や、同じく高台にある県立高校の空き教室などを利用して授業を受けていました。

（写真⑫）体育館を間仕切っての授業の様子。

しかし、これらの学校も運動場には仮設住宅が建ち並び、定員を遙かに超える児童・生徒が通学しているため、子どもたちにとっては満足な環境で学ぶことができないのが現状でした。

このような状況を改善するため、震災直後から仮設校舎を建設する計画が進められ、７月中旬から建設工事に着工しており、赴任後は前任者からの引継ぎを受け、仮設校舎を完成させることが主な職務となりました。

仮設校舎の概要は次のとおりです。

［仮設校舎の概要］

名　　称：大槌町立小中学校仮設校舎

所 在 地：大槌町小鎚第２２地割「町立ふれあい運動公園　サッカー場」

敷地面積：約１６，０００㎡

延べ面積：約　５，６００㎡

工事期間：平成２３年７月４日～平成２３年９月１１日

施　　工：大和リース株式会社　盛岡営業所

建物概要：小学校棟　２棟　軽量鉄骨造　２階建　延面積　約２，９００㎡

中学校棟　２棟　軽量鉄骨造　２階建　延面積　約２，２００㎡

体 育 館　１棟　軽量鉄骨造　１階建　延面積　約　　５００㎡

学童ｸﾗﾌﾞ　１棟　軽量鉄骨造　１階建　延面積　約　　２００㎡

（配置図、平面図は別添２のとおり。）

（写真⑬）仮設校舎全景　右側が小学校棟、中央と左側は中学校棟

（建設地決定までの経緯）

（写真⑭）仮設校舎全景　手前は運動場

仮設校舎は小鎚川沿いに内陸方向へ約３ｋｍ遡ったところにある町立サッカー場に建設しましたが、当初計画では津波により被災した「大槌北小学校」の校庭で建設することとなっていました。基礎工事まで完了したところで、保護者から計画の見直しを求める意見が大きくなったため建設地の変更を行ったとのことです。このことから、余震や津波に対する不安や恐怖が根強くあり、今後の復旧・復興に向け

て行政の配慮が必要であることがわかりました。

（事業費の構成）

小学校棟、中学校棟については大部分が国庫補助金によって建設されましたが、体育館については国庫補助金の対象外事業とされたため、日本赤十字社の全面支援によって建設されました。また、学童クラブ（学童保育施設）については公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンによって建設され、寄贈を受けました。なお、体育館の補助制度については後日、国庫補助金の対象として見直があったとのことです。

（写真⑮）建設中の仮設校舎

（写真⑯）建設中の体育館　床の組み立てが進む

（建設工事から開校までの状況）

建設工事はプレハブリースの大手業者である、大和リース株式会社（本社大阪）が施工していましたが、震災の影響によりプレハブの需要が高まっていることから人手が不足しており、工事担当者は大阪府や埼玉県から、プレハブの組立作業は岡山県から、内装工事は青森県、大阪府からなど、全国各地から多い日は一日に２００人もの作業員により建設が進められました。

また、学校の家具類も併行して準備を進め、被災した校舎を調査し使える物を移設したり、近隣自治体からの協力により寄贈を受けたりするなど、できる限り納期を短縮して、竣工に間に合わせる工夫が必要でした。

さらに、地震の影響による地盤のズレや、津波によって敷地図面が失われていたことから正確な設計が出来ていないため、施工を進めながら設計を見直し、不足する設計図面を追加していくという、通常ではあり得ない作業が求められました。また、毎日大量に材料が搬入され施工が進んでいくため、検査や詳細

部分の打合せなど、９月１３日の竣工まで現場での業務に追われる日が続きましたが、９月１５日には竣工式典が行われ新聞やテレビ等で大きく報じられました。

その後、貴重な授業日数を減らすことのないよう週末の３連休を活用して、ボランティアの方々が中心となって引っ越し作業が行われ、９月２０日に小学校が、９月２２日には中学校が予定どおり開校しました。

（写真⑰）仮設校舎での引越しの様子

（写真⑱）仮設校舎体育館での開校式典の様子

［４．派遣職員の生活］

大槌町内は仮設住宅の整備が完了して間もない状況で、ホテルや賃貸住宅などが無く、職員が宿泊できる場所がないため、近隣の釜石市や遠野市で宿舎やホテルが確保されています。私は大槌町から車で１時間半ほど走った遠野市にある岩手県の職員寮を借り、毎日車で通勤することになりました。

（遠野市の様子）

遠野市は地震で市庁舎が全壊するなどの被害がありましたが、市内はほぼ復旧しており、　生活に必要な食料品や日用品、ガソリンなどは大阪と同じように入手することができ、生活の不便はありませんでした。花巻空港や東北自動車道などの物流の拠点から、沿岸部の釜石市、大槌町、大船渡市などへ向かう国道２８３号線が通っており、ボランティアに来られる方や、建設業関係者、私と同じような派遣職員の活動拠点となっていました。

（大槌町への通勤）

大槌町役場への通勤経路は、①峠を越えるルート、②釜石市街を経由するル

ートの２通りがありました。

①峠を越えるルート

遠野市から県道３５号線→国道４５号線（沿岸部）と走る４５ｋｍ、１時間２０分ほどのルートです。途中で標高９００ｍほどの峠を越えるため、急勾配、急カーブが続き、道幅も狭く緊張感をもって運転しなければならず、相当体力を消耗しました。

②釜石市街を経由するルート

遠野市から国道２８３号線→仙人峠道路（自動車専用道路）→国道４５号線（釜石市街）→国道４５号線（沿岸部）と走る６０ｋｍ、２時間弱ほどのルートです。道幅も広く途中の山間部はほとんどトンネルなので運転のストレスは少ないでが、朝晩とも釜石市街の渋滞がひどく時間が読めないため、帰宅時のみ、このルートで通勤していました。

（図②）：岩手県大槌町周辺

いずれのルートも沿岸部の被災地に出ると信号が無くなり、希に大きな陥没や、路肩が崩落している箇所もあります。また、舗装が悪くなり、路面が波打っているため注意が必要です。夜になると防犯灯や道路照明が皆無ですので真っ暗になります。

更に、大潮の日には、釜石市街地の国道が潮位の上昇によって冠水し、通行止めになることもありましたが、現在は道路の嵩上げ工事が完了し解消されたようです。

（→写真⑲）冠水した釜石市内の道路の様子

（→写真⑳）通勤途中の釜石市内の様子
信号は停止しており、泥や瓦礫が散乱している。

［５．派遣期間を通じて感じたこと］

震災発生から半年以上経過しているにも関わらず被災地では、頻発する余震や地盤沈下による浸水など、不安で不便な生活を送らざるを得ない状況が続いていました。今回の震災では生活基盤のほぼ全てを津波により失った自治体が多くあるとともに、仮設住宅での生活によって既存のコミュニティは崩壊しており、ハード・ソフトの両面から復興に向けてまだまだ多くの支援を必要としていると思います。被災地が復興を迎える日まで、このことを忘れることなく自治体の職員として、できる限りの支援を続けなければならないと感じています。

今回の派遣は、大阪府市長会を通じたカウンターパート方式によるもので、この制度自体は特定の自治体を継続的に支援することで情報共有がしやすく有効なものですが、被災自治体と我々派遣職員の間を複数の派遣調整機関が経由しているため、現地との情報伝達に時間が掛かりすぎると感じました。それぞれの機関において必要な役割を果たしておられるものと思いますが、我々基礎自治体を含めて、より迅速な情報共有に努めて被災自治体のニーズに、より的確で、迅速に応えていかなければならないと感じます。

現地からの職員レポート（メール）
みどりまちづくり部　西田　昭浩　（任務：学校建設支援）

（2011/08/09　西田→まちづくり政策課）

※どのような支援物資が必要とされているか？との問い合わせに対する返信

おはようございます。大槌町の西田です。

こちらは週末から天気が良くなり、朝晩は涼しいものの日中は暑くなってきました。

仕事の方（仮設校舎建設）は、しっかりした図面が無いまま工事に着工しているため、教育委員会の意向と現場の調整で、仮設庁舎と現場を行ったり来たりしています。

忙しいものの、なんとかやっています。

さて、支援物資の件ですが、私が今まで町内を見て回ったのと学務課で聞くところによれば、仮設住宅の入居がだいぶ進んできたようです。

教育委員会の仮設事務所がある、「中央公民館」に併設されている避難所も明日閉鎖されます。また、大槌町内でも２件目のローソンの営業が始まり、普段の生活に必要な最低限のものは困らないレベルにあると思われます。

あくまで、私がわかる範囲ですが、

>「移動式の循環型入浴システム」と大量のタオルなどを…

→仮設住宅の供給が進んでいるので、不要になるかもしれません。

>「メッセージ入りのうちわ」を…

→仮設住宅はクーラー完備で、むしろ寒いとも聞きます。

…ということにもなりかねないかもしれません。

少し話がそれますが、教育委員会にも支援物資の申し出の電話が、よくかかってきます。

私が受けただけでも、ピアノや自転車など１週間で、２～３件は聞きました。しかしながら、支援したい気持ちと、ニーズが合わず殆ど断ることになってい

ます。
　現実的な話ですが、「使途を限定しない義援金が今一番必要です。」

　町全体として何が必要なのか？は、把握が困難と思われますが、教育委員会としては必要な物は山ほどあります。指導主事の先生と相談した結果、９月に開校予定の仮設校舎に必要な物品を送って頂けないかということになりました。次のとおりです。

　①教卓　Ｋ３８－７００（プラス教材総合カタログより）　１８台
　②書類保管庫　Ｓ－３４５Ｆ１Ｎ（コクヨカタログより）　１８台
　③書類保管庫　Ｓ－３２５ＧＦ１Ｎ（コクヨカタログより）　１８台

　上記物品は全て、津波によって流失したか避難所で使用して行方が分かりません。
　全部で、定価ベース２３０万程度です。
　ＰＤＦがとれませんので、カタログをＦＡＸで送っておきます。

　こんな物でもいいんでしょうか？　予算要求みたいになりましたが、よろしくお願いします。

　長くなりますが、近況の写真を添付します。

①教育委員会のある中央公民館から見た大槌の市街地です。がれきの片づけが進んでいるものの復興と言えるまでには、まだまだ時間がかかりそうです。
②被災した、大槌北小学校の体育館です。２階の手すり辺りまで津波が来た跡が残っています。ステージ背面の壁は鉄筋コンクリート製ですが、一部が無くなっています。また、時計は津波の到達時刻３：１５頃で止まったままです。この学校の児童・教諭は津波が到達する１０分前に避難を完了し、全員無事だったそうです。（震災の約１週間ほど前に避難訓練があり、経験が生きたとのことです。）
③仮設校舎の建設現場です。現場の様子は大阪と変わりませんが、全国各地からの支援により建設が進められています。プレハブの材料は福岡から、とび

職さんは岡山から、大工さんは青森から、など、現場監督さんは尼崎から来ているそうです。
部長からのお言葉にもありましたように、急がずぼちぼちとやっていきます。

（2011/08/22　西田→倉田市長）

突然こんばんは。大槌町の西田です。
こちらへ赴任してもうすぐ１ヶ月が経ちますので、勝手に報告します！あくまでも私的な報告ですのでダラダラと長いです。グチも混じってます。

①大槌町の状況
大槌の現状です。前にもメールしましたが第一印象はとにかく衝撃的です。こちらへ赴任する前に写真・動画を見まくりましたが、百聞は一見にしかずです。本当に何もなくなった大槌の市街地を直に見て津波の恐ろしさを実感します。（実際に被災された方と比べればほんのわずかかもしれませんが…）
震災直後に大量に散乱していたと思われる瓦礫は海岸よりの空地に集積され、役場から遠くに瓦礫の山がいくつか見えます。赴任してからもう１ヶ月ですが、その山が減ったようには感じられません。いつになったら無くなるのでしょうか?

市街の中心部では、使えなくなった建物の解体が本当に少しずつ進む中、プレハブで営業する店舗が、ちらほら出てきました。少し脱線しますがローソン、スゴイですね早くも大槌で２件目のローソンがプレハブで復活しました。コンビニの復興の早さだけは世界に誇れるかもしれません。
お盆前に全ての避難所が閉鎖され全ての方が仮設住宅などに移られたようです。避難所の跡は残された支援物資などが山積みで片付けが大変ですが。

この状況で行政としては何をしていくのか?今どうしているのか?　…　よくわかりません。教育委員会の事務所と役場が離れている上に、今週町長選挙があるのでホントに何をしているのかわかりません。僕がニブイだけかもしれませんが。

②職場（教育委員会）の状況

フツーに働ける状況です。盆前にはクーラーが設置されましたが、すぐに役目を終えました。かなり涼しいです。

教育委員会の学務課に配属されていますが、教育長以下１５名ほどの体制で、政策、総務、学事、人事、教育、給食、施設、更に支援団体や物資の受け入れなど全てを行っています。それ故に電話が鳴りまくります。

職員は、元々の町の職員、再雇用、非常勤、近隣自治体からの派遣、遠方からの派遣（僕のこと）などの混成部隊ですが、職場の雰囲気も非常に良く、今のところ特に問題は無いようです。こんな状況ですから、みんな一生懸命働きますし、それぞれの責任を果たしているからでしょうか？統括する課長や、主幹は大変でしょうが…

僕の仕事は、事前に聞いていたとおり仮設校舎の建設です。おかげさまで引き継ぎもきっちり受けることができました。学校施設は日本全国共通ですので、こちらの方は全くと言っていいほど問題ありません。

工事は大和リースが請けています。（大阪の会社です。）現場監督さんも大阪の方です。また、職人さんも北は青森、南は岡山からなど様々です。地元では建設関係の仕事は手一杯になっているようです。

電話がかかってきますので当然受けますが、方言がわかりづらく苦戦しています。電話の内容で多いのが、支援物資（学校関係）の申し出、支援団体からの支援の申し入れ（赤十字など含む）、マスコミからの問い合わせ、転入の問い合わせ（仮設住宅の完成に伴い、非難されていた方がたくさん戻ってこられます。）などです。

支援物資ですが、支援したい物資と、こちらのニーズが合わずに断るケースが非常に多いです。子供に本を…とか、子供に楽器を…とか、花を贈りたいとか、ありがたいですが既に有り余っており、断るしかない状況です。保管場所にも四苦八苦しています。

支援していただきたい物はたくさんありますが、うまくまとめることが出来ていません。これまでの支援物資の情報管理ができていなかったり、今学校に何があって、何がないのか？といったことが把握できていないことが原因です。学校現場でも、被災した物や、避難所や災害対策に使用して行方がわからない

ものなど、物品の管理が曖昧になっている様です。これから仮設校舎の開校を迎えますが、とりあえず必要最低限の物で臨もうとしています。まあ当面はこれで十分でしょう。

箕面からは、教卓と書棚をよろしくお願いします！（風呂や、うちわよりも、確実に役立つはずです…）

③生活面

僕の生活です。宿舎は遠野市にある岩手県の官舎で、１ＤＫに一人住まいです。エアコンが無く、網戸も無いので、お盆前までは暑くても窓も開けられず苦しんでいましたが、最近は涼しくなったので快適です♪　遠野市は震災による大きな被害は無かったようで、（何故か市庁舎は半壊していました。）生活に必要なものは、箕面と変わらないレベルで何でも揃っています。居酒屋もいっぱいあります。

初めは慣れない土地に苦戦もしましたが住めば都ですね。この前の日曜日は、世界遺産平泉に行ってきました。震災の影響で観光産業は冷え込んでいると聞きましたが、結構な人出でした。

箕面と何もかわらへんやん！と言いたいところですが、余震がひどいです。これだけが不安です。体に感じる揺れが、ほぼ毎日１～２回きます。先日仕事中に震度５クラスの余震があり、職場にも緊張が走りました。全員津波警報に注目していましたが、岩手県内は無事でした。こちらの人は、余震発生→出入口ドアを開けて避難路確保→火元確認、といった動作が徹底されています。経験から身についたのでしょうか。

さて、遠野から大槌までは、毎日車で片道１時間強を通勤していますが、これがかなりキビシイです。狭い峠道で運転が忙しい上に、大型トラック等の対向車も走って来ます。更に雨が降ると濃霧が発生し前がほとんど見えなくなることもあり、気をつけて走っていてもヒヤリとする場面があります。

僕は１０月までで気候の良いときに来ていますが、１１月から派遣される方が通勤するのは、凍結や積雪のことを考えると不可能にも思えます。釜石市を経由するルートもありますが、こちらは渋滞あり、ひどいときは２時間弱かかります。同じく冬場には凍結などの恐れもありそうですので、悪条件となりそ

うです。釜石市や宮古市から通勤できる方法を考えた方がいいかもしれません。

以上、今把握できるこちらの状況です。気持ちだけ先走ってやってきたように思いますが、他ならぬ学校施設のことですので、これまでの経験から何とか役に立てそうです。「ムリするな」とか「ほちぼちやれよ～」とか、よく言われますので、ほどほどにがんばりますが。

（2011/08/30　西田→倉田市長）

こんばんは。大槌町の西田です。 余裕があったら小さなことでもメール！・・・なので、メールです。 昨日、新町長が決まり、大槌町も新たな一歩を踏み出しました。

最近、学務課の皆さんと何回か呑みに行く機会がありました。
仕事中は「ここは、コールセンターか？」というくらい鳴り続ける電話のために、なかなか話す機会も無いのですが、呑みに行くと色々と被災当時のことを話してくれます。

～ぼくと同年代の学務課の主事、Ａさんの話です。～

震災の当日、町長の決裁をもらうために高台の中央公民館内にある学務課の事務所から、市街地にある役場へ出かけた際に地震が起こったそうです。役場では手順に従い災害対策本部を開設する準備が始まりましたが、地震の大きさから庁舎内は危険と判断し、庁舎前の駐車場へ机や椅子を運びだしていました。
Ａさんは中央公民館横の体育館で避難所の開設をするために、すぐに中央公民館へ戻ることにしました。津波が役場に到達する１０分ほど前だったそうです。役場では、「津波が来るから避難しましょう」と言う職員と、災害対策本部の設営を進める職員で意見が分かれていたそうです。
Ａさんが公民館へ戻ると、既に公民館には多くの避難者が集まっていました。その後まもなく津波が到達したそうです。すぐに県庁へ状況を報告するために電話をかけましたが、既につながらなくなっていたため、次に、衛星電話の開設を思いつきました。一般の交流電源はすぐに使えなくなったので、車のバッ

テリーから電源をとったそうです。
　県庁に電話がつながったのは日が暮れてからでした、報告に対して県庁からは「とにかくがんばって下さい。」の一言だけだったとか。
　暗闇・寒さ・飢え・周囲から迫る山火事などから、中央公民館に集まった５，０００人の避難者を守らなければならず、このときは死を覚悟したそうです。道路など交通網の寸断と混乱のため、２日後に自衛隊の先遣隊が到着するまでは孤立が続いたそうです。山火事が続く中、釜石方面の道路上に（大阪市の）消防車の列が見えたときに、はじめて「助かった」と思ったそうです。（大阪府警の活躍などもあり、大阪には深く感謝されています。）

　中央公民館（現在のぼくの職場でもあります。）の廻りには、このときの山火事で焼けた樹木が残っています。Ａさんの話を思い出しながら、山火事の跡を見ると背筋が凍りつきます。
　また、被災時に確実に使える交通網の重要性や車のバッテリーで稼働した衛星電話など、箕面に当てはまるかわかりませんが(？）本当に生きた防災のヒントが、明るく笑いながら話してくれた体験談の節々に感じられました。それにしても、直に聞くと本当に身震いします。

　Twitterとホームページ見ました。
　昨年、あれほど耐震補強をしたにも関わらず、この前までは内心、防災対策の必要性を軽んじてましたが、富士宮市との協定締結が、今は本当に重要に感じられます。

（2011/08/31　西田→職員課）
※今後の職員派遣に係る判断材料として、生活状況の問い合わせに対する返信

　こんにちは。大槌町教育委員会事務局の西田です。
　いつも、色々とありがとうございます。

>●道路事情について
>　・通勤時間（１時間半）なども含めて、体力的にどれだけ負担になっている

のか、ペーパードライバーに毛の生えたような職員でも通勤可能か。

通勤ルートは２ルートあります。①釜石市を経由するルートと、②峠を越える最短ルートです。

①釜石市を経由するルート

・私は出勤には使っていません。帰宅時に２～３回走りましたが、釜石市内の渋滞がひどく、大槌を１８時に出発すると、遠野に着くのは２０時前になります。高石市から派遣の保健師さんがこのルートで通勤されています。遠野を６：３０に出発すれば渋滞もなくおよそ１時間２０分で到着します。

８時３０分の始業時間から逆算し、丁度いい時間（７時頃）に出発すると渋滞で１時間３０分でも厳しいそうです。

このルートの前半部分は「仙人峠道路」という直線の自動車専用道路で、ほどんどトンネルです。釜石の市街地を抜け、大槌までは海岸線沿いの国道を走りますが道幅も広く運転のストレスも少ないです。

しかし、トータルで片道５０ｋｍ以上あり距離が長く、渋滞すると体力的にも負担が大きいです。

・夏場であればペーパードライバーでも通勤可能です。

②峠を越える最短ルート

・県道３５号線、笛吹峠を越えるルートです。途中で標高１０００ｍほどの笛吹峠を越えるため、こう呼ばれています。毎日、このルートを往復しています。狭い峠道で勾配もきつく、ハンドル操作が忙しい上に、大型トラック等の対向車も頻繁に走って来ます。更に雨が降ると濃霧が発生し酷いときは視界が３０ｍ程になります。気をつけて走っていてもヒヤリとする場面があります。当然体力的には相当消耗します。

遠野を７時に出発して大槌に８時に着きます。時間的に有利なので私はこのルートを通っていますが、ペーパードライバーには相当な負担になると思われます。帰りも同じくらいの走行時間です。ただし、暗くなると視界が悪くなる上に鹿や熊などの動物が結構歩いているため、スピードが遅くなり時間がかかる場合があります。

このため、残業で遅くなった日は上記①のルートで帰宅するようにしています。

・どちらのルートも沿岸部の被災地に出ると信号が無くなり、希に大きな陥没や、路肩の崩壊などもあります。また、舗装が悪くなり、路面が波打っているため注意が必要です。夜になると防犯灯や道路照明が皆無ですので真っ暗になります。車のライトは常に点検した方が良さそうです。

>　・冬は、雪道に慣れていない大阪の職員が運転できるのか。（笛吹峠のルートは、積雪があると地元の人も通らないとの噂あり）

・私は１０月までで気候の良いときに来ていますが、１１月から派遣される方が通勤するのは凍結や積雪のことを考えると、いずれのルートも不可能にも思えます。
　大槌の皆さんの話では、大槌や釜石などの沿岸は路面がアイスバーンになるとのこと。また、遠野市のある内陸部は雪深く除雪車が入るため、圧雪路面になるそうです。笛吹峠のルートは県道で除雪が入るため、通行は可能とのことです。
・雪道の運転経験、チェーンの巻き方、凍結対策などの知識が無ければ、通勤はやめておいた方がいいかもしれません。

>●仕事の状況について
>　・今の仕事の状況と今後の見込み。

【私の仕事】
・仕事は大きく次の５点です。
①仮設校舎の建設
②復興計画策定に伴う学校施設計画の策定
③学校施設関連の支援物資の受け入れ調整
④仮設校舎に関する報道対応
⑤被災校舎の解体に係る交付金の交付申請と工事発注

①仮設校舎の建設
・大槌町内の４小学校、１中学校の計５校が津波や火災により使用出来ないため、仮設校舎の建設が７月から進められています。

仮設校舎建設に係る現場監理と設計が主な仕事です。機械警備や維持管理委託の発注も行います。現在のところ９月２０日の開校を目指しています。工事の進捗率は８０％といったところです。

大槌町の職員には大変失礼な話ですが、まともな図面も無く建設業者と５億円もの建設リース契約をしたため、町教委の意向が契約内容に反映されていません。また、建設業者も学校建設の経験が少ないため意志の疎通が図れていません。

意思疎通のための図面を作図して町教委の意向を業者に伝達し、必要な機能・設備を追加し、不要なものを取りやめてコストバランスをとる。といった作業です。

ここまでは箕面でもよくやっていた仕事ですが、災害復興であるために、「日本赤十字」や「セーブ・ザ・チルドレン」といった一部費用を支援する団体の意向もあり、調整は複雑です。

学務課には建築技術職が一人もいませんので、(町全体でも２人しかおらず、その２人は仮設住宅にかかりきりです。）全てにおいて主体的に動く必要があります。よほど重要でない限りは判断を求められます。

・赴任した翌日には「あれどうなってるの？」とか、「視察の依頼が来てるので対応お願いできますか？」とか、右も左もわからない状態で対応を求められました。

しかし、自治体の仕事、学校の仕事の基礎は、どうやら全国統一の様で、慣れてしまえば箕面と同じように働くことができ、現在は仕事上大きな問題はありません。(そのつもりです。)

②復興計画策定に伴う学校施設計画の策定

・８月２８日の新町長就任に伴い、年内に復興計画を策定する方針が示されました。これに伴う学校施設基本計画の策定を求められています。まだ、これから本格化する仕事ですが、仮設校舎竣工後はこれがメインになりそうです。

③学校施設関連の支援物資の受け入れ調整

・支援を申し出ていただいた団体や個人の方との調整です。必ずしも支援したい側の意向と、学校のニーズが合わないため、様々な調整が必要です。

これまでに申し出があったのは、ピアノ、５０㎡程度のプレハブ建物、学校の校庭に樹木、ストーブ、児童用の机、風力発電設備など。

物資は送るので、そちらで取り付けて下さいとか、仮設校舎の開校に時期が合わないとか、ストーブは既に有り余っているとか、ほとんど断る場合が多いですが、本当に毎日多くの支援の申し出がありますので、相手の意向を聞くだけでも一苦労です。

④仮設校舎に関する報道対応

・テレビや新聞各社から問い合わせがありますので、電話や現地での取材対応です。これまでに報道されたのは、ＮＨＫ仙台支局、岩手日報（岩手の地方新聞）です。現在取材を受けており、今後報道される予定としては、ＮＨＫ宮古報道室、日経新聞、中日新聞、東京新聞、朝日新聞、その他フリーカメラマン数名などです。

⑤被災校舎の解体に係る交付金の交付申請と工事発注

・学校施設は、環境省の廃棄物処理事業の対象となったため、今後交付申請を進めていきます。

以上、派遣期間満了まで出来る限りの対応を行います。

・私の職場は写真に添付しているプレハブの庁舎ではありません。教育委員会は学務課と生涯学習課の２課で構成されており、事務所は役場から徒歩５分ほどの裏山にある中央公民館内です。

お盆前までは事務所を１歩出るとすぐに避難所という環境でしたが、現在は避難所も閉鎖され普通に事務仕事ができます。

・学務課の職員は、教育長以下１５名程度で、教育長、課長１名、班長１名（課長補佐級のようです。）事務職員３名、技能職員１名、指導主事２名、指導員１名が、正職員です。他に派遣の指導主事が１名（岩手県一関市）、事務職員１名（岩手県軽米町）、技術職員１名（私のことです。）、臨時職員１名、再雇用１名といった体制です。

この体制で、政策、総務、施設、給食、学事、人事、教育といった分野を所管しています。

【大槌町の状況】

・大槌は東西に広く町域は約 200ｋ㎡と、箕面市の約４倍です。人口は震災前で１５，０００人、震災で人口の１割の方が亡くなられました。
　市街地は海岸線沿いに集中しており、高さ６ｍほどの防波堤にまもられていまが津波と火災でほぼ全てが被災しました。（適切な表現ではないかもしれませんが、市街地が「消えて無くなった」と表現した方がいいかもしれません。）
　箕面市に置き換えると、止々呂美と粟生間谷や平和台などの高台の住宅地を除き、全て流失したようなイメージです。

・瓦礫は概ね片付き港付近に集積されていますが、この瓦礫の山が減る気配は一向にありません。
・市街地では被災した建物の解体が本当に少しずつ進んでいくなか、ローソンをはじめ、プレハブで営業する店舗がちらほら出てきました。
・インフラは幹線道路沿いのみが復旧しています。
・仮設住宅の建設がほぼ全て完了し、避難所はお盆前に全て閉鎖されました。

・これから生活水準がどんどん上がっていく段階にあると思いますが、何もない市街地を見ると、復興はまだまだ先のことの様に思えます。

＞　・西田君は残業をどのくらいしているのか。土日の出勤もあるのか。（泉南市から派遣されている戸籍担当の職員は８～９時まで残業しているとのこと）

・基本的に学務課は６～７時頃には全員帰宅されますので残業はほとんどありません。週に１～２回程度、７時から９時頃まで残業しますが、仕事は自分のペースで組立てられますので残業するか、しないかは自分次第です。

＞　・体力的や精神的な負担は？

・赴任直後は、被災地という特殊な環境、慣れない仕事・人間関係、過酷な通勤条件から体力的・精神的に相当な負担があります。

・糸川さんの報告書を送っていただき読みましたが、私も軽いホームシックになりました。赴任直後は本当に無理をせず、環境に適応することが大切と思われます。

>●宿舎での生活状況について
>　・宿舎の環境は？

・遠野市の市街地にある岩手県の職員公舎で鉄筋コンクリート造の築３０年程度です。
・室内はリフォームされておりきれいです。間取りは７畳和室＋キッチンの１Ｋで、バス・トイレは独立してあります。
・家電製品は冷蔵庫、電子レンジ、炊飯器、ガスコンロ、湯沸器、洗濯機、テレビ、掃除機、扇風機、灯油ストーブがあります、エアコンはありません。
・網戸が壊れています。借家のため勝手に直せません。夜は大量に虫が入るので窓が開けられません。
　私の部屋は一番西側にあり、盆前までは帰宅すると西陽で室内がかなり暑くなっていました。土日は部屋の中にいるのは大変です。最近は涼しくなり日中でも３０度を超えることはありませんので、過ごしやすくなってきました。
・車で１０分圏内にスーパー、コンビニ、ホームセンター、電気店、定食屋、弁当屋、そば屋、居酒屋、などが複数あり、生活の不便は一切ありません。
・閑静な住宅地ですが、閑静すぎて夜は真っ暗で、物音ひとつしません。
・職員公舎は２つあり、糸川さんの報告にあったのは遠野市？の職員寮です。私の職員公舎から５０ｍほど離れた場所にあります。こちらは２名１室ですので、糸川さんの報告のとおり大きく環境が異なります。プライバシーも無いですし、お互いに気を遣うと思います。

>　・自炊はできているのか。

・可能です。

>　・プライバシーは確保できているのか。

・通常のワンルームマンション並のプライバシーが確保されています。

＞　・休日はどのように過ごしているのか。

・洗濯、掃除のあと、自由に使える車がありますので岩手県の地図を購入し、その辺を走り回っています。（単身赴任で家に閉じこもると精神的に悪そうなので。）都合が合えば、大阪から派遣されている職員同士で誘い合って出かけることもあります。電車は２～３時間に１本程度しかありませんので、気分転換には車が必須です。
・これまでに行ったところは、東→大槌町・山田町・大船渡市など、西→日本海、南→平泉町、北→未開拓です。
・内陸へ入れば、のどかな風景や、わんこそば・盛岡冷麺などの名物、温泉、世界遺産平泉など、気分転換はいくらでもあります。冬にはスキーやスノボも可能です。また、仕事中には、なかなか行けない被災地の状況も見て回っています。町内の様子は写真を添付します。

＞　・遠野よりより近い場所に宿舎等の確保を考えた方がよいのか。

・生活の利便性を考えれば遠野市は最高の環境ですが、冬場の通勤条件から宮古市、釜石市、山田町など沿岸部で宿舎を確保する方が望ましいです。

＞●その他、不便に感じていること、改善して欲しいことなどなど。

・堺市からＣさんという職員が区画整理業務が専門で派遣されていますが、大槌町で必要としていたのは用地取得担当の職員だったそうです。
　大阪府の調整ミスか大槌町の手違いかはわかりませんが、派遣に当たっては事前に仕事の内容を良く確認しておいた方がいいと思われます。
　Ｃさんは１１月末まで４ヶ月間の派遣予定でしたが、９月末で派遣を打ち切る方向で検討が進んでいるとのことです。ご本人もそれなりの覚悟で赴任したはずですし、この様な間違いは本人はもちろん、派遣する側される側双方にとって何のメリットも無いはずですので、今後改善されることを望みます。こちらでできることがあれば、連絡下さい。

・関西広域連合の盛岡現地事務所の所長さんで、Ｂさんとう方がいらっしゃいます。この方は４月からこちらへ赴任しておられますので、現地の情報にも詳しく、かなり頼りになります。非常に熱心な方でもあります。大阪府との調整で難しい部分はこの方と直接調整した方がいいかもしれません。
・改善できませんが、余震が相当多いです。１日に１回必ずと言っていいほど発生します。多いときには１日に数回発生します。不安になるだけなので今後派遣の方には伝える必要はありません。
・大阪と気候がかなり違います。気温も１０℃前後差があるようなことがあります。特に朝晩は既に冷え込みますので注意が必要です。
以上報告します。

なお、プライベートなことも書いていますが、今後の参考になると思いますので、必要であれば、今後派遣される方に全て伝えていただいて結構です。

（2011/09/01　西田→まちづくり政策課）
※図書の寄贈、まちかど文庫のようなものの設置に関してニーズはあるか？との問い合わせに対する返信

お疲れ様です。大槌町教育委員会事務局の西田です。
大槌町の担当課に図書事情を確認してきました。

まず、図書は必要とされているようです。

大槌町の仮設住宅は全部で２６か所あり、全てに集会所や談話室が設けられています。集会所の仕様はバラバラのようです。
仮設住宅が建設されて間もないため、今のところ集会所には何も入っていないとのことです。

図書を寄贈したいという動きは既にあり、ボランティア団体が寄贈に向けて準備を進めています。書棚を作って棚ごと寄贈するという方法です。図面を見る限り２５台を制作するようです。

集会所内にはまだ余裕があり書棚の設置は可能とのことで、上記の書棚の横に並べて設置することになると思われます。

出来れば発送するだけでなく、現地で搬入設置まですると、こちらの職員の負担も減ります。設置については委託業者でもいいかもしれません。

こちらへ来てから支援物資の量の多さに驚いています。ありがたいことですが、その分搬入や仕分けなどの作業が増え、被災者の元へなかなか届かないのが現状のようです。
教育委員会の事務所にも行き場を失った支援物資が山積みになっています。
このような事態を避けるため、設置までの支援を検討できないでしょうか。よろしくお願いします。

ところで、昨日の大槌湾は大潮でした。
大潮の日は地震による地盤沈下のためか、市街地の一部が海に沈みます。
仮設役場から１００ｍほどの距離です。

（2011/09/16　西田→三上消防長）

こんにちは。大槌町教育委員会へ派遣中の西田です。
色々とお気遣いいただきありがとうございます。おかげさまで元気でやっています。
仕事の方も赴任してから携わってきた、大槌町の仮設校舎の建設が完了し、昨日無事に開校式を迎えることが出来ました。
さて、「消防の皆様の代理でプレゼンターを」ということですが、正直なところ、身に余る大役と思っております。ですが、私で良ければ務めさせていただきたいと思います。送っていただく防火衣の写真、送り先、送付日、受け渡しの方法など決まりましたら、ご連絡ください。
ところで、今私が働いている課の職員さんから聞いた話ですが、大槌では震災直後の二次災害で、大きな山火事があり、震災後の２日間は生きた心地がしなかったそうです。

３日目にやっと大阪から消防が到着し始めて「助かった」と思えたとか。このことから、大槌の皆さんは大阪の消防署に深く感謝されていました。箕面市の消防本部もこの中に入っていたのでしょうか？震災直後の混乱の中、迷わず被災地へ駆け付けられた消防の皆様には本当に頭の下がる思いです。

（2011/09/28　西田→まちづくり政策課）

お疲れ様です。大槌町教育委員会事務局の西田です。

９／２３～２５の連休にかけて帰阪予定でしたが、台風１５の影響により大槌町内に避難指示が発令されるなど、諸事情により帰阪することができませんでした。

台風当日は、大量の降雨、地震による地盤沈下などの影響により釜石市内の幹線道路が海水交じりの水で冠水しました。

通常１時間３０分程度で帰宅できますが、この日は２時間半もかかりました。

大槌町内の方は小規模のがけ崩れ、倒木があった程度です。

先週帰阪できなかったため、１０月１１日に休みを頂き、１０月８日～１１日にかけて帰阪予定です。

１１日に時間がとれましたら、市役所に寄る予定です。

仕事の方ですが、先週で仮設校舎の建設が終わりましたので、今週から復興計画の手伝いが主な仕事になります。

大槌町も小中一貫校の建設を目指しており、復興計画の素案に示された学園エリアに一貫校の計画を策定していきます。

復興計画（写真添付、都市マスみたいな感じです。）は、町長の指示により年内を目処に策定することとなっていますので、１０～１２月という短期間での計画づくりとなります。

復興に向けた具体的なスケジュールは示されていませんが、防潮堤の建設や市街地の大規模な盛土など、数年を要すると思われます。

（2011/10/03　西田→倉田市長）

こんばんは。西田です。
今日、三上消防長から連絡があり、釜石・大槌へ向けて防火服と学校用家具を発送して頂いたそうです！ ありがとうございました。

（2011/10/04　西田→倉田市長）

おつかれさまです。西田です。

今日、無事に釜石消防と大槌の学校へ支援品が届きました。ありがとうございます。
特に釜石消防の皆さんは、本当に心から感謝されていました。
何もしていない僕に対して（僕を通じて消防の皆さんに？）感謝されるのですが、なんか、箕面市の消防の皆さんに申し訳ないです…

ダッシュで大槌へ戻り、学校へ支援物資を降ろした後、すぐに三上消防長に電話しておきました！
支援したい気持ちはあっても、なかなかここまでは出来ないと思います。
本当に消防の皆さんには、頭が下がります。m(_ _)m

ちなみに、釜石の消防には新車の消防車がズラッと並んでましたが、大阪市からの支援物資も何台かあるそうです。相手は政令市ですが、ケタが違いますね…
しかし、「気持ちでは箕面も負けてへんわ！！」と、変な対抗心を燃やしてきました。

糸川さん無事に帰還したみたいですね。
すっかり宮古市の生活に馴染んでしまい、大阪に戻って元の生活に馴染めるのか心配してたみたいですが…

支援品の受け渡しの様子などは、例によって政策推進課から、「もうわかってるかもしれないけど、ブログ書いてくれる？」と、有り難くご指示賜りましたので（笑）ブログにてお伝えします。

（2011/10/04　西田→政策推進課）
※後任者の検討のため、現在の業務についての問い合わせに対する返信

おつかれさまです。大槌町教育委員会事務局の西田です。
お問合せの件については、次のとおりです。

＞１．仮設学校の建築が終わった今、西田さんの担当業務を教えてください。
①復興計画の策定
大槌町も小中一貫校の建設を目指しており、復興計画の素案に示された学園エリアに一貫校の計画を策定していきます。
復興計画（都市マスみたいな感じです。）は、町長の指示により年内を目処に策定することとなっていますので、１０～１２月という短期間での計画づくりとなります。
具体的には、建築ＣＡＤによる学校施設のイメージ図の作成。これらの根拠となる資料の作成です。
町長からも住宅系、学校施設の計画策定を最優先にとの指示がでており、相当急がれています。
今朝、書きかけの図面でしたが、副町長へ報告するために、教育長が持って行かれました…
どんどん指示が飛んできます。

②文部科学省への被害状況の報告
被災した学校に関する状況の報告書作りです。被災した学校の写真撮影や説明図の作成です。
通常文部科学省へは、「学校施設台帳」という指定の図面に必要事項を記載して報告しますが、この学校施設台帳の原本を紛失しており、コピーしか残っていませんので、コピーをもとに建築ＣＡＤによって電子データを復元していま

す。

③学校施設の維持管理業務全般
　これは、箕面市の学校管理課と同じ業務です。主に施設の修繕や、改修計画の相談にのっています。仮設校舎の維持管理もここに含まれます。

④その他
　支援物資の申し出や、マスコミからの問い合わせが相変わらず大量にあるため、結構これに時間をとられます。

＞２．１０月末で交代となりますが、次の人はどのような業務を担当することになるのでしょうか？
　例えば西田さんの今やっている業務を引き継いで担当する。あるいは新たな業務を担当する。

　基本的には上記の①～④の業務を引き続き行っていただきます。

①復興計画の策定
　私がどこまで進めて帰れるがわかりませんが、今後ともメインになる仕事です。いずれは、計画に基づき基本設計を外注していく流れになると思います。

②文部科学省への被害状況の報告
　報告が完了すればこの業務は無くなりますが、これに基づき被災した施設の解体や改造といった業務が発生します。特に復興計画の支障となる施設は早期に解体を求められる可能性があります。

③学校施設の維持管理業務全般
④その他

これらの業務は引き続き継続されます。

※いずれの業務も学校施設管理の経験者、学校施設建設の経験者（特に小中一

貫校が望ましい。）でなければ、厳しい話ですが足手まといになり「お客さん」になりかねません。

ブログの方は小山課長あて、送付しておきますのでお手数をおかけしますがよろしくお願いします。

（2011/10/17　西田→まちづくり政策課）

おはようございます。大槌町の西田です。
ご無沙汰していましたが、近況報告です。

１．現在の担当業務について

仮設校舎の竣工後は次の様な業務を行っています。
①仮設校舎関連
・備品類の購入
・機械警備装置の設置
・仮設校舎への支援物資受入
・書類の整理などその他雑務
※これらの業務はほぼ完了しています。

②学童保育施設の建設
・セーブ・ザ・チルドレンの全面支援により、学校と同一敷地内に学童保育施設の建設が決まりました。
建設自体は福祉課の業務ですが、取合いの調整などを行っています。
１０月３１日に竣工予定です。

③文部科学省への被災状況の報告
・文部科学省への報告が遅れている、被災状況の報告業務を手伝っています。
主に報告書に添付する図面類の作成です。

④復興計画の策定に伴う、小中一貫校建設計画の策定

・現在のところ復興計画(案)において学校建設地が明確になっていないので、複数の建設候補地に学校施設計画(案)を作図している状況です。復興計画の進捗に伴い、今後具体化していく必要があります。

…と、いった内容です。

大槌町では建築技術職員が不足しているようで、上記のいずれの業務も、かなり滞っています。私の赴任期間中には完結しない業務ばかりで、特に小中一貫校の建設については、今後さらに業務量が増えていきますので、引き続き職員の派遣が必要であると思います。

２．大槌町の状況について

①役場の動き

１０月１１日の課長会議（経営会議のようなもの？）で、３名の副町長が就任されたことについて報告がありました。

大槌出身の方が１名、国交省から１名、岩手県から１名とのことです。

３名の副町長がそれぞれ「調整」、「復興」、「産業振興」の役割を分担されるということです。

また、併せて機構改革が近々予定されているようです。

これまで大槌町には「部」が存在しませんでしたが、新たに設置されるようです。

②町内の状況

町内の様子ですが、大きな動きは無く相変わらず少しずつ被災した建物の解体や瓦礫の処分が進められています。

大潮の度に冠水しているゼロメートル地帯の道路については、１０月末の大潮に向けて、急ピッチで嵩上げ工事が進められています。

町内でスーパーの復旧工事が１件始まりました。いつ営業を再開するのか不

明ですが、これが完成すれば利便性が一気に向上しそうです。

３．派遣期間終了に伴う引継ぎ及び帰任について

　１０月末の帰任及び引き継ぎの関係ですが、今のところ次のようになっています。

１０月２９日（土）私の後任で、建築住宅課の平山くんが赴任
１０月３０日（日）遠野市の宿舎から釜石市の仮設住宅へ引越し作業
　　※冬季は積雪のため遠野市からの通勤が不可能になるため、
　　１１月から宿舎は釜石市に変更になります。
１０月３１日（月）終日業務引継ぎ
１１月　１日（火）花巻発１５：５５分の飛行機で帰阪
１１月　２日（水）箕面市役所へ出勤

の予定です。

（2011/10/17　西田→平山）
※後任者の支度のための情報

　仮設住宅にある物、職場にある物を思いつく限りリストアップします…

仮設住宅

※細かい物から…
　①風呂
　風呂桶、いす、シャンプー、リンス、せっけん
②トイレ
　トイレットペーパー、そうじ道具一式
③台所
　なべ大、なべ小、やかん、フライパン大、フライパン小、おたま×２、フラ

イ返し、皮むき、包丁、ざる、ボール、食器がいっぱい、はし、スプーン、フォーク、レトルト食品、ビールなどの残り、前任者がおいていった謎の調味料がいっぱい…、ビニール袋、ラップ、アルミホイル、ジップロック、タッパ、その他…

④居間

テーブルタップ、座椅子、座卓大、座卓小、敷きふとん、マット、掛けぶとん、毛布、まくら（シーツ、ふとんカバーはこっちで買って下さい。）、ティッシュペーパー、ごみ箱

⑤その他

洗濯洗剤（もうすぐなくなる…）、洗濯ロープ、洗濯バサミ、ハンガー１０本くらい、なぜかスーパーのカゴ、芳香剤とか…、カレンダー、マスクがいっぱい

今住んでる遠野の宿舎は、和泉市→枚方市→箕面市、と３代引き継いでいるため、前任者が残していった細かい物がいっぱいあります。結構なんでもあるので何とかなります。足りなければ釜石に買いに行けばよし！

家電類は遠野の宿舎にあるものですが…

テレビ、掃除機、電話（使ってない！）、洗濯機、冷蔵庫、電子レンジ、炊飯器、扇風機、読書灯、目覚まし時計、ドライヤーです。

ガスコンロ、エアコンは仮設住宅についてました。コタツ買ってくれるらしいです。

職場にあるもの

机、事務用品１式、ＰＣ、高速ネット環境、建築申請メモ、消防メモ、（古いけど）建設物価、コスト情報、建築工事共通仕様書

逆に持ってくる物は…

ヘルメット、作業着（青いやつ（笑））、カッパ、事務用品は１式ありますが念のため持ってくること！（特に電卓）、建基法、今までの仕事で蓄積したデータ類、名刺、防寒具、寒中電灯（仮設住宅の外が真っ暗なので必須！）

荷物は大量になると思うので、できるだけ宅急便とかで送って下さい。
クロネコヤマトの営業所止めにするなら、２９日でも３０日でもクルマで取りに行きます。釜石の営業所でいいと思います。

ちなみに私が持ってこなくて困った物は、
通勤用のカバン（←こっちで買った）、灰皿（いらんか…）、箕面市の皆さんのメールアドレス（←これ結構大事。必要な連絡先は予め調べてきて下さい。）

これから、どんどん寒くなると思うので、冬の服はできるだけ持ってきた方がいいと思います。

追伸
こちらへ派遣期間中は大槌の仕事に専念して下さい。箕面での仕事はしっかりと引継ぎ書を作って、退職するつもりで完全に引継ぐようにした方がいいです。

派遣報告書
みどりまちづくり部　平山　福太郎　（任務：学校営繕支援）

派遣先：岩手県大槌町
派遣期間：平成 23 年 11 月 1 日～平成 24 年 1 月 31 日

１．業務の状況

（大槌町の体制）

昨年８月２９日に就任された碇川町長を中心として、佐々木副町長（調整担当）、高橋副町長（産業振興担当）、石津副町長（復興担当）の副町長３名体制で大槌町の復興に向けた業務が進められていた。庁内では復興局が復興業務の中核を担っており、有識者、地域住民等からなる地域復興協議会の意見を踏まえ、コンサルタント会社、ＵＲ都市機構等の協力を得ながら、復興の道筋を示す復興計画基本計画等の策定作業が行われていた。

私が配属された教育委員会事務局学務課は、教育長、教育次長を含めて１５名体制であり、そのうち派遣職員は私のほかに岩手県及び岩手県軽米町の方など３名が業務に従事していた。

学務課の業務内容は、教育政策、学校の管理運営、就学支援等に係る通常業務のほかに、被災児童等の援助、全国から寄せられる支援物資の対応等を行っていた。また、仮設校舎の維持管理、仮設校舎に替わる新しい校舎の建設計画が急がれていた。

（業務の状況）

赴任後は、文部科学省の災害復旧事業を活用して建設された仮設校舎について、国庫補助金の交付申請等に係る業務を担うことになった。初めて経験することが多く不慣れな部分も多々あったが、岩手県及び文部科学省の方々から様々な助言等を頂くことで何とか業務を進めることができた。

子供たちの学習環境は、仮設校舎の完成によって震災直後と比べて格段に改善されたが、いつまでも仮設というわけにもいかず、次のステップである

本設校舎の移転建設を早期に実現するため、移転建設候補地の選定、調査を進めながら、その財源となる災害復旧事業について文部科学省と意見交換等を重ねた。

私が派遣期間を通じて携わった業務は、復興計画基本計画・実施計画の策定、復興交付金の交付申請を行うための復興交付金事業計画の策定等に関連する業務が中心であり、技術職として派遣された立場としては、目に見える形の復興事業を進められないことに内心忸怩たる思いはあったが、復興の一助になれるよう全力を尽くした。

２．被災状況

大槌町は岩手県の沿岸南部に位置しており、水産業を中心とした街づくりが行われていたが、東北地方太平洋沖地震により発生した大津波により中心市街地は壊滅的な被害を受け、町役場、消防庁舎、学校などの防災拠点となる公共施設も使用できない状態となって連絡通信手段が途絶したため、支援が得られず孤立してしまった。

沿岸地域は、過去の津波被害を教訓として防波堤、水門といった強固な構造物により守られていたが、大津波はこれらを乗り越え、想像を絶する力で破壊して市街地を飲み込んでしまった。震災以降のテレビ報道などで現地の状況を知ったつもりになっていたが、被災地を実際に目の当たりにして現実と思えない光景に言葉では言い表せない恐怖を感じた。

（写真①）城山体育館から見た大槌町の市街地。未だに被災建物が解体されず残っている。

（写真②）小鎚川にある水門（奥側）。津波は水門を乗り越え小槌川を遡上し、市街地を襲った。

震災による犠牲者と行方不明者は合わせて千人を超えており、未だに約五百名もの方が行方不明の状況にある。震災前の大槌町の人口は約一万五千人であり、如何に甚大な被害であったのかが窺い知れる。現在も海上保安庁、警視庁等による捜索が続けられているが、行方不明の方々が一日でも早く家族のもとへ戻られることを祈願する。

区　　分		人　数
① 死亡者		802　人
身元の確認状況	身元が確認された遺体数	742　人
	身元が確認されていない遺体数	60　人
② 行方不明者数		479　人
	うち、死亡届の受理件数	446　人

（表①）東日本大震災人的被災状況（大槌町ＨＰより抜粋）

（写真③）大槌川の河口（奥側）。大槌川を遡上した津波は堤防を越えて市街地（右側）を襲った。

（写真④）吉里吉里地区の海岸。防波堤は各所で破壊され、引き波により海側になぎ倒されている。

３．復旧の状況

（道路の状況）

主要な幹線道路、生活道路は復旧工事が進んでおり、通行に支障がない程度まで回復したが、街灯、ガードレールは津波により流されたままのため、日が暮れると役場周辺も真っ暗になり、そこに市街地が存在したことが想像できない状況である。

また、仮設校舎への通学手段としてスクールバスを運行しているが、徒歩、自転車通学の児童・生徒も多数おり、安全確保のため通学路の復旧が課題となっている。

（商業施設の状況）

大槌町内ではコンビニのローソンがいち早く復旧したが、生活用品を買うことができる数少ない施設のため、日夜を問わず混雑している状況であった。

（写真⑤）大槌北小学校のグラウンドにオープンした仮設商店街。スーパー、理髪店などが入っている。

（写真⑥）大型商業施設。震災津波により甚大な被害を受けたが昨年１２月下旬に復興した。

昨年１２月以降、大槌北小学校のグラウンドにプレハブの仮設商店街がオープンし、さらに震災津波により被災した大型商業施設が周辺住民の強い要望を受けてリニューアルオープンするなど沿岸部の商業施設の復旧が進み、復興に向けた足掛かりが少しずつ進んできたと感じた。

（震災廃棄物の状況）

最近の報道で最も多く取り上げられている震災廃棄物の処理方法について、静岡県島田市が大槌町及び山田町の震災廃棄物を受け入れると表明されたが、全国各地で住民の反発もあって難航していると報道されている。

大槌町の震災廃棄物は放射能の影響を受けていないが、原発事故による風評被害もあり処理が思うように進んでいない。

（写真⑦）処理されていない震災廃棄物の山。町内に幾つもこのような光景が見られる。

（写真⑧）大槌中学校のグラウンド。津波により破損、焼損した車両が数多く残されている。

今後も被災建物の解体撤去が行われるため、震災廃棄物はさらに増加するが、町内の仮置き場に余裕はほとんどなく行き場がない状況にある。

復興事業を加速させるためには、震災廃棄物の処分先の確保が不可欠である。

（写真⑨）大槌中学校。災害廃棄物処理事業により今年度内に解体される予定。

被災３県に処分先を確保するべきとの意　見もあるが、被災自治体は復興を進めるためのマンパワーも不足しており、依然として厳しい状況にある。

全国の自治体の協力により処分先が決定し、一日も早く被災地から廃棄物が無くなることを期待してやまない。

４．復興の状況

（復興計画の状況）

大槌町では町民の意向を取り入れた復興計画とするため、地域復興協議会等において地域ごとに復興ビジョンを検討し、これらの意見を集約して「大槌町東日本大震災津波復興計画基本計画」が策定され、昨年１２月末に町議会において承認された。

さらに今年度内に復興計画実施計画を策定するよう町長方針が示されたことから、教育委員会事務局においても、教育、学校等に関連する全ての事業を抽出し、当計画の策定を進めるとともに、復興交付金の活用を含めた財源の確保に努めた。

大槌町の復興計画期間は、平成３０年度までの８年間となっているが、１０年で計画している被災自治体もある。いずれにしても復興が完了するまでに事業が長期間に亘ることから、事業を継続させるための財源が必要不可欠となる。

（表②）大槌町東日本大震災津波復興計画基本計画【概要版】（大槌町ＨＰより抜粋）

（復興交付金）

大槌町を含む沿岸部の被災自治体は、主要な市街地の大半が甚大な被害を受けたことから、復興が完了するまでは大幅な税収減が見込まれており、経常経費の大幅な削減、圧縮が進められている。

復興事業を進める上で必要な財源には復興交付金等が充てられるが、現在のところ復興交付金が交付される計画期間は平成２７年度までとされているため、以降の財源確保に不安が残っている。

復興交付金は、インフラの整備、住宅の集団高台移転、災害公営住宅の建設、学校の移転建設などの復興の基幹事業を進める財源となるため、教育委員会事務局においても学校移転建設事業、避難所整備、学習環境の改善など各種事業での活用を検討した。

その結果、今年１月末に岩手県の被災自治体と合同で復興交付金事業計画の第一回申請を行うことができたが、復興庁（先月までは東日本大震災復興対策本部）は、事業の必要性、確実性などを検証した具体的な事業計画の提出を求めているため、申請できた復興事業は当初予定から随分と下方修正せざるを得なかった。先日、第一回申請分の交付決定がされたと報道されたが、全ての復興事業が交付決定されるまでには相当な期間を要すると考えられる。

基幹事業における対象事業（５省４０事業）

※本リストは3次補正予算における対象事業であり、復興期間全体を通した場合には、内容が変更となる可能性がある。

番号	事業名	番号	事業名
文部科学省		18	道路事業（高台移転等に伴う道路整備（区画整理））
1	公立学校施設整備費国庫負担事業（公立小中学校等の新増築・統合）	19	道路事業（道路の防災・震災対策等）
2	学校施設環境改善事業（公立学校の耐震化等）	20	災害公営住宅整備事業 （災害公営住宅整備事業、災害公営住宅用地取得造成費等補助事業等）
3	幼稚園等の複合化・多機能化推進事業		
4	埋蔵文化財発掘調査事業	21	災害公営住宅家賃低減化事業
厚生労働省		22	東日本大震災特別家賃低減事業【新規】
5	医療施設耐震化事業	23	公営住宅等ストック総合改善事業（耐震改修、エレベーター改修）
6	介護基盤復興まちづくり整備事業【新規】 （「定期巡回・随時対応サービス」や「認知症対応型共同生活介護」の整備等）	24	住宅地区改良事業（不良住宅除去、改良住宅の建設等）
		25	小規模住宅地区改良事業（不良住宅除去、小規模改良住宅の建設等）
7	保育所等の複合化・多機能化推進事業	26	住宅市街地総合整備事業（住宅市街地の再生・整備）
農林水産省		27	優良建築物等整備事業（市街地住宅の供給、住環の再開発等）
8	農山漁村地域復興基盤総合整備事業 （農業排水等の農業基盤、農地等の生産基盤整備等）	28	住宅・建築物安全ストック形成事業（住宅・建築物耐震改修事業）
		29	住宅・建築物安全ストック形成事業（がけ地近接等危険住宅移転事業）
9	農山漁村活性化プロジェクト支援（復興対策）事業 （被災した生産施設、生活環境施設、地域間交流拠点整備等）	30	造成宅地滑動崩落緊急対策事業【新規】
		31	津波復興拠点整備事業【新規】
10	震災対策・戦略作物生産基盤整備事業 （麦・大豆等の生産に必要となる水利施設整備等）	32	市街地再開発事業
		33	都市再生区画整理事業（被災市街地復興土地区画整理事業等）
11	被災地域農業復興総合支援事業（農業用施設整備等）	34	都市再生区画整理事業（市街地液状化対策事業）
12	漁業集落防災機能強化事業（漁業集落地盤嵩上げ、生活基盤整備等）	35	都市防災推進事業（市街地液状化対策事業）
13	漁港施設機能強化事業（漁港施設用地嵩上げ、排水対策等）	36	都市防災総合推進事業（津波シミュレーション等の計画策定等）
14	水産業共同利用施設復興整備事業 （水産業共同利用施設、漁港施設、放流用種苗生産施設整備等）	37	下水道事業
		38	都市公園事業
15	農林水産関係試験研究機関緊急整備事業	39	防災集団移転促進事業
16	木質バイオマス施設等緊急整備事業	環境省	
国土交通省		40	低炭素社会対応型浄化槽集中導入事業

（表③）東日本大震災復興特別区域法資料（復興庁ＨＰより抜粋）

7

５．学校の状況

大槌町では４つの小学校と１つの中学校が震災津波により使用できない状況になったため、被災した５校の合同仮設校舎を建設して授業を再開している。

校舎は仮設であっても教育は仮であってはならないという教育長の強い意志とリーダーシップの下に教師、職員が一丸となって復興に取り組んでいる。

（学校の様子）

学校の子供たちへの支援は、今なお全国各地から日々様々な形で届けられている。昨年１１月には被災した４つの小学校が合同でロードレース大会を開催し、民間企業がその様子を写真撮影して写真やアルバムを児童にプレゼントするなどの支援活動も行われた。

（写真⑩）合同レース大会の様子。児童はお互いを応援しながら最後まで頑張って走り切った。

今年１月末に被災した４つの小学校と１つの中学校の児童生徒作品展が開催された。暗い作品が展示されているのではないかという不安を払拭する非常に明るく前向きな作品が数多く展示されていた。大槌町の将来を担う人材を育成するためにも、新しい学校の建設が急がなければならないと強く感じた。

（写真⑪）城山公園体育館で行われた児童生徒作品展の様子。児童生徒の作品の他に全国からの応援メッセージなども展示された。

（仮設校舎の状況）

岩手県の沿岸部は内陸部と比較して積雪も少なく気温も高めと言われているが、今年は寒波の到来により最低気温が氷点下１０度まで下がる日が続いたため、仮設校舎では給水系統が凍結するなど大阪では考えられないような

トラブルが発生し、その対応に追われた。

同様の凍結事故は沿岸被災地の仮設住宅でも続いたため、水道業者はその対応に追われて復旧が追い付かないとの報道もあった。いずれもプレハブの仮設建物であるため設備等で脆弱な部分があることは否めないが、復興が進むまで長期間使用することが見込まれるため、今後は利用者の要望にいち早く応えて、より良い環境に改善していくことが求められている。

（学校の移転建設）

復興計画基本計画において、被災した４つの小学校と１つの中学校の学区を再編して小中一貫教育校として移転建設する方針が示され、すでに高台に立地している大槌高等学校を含めて文教ゾーンとして位置付けられた。

このエリアでは、震災前より都市計画道路の整備事業が進められていたため、事業主である国土交通省三陸国道事務所と調整しながら学校の建設予定地の選定作業を進めていた。移転候補地のほとんどは民有地であり、地権者、地元住民の合意を得ながら事業を進めていくことになるため長期的な事業となるが、仮設校舎に入学した児童が仮設校舎で卒業することがないよう、また、復興交付金事業計画が平成２７年度までしか認められていないなどの状況も踏まえて、復興事業の前倒しを図るべく津波復興拠点整備事業の活用など手法について検討、議論を重ねた。

また、大槌町内では震災前より少子化が進んでいたため、学校の統廃合は大きな課題となっているが、震災後は沿岸部での雇用が失われたこともあって、町民・児童生徒数が急激に減少した。このような状況から被災した学校をそれぞれ再建するのではなく、小中一貫教育を導入し、学区を再編して小中一貫教育校を移転建設する方向で検討を進め、昨年１２月から今年１月にかけて小中一貫教育の導入に向けた地域保護者説明会を複数回開催し、一定の理解を得るに至った。

来年度以降は、平成２５年度の小中一貫教育の円滑な導入・実施に向けた準備委員会の設置等が予定されている。

６．派遣職員の住環境

（宿泊施設）

大槌町内は市街地が甚大な被害を受けたため、外部から支援に来るボランティア、建設業者等が宿泊利用できる施設が皆無であり、近隣の釜石市、遠野市等のホテル等を利用している。

震災津波により被災した釜石市内のホテルも昨年１２月以降順次本格オープンしており、街に少しずつ活気が戻りつつあるように感じた。

（通勤環境）

私は、釜石市栗林町の仮設住宅に入居して業務に従事したが、副町長や岩手県庁からの派遣職員も周辺の仮設住宅に数多く入居されている。

釜石市栗林町から大槌町役場までは距離で１０ｋｍ、車で２０分程度の距離のため、前任の派遣職員が住んでいた遠野市からの通勤と比較すると通勤に伴うストレスは大幅に軽減され、より業務に専念できる環境になっていると感じた。

昨年１２月以降は積雪により度々路面が凍結するなど、運転に注意を要することもあった。特に沿岸被災地では前述したとおり道路の街灯、ガードレールが復旧していない箇所が多数存在しており、仮設住宅は道路が整備されていない高台に立地している場所が多いため、町民から路面の凍結による事故を心配する声が多く寄せられていた。

（生活環境）

大槌町内の大型商業施設が復興したことで、生活に必要な物資が手に入るようになり生活環境は随分改善した。

また、この大型商業施設は通勤経路上に位置しているため、買い物のために長距離移動する必要がなくなり、派遣職員の負担が軽減された。

７．派遣業務の総括

震災発生から７カ月を経過していたことから、一定の復旧・復興が進んでいるものと考えていた。しかし、被災建物は被災後の姿そのままに存在され、道路は大潮により冠水しているなど依然として厳しい状況であった。住民が震災以前の生活を取り戻すまでの復興の道筋をイメージできないほど震災津

波による被害は甚大であった。

着任後、東北・大槌町を復旧・復興すべく強い意志を持って町民のために献身的な働きをされる職員の方々を見て、大槌町を必ず復興させるという確固たる意志と目標を共有・共感し、業務に従事することを決意した。

今後の復興に向けての課題は、復興を担う人材確保である。大槌町では震災津波により幹部クラスの職員が多数犠牲になったため、部長クラスに岩手県からの派遣職員の方々を据えているが、岩手県も人的余裕がないため今年３月末にも派遣職員を引き上げるとの話もある。

昨年末に各部局から来年度の人員体制について増員要望が出されたが、復興事業が非常に大規模であり、また、実施が確定していない事業も多いことから、どれだけの人員体制が必要となるか掴めていないという状況にある。

復興事業が本格化する来年度以降は、大槌町の職員の負担もより一層増大することが予想され、復興事業を加速させながら復興計画に掲げる目標を実現していくためには、今後も被災自治体との情報共有を図りながら現地の要望に応じて迅速に職員派遣を行うなど全国の自治体から継続した支援が必要であると強く感じた。

箕面市においても、近い将来に発生が予想されている東海・東南海・南海地震等に備えて、各自治体や専門知識を有する各種団体との水平連携の構築・強化を図ることも重要であると考える。

今回の震災では、災害時に安全と考えられていた防災センター、学校などの避難施設でも震災津波によって人的・物的被害が生じた。市民の生命を守るための拠点となる公共施設の防災機能の強化、改善に努めていく。

職員手記
みどりまちづくり部　平山　福太郎　（任務：学校営繕支援）

派遣先：岩手県大槌町
派遣期間：平成 23 年 11 月 1 日～平成 24 年 1 月 31 日

今後の防災行政の発展の一助となるよう、今回の派遣業務を通じて私が感じたことを記述します。なお、あくまでも私見ですので、その点を踏まえてご活用ください。

１．職員の状況

大槌町は県内で最も被害が大きかった地域です。職員の多くは町内に住まわれていたようで、自らも被災しながら町民のために不眠不休で復旧作業に従事されたようです。

１月３０日に職員の方が事故により命を失う痛ましい出来事がありました。原因は分かりませんが、精神的に厳しい状況に置かれていたとの話も聞きました。他にも精神的に苦しい状況に置かれている方は多数おられると思います。

防災対策としてハード面の強化は勿論ですが、大規模災害からの復旧・復興は長期間を要することから、職員のメンタル的なサポートを継続的に行うことが必要になると思います。これは被災自治体だけで解決できる問題ではありませんので、自治体間の防災・支援協定等により相互支援体制の構築等が必要かと思います。

２．発災後の状況

（物資）

大槌町は災害発生の翌日に自衛隊が到着し、食糧等も３日で届くようになったので、災害の際は３日持ち応えることができれば助かると言われていました。

停電等により通信手段が途絶した大槌町では、やはり衛星電話が効果を発揮したようです。台数は足りなかったものの、自衛隊等から衛星電話が持ち

込まれたようです。

（犠牲者等）

今回の震災では多数の方が犠牲になりましたが、ご遺体を包むための布団、毛布等が全く足りなかったようです。災害備蓄倉庫に飲料水等を保管することは勿論ですが、経験からブルーシートなども保管しておくべきだという意見がありました。

震災後、最も早く復旧したのは、お寺、花屋、墓石屋という話もありますが、火葬場が足りず、ご遺体の保管場所、ドライアイス等の不足も深刻だったようです。釜石市では土葬も検討され、最終的に他府県で火葬されるなど相当対応に苦慮されたようです。（これは本に書いてありました。）

将来において予想される最大規模の災害に備えるという視点に立てば、こういった事態も視野に入れた備えが求められると思います。

３．大槌町の状況

正直、街づくりの観点から云うと復興はほとんど進んでいません。復旧事業は行われていますが、復興計画が決まっていないため、事業自体を進められません。これは沿岸被災地共通の課題のようです。

また、復興交付金がもらえないと、事業を進めるための財源もありません。復興交付金の交付が決まっても、これを事業化していくマンパワーも足りません。岩手県を通じて大槌町に配付される義援金も３０億円程度だそうで、復興事業を行うには全く足りません。

しかし、報道でも云われているように、廃棄物だけは一向に減らず、どんどんと増えていっている状況であり、今後、夏場に向けて気温が上昇してくると昨年同様に環境の悪化等が懸念されています。

沿岸被災地では、相当なスペースを廃棄物保管用地として使用しており、これらの処分が進まない限りは復旧・復興が進められない状況です。なお、廃棄物保管用地として民有地も使用しているようです。

４．今後の防災対策

最近大きく取り上げられている地震として、東海・東南海・南海地震と首都直下型地震がありますが、いずれも大きな被害が予想されています。将来予想される大規模地震に備えるためにも、東北地方をいち早く復興させるこ

とが防災対策としても重要ではないかと思います。

５．現在の心境等

震災から間もなく２年となりますが、報道においても東日本大震災の被災地を取り上げる番組が激減したように感じます。

被災地の復興状況が気になるので日々ニュース、報道番組等はチェックしていますが、ＮＨＫ以外ではほとんど目にしません。

被災地の復興が目に見える形になるまで相当の時間を要すると思われますが、常に自分の関心事として考えていこうと思っています。

６．当時の心境等

派遣の打診があった際、本当に自分でよいのかという心配、不安しかありませんでしたし、被災地へ派遣されている期間中は本当に大槌町の役に立っているのか、と日々不安に感じ過ごしていました。

今まで自分が行ったことのない業務ばかりでしたし、目に見えた成果が出ないということもありましたので心苦しい毎日でした。

途中から割り切って、大槌町の職員の負担が少しでも軽くなるように最善を尽くそうと気持ちを切り替えたことで、張り詰めた気持ちに少し余裕を持つことができ、派遣期間を無事過ごせたように思います。

派遣職員の皆さんは全力で復興業務に従事されていますので、長期間の派遣により体調を崩されることがないよう、本人、家族のために必要なサポートをお願いします。

（両面印刷用調整白紙）

５．戸籍事務支援

Contents

派遣報告書
　みどりまちづくり部　山本　真由美　（任務：戸籍事務支援）
職員手記
　みどりまちづくり部　山本　真由美　（任務：戸籍事務支援）
派遣報告書
　総務部　林　直子　（任務：戸籍事務支援）
職員手記
　総務部　林　直子　（任務：戸籍事務支援）

派遣報告書
みどりまちづくり部　山本　真由美　（任務：戸籍事務支援）

派遣先：岩手県大槌町
派遣期間：平成 23 年 11 月 1 日～平成 23 年 12 月 31 日

平成 23 年 11 月 1 日から平成 23 年 12 月 28 日までの 2 ヶ月間、東日本大震災により被災した岩手県大槌町に戸籍事務等の支援職員として勤務してきました。

大槌町役場で勤務する中で感じたことを中心に報告したいと思います。

【派遣決定から出発まで】

震災直後日々報道されるショッキングな映像を見て、自分に何かできないか？と悶々と思いながら過ごしていた。震災から約 1 ヶ月後、戸籍事務の支援として被災地への派遣が打診され、「行きます」と迷いなく即答したのを昨日のことのように覚えている。物事を慎重に決断する性格の私にとってこの行動は自分でも信じられないのだが、潜在的な力によって押し出された反応なのかもしれない。

しかし戸籍事務の経験年数が 1 年で、5 年近くのブランクがあったため赴任先で業務ができるかどうか不安に感じたのも事実である。戸籍事務は日々窓口で応対する中で必要な知識やセンスが培われるものである。研修テキストや実務六法など読んで復習するものの、被災地ではイレギュラーな事務も要求されるため、私の不安は高まるばかりであった。そんな不安を解消するため、派遣前に窓口課で業務研修をさせていただく機会を設けていただいたことは有り難く感じている。出発直前は多少の不安はあったものの、次のことを心がければ多少の知識不足もカバーできるだろうと思い、常に意識して行動するようにした。

① （支援に来たというよりも大槌町役場に異動したという感覚で）大槌町の職員と同じ立場で仕事をする。

仮設庁舎前の様子

②町民の感情は全て（哀しみ、不安、怒りなど負の感情全て）共感と愛情でもって受け入れる。

【赴任したときの大槌町の様子】

岩手到着直後、関西広域連合の方に大槌町役場まで案内していただいたのだが、内陸から沿岸部へ進むにつれ、震災の爪痕が生々しく残る光景が現れてくる。戦後の焼け野原とでもいうような、市街地が全て流された状態だ。事前に周辺の写真等を見ていたのだが、現地に足を踏み入れ、実際自分の目で確認したとき、あまりのショックで言葉を失い涙が溢れるばかりであった。と同時にこれから 2 ヶ月間この地で勤務するのだと、改めて身が引き締まっていくのを感じた。

旧庁舎は津波で流され、正面玄関の前には地震発生後災害対策会議をしていた最中に犠牲になった当時の町長や幹部の職員を哀悼するため花が供えられており、その様が何とも切なさを感じさせた。

大槌町旧庁舎

ひょうたん島のモデル、蓬莱島。正午にひょうたん島のテーマ曲が流れた

【大槌町役場での業務内容】

赴任初日の辞令交付の際、碇川町長は「お好きなのをどうぞ」と自ら描かれた絵葉書を差し出し、派遣職員の緊張を解いてくれた。全て流された町の復興という重責を担うリーダーは、その重責に力むことなく穏和な方のように私は感じた。ただ、一人一人辞令を交付しながら、「よろしくお願いします。」と握手を交わす手からは、その穏やかな口調からは想像できないほどの力強い握力を感じ、復興への決意が深々と伝わってきた。

町民課の仮設庁舎

碇川町長自筆の絵手紙

町民課は、町民生活班と国保年金班の 2 班で構成されている。私が配属されたのは町民生活班で、戸籍・住民票等の窓口業務の他に、箕面市でいうと動物担当、環境政策、消費生活、選挙管理委員会事務局等の事務も担当しており幅広い業務内容をカバーしている。

町民課は明るい雰囲気で、窓口業務の感覚を取り戻すのに時間がかかった私を温かく受け入れ、サポートしてくれた。東北弁が聞き取れず何回も町民の方に聞き直しても、「よそがら来だの？遠ぐがらご苦労様。」など温かい言葉をかけていただき、支援にきたはずなのに、逆に支援されているような感じで精神的に助けられたと思う。

担当していた戸籍業務であるが、ほとんどが死亡届で行方不明の死亡届と遺体の身元判明した際の手続きが主である。行方不明の死亡届は次のような事項を遺族の方に聞き取りし、調書を作成しなければならなかった。

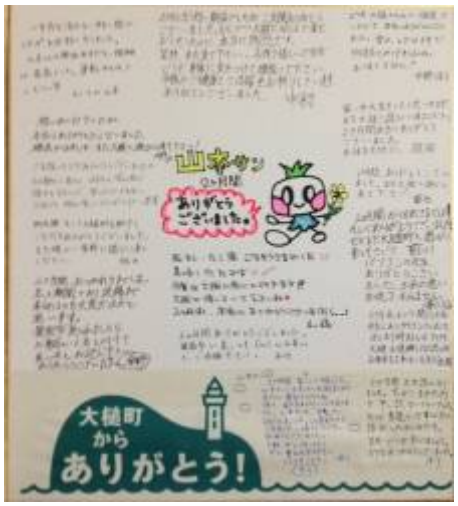
・津波発生時に本人がどこにいて何をしていたと想定されるか。
・目撃者がいればその目撃情報。
・避難所や遺体安置所を探したかどうか。
・自宅は流されたか。
・最後に連絡をとったのはいつか、本人とどれくらいの頻度で連絡を取り合っていたか　等

内容が非常にデリケートで窓口対応には細やかな配慮が求められるうえ、被災された方に辛いことを思い出させてしまうことへの申し訳なさ、また津波を体験していない部外者に対して申述することに抵抗を感じる人もいるのではないか、などいろいろな感情が複雑に混じり合い、最初は窓口に出るのに勇気が必要であった。また、感傷に浸らずするべきことをするという冷静さと遺族の哀しみに対する共感という感情のバランスが必要であり、かなりの神経を使った。

遺体の身元が判明した際の手続きは、すでに火葬されて町内のお寺に一時保管されている遺骨を引き取る際に必要な埋葬許可証を発行するのが主である。身元が分からないため、すべて一連の書類は遺体の識別番号が記載されている。番号を間違えば遺族の方に他人の遺骨を渡してしまうことになるので、慎重に事務手続きを行う必要があった。

私が赴任したのは震災後 8 ヶ月を経過していて、その“時”の感覚というのは被災された方それぞれ違うものであり、窓口で求められる姿勢もケースバイケースになる。考えに考えて、気持ちも整理しきって死亡届を出される方、申述書を書いているうちに、泣きながら気持ちが変わったと出すのをためらう方、さまざまである。また、町民と役場の心理的距離が近いため、職員に身近な方が死亡届を出しに来られた場合など、町民課の職員もさぞかし辛かっただろうと思う。そして、何より切ないのはそのような業務が日々当たり前に行われるその現実である。仕事をする上で冷静に対応しなければと思うのだが、身元判明された遺族の方に遺品を渡したとき窓口で号泣され、私もかける言葉がなくもらい泣きしてしまったことがある。大阪に帰ってからも、被災された方に１日でも早く心の平穏が訪れることを切に感じている。

町民生活班の業務は通常に戻りつつあったが、戸籍の附票（住所の変遷を証明するもの）が発行できない状況であったので、窓口業務の合間を見ながら事務作業を進めた。戸籍と住民票のデータを連携させて生じたエラー（3,000 件以上）を１件ずつ確認し、必要があれば他の市町村役場へ電話照会し、データを復旧させていく。地道で気の遠くなるような作業であったが、１日でも早く発行できるよう尽くした。（2 月 1 日から発行可能になったとのことである。）



町民課の皆さんからいただいた色紙　私の心の支えとなっています

役場近くにリニューアルオープンした商業施設「マスト」。近隣住民が待ち望んだ本格的なショッピングセンターで、復興の後押しになっている。

【生活面等について】

業務はもとより、私にとっての最大の懸案事項は派遣中の健康管理と毎日の車通勤であった。

慣れない土地で体調を崩して、かかりつけでない病院を受診することは一番避けたかったので、日々の健康管理には細心の注意を払った。幸い、仮設住宅には必要最低限のものは全てそろっており自炊ができる環境であったので、健康管理の基本である食生活を普段と変わりなく送ることができたのが自分にとっては最善だったのだと思う。ホテル住まいをしている派遣職員からは毎回の外食が辛いと聞いていたので、有り難い環境であった。

日常的に車に乗らない私が人生初めての、しかも全く見知らぬ土地での車での通勤は慣れるまでかなり緊張したが、車の通行量も少なく、大阪と違って無茶な運転をするドライバーもいないので次第に慣れた。ただ、通勤時目にする曲がったままのガードレール、津波に流された町並みを見慣れてしまっている自分に気づいたときは何ともいえない気持ちになった。

週末は努めて内陸へ遠出するよう努めた。のどかな環境にあった仮設住宅であるが、周囲は店もなく１日中閉じこもっているのも精神衛生上よろしくないので、岩手の様々な観光地を訪れた。震災後東北への観光客も減少しているため、少しでも多くの観光地を訪れお金を落とすことも派遣職員のもう１つの使命だと感じたからである。以前から訪れたいと思っていた、世界遺産に登録さ

れたばかりの平泉を訪れることができたのは感慨深かった。

世界遺産、中尊寺金色堂
岩手県民の心の拠り所となっている

国定公園浄土ヶ浜（宮古市）
津波でこの海岸も大量の瓦礫で埋め尽くされた

【おわりに】

振り返ると、2ヶ月間毎日全力で過ごしていたように思う。町の復興を目指して一丸となった組織は言葉で伝えられない気迫があり、私も信じられないほどの潜在的な力が無意識に出ていたのだと思う。そのため、2ヶ月間という時はまるで1年間にも思えるほど凝縮し、充実したものであった。

自らも被災し、家族や知人などを失い心に傷を負いながら、それでも愛する町と町民のために日々懸命に業務をされる職員の方々には本当に頭が下がるばかりである。私が同じ境遇なら？と自問自答したが、恥ずかしながらその問いに未だ私は自信を持って答えることができない。しかしながら、このような非常時で仕事をするという機会を得、災害時に必要とされる市職員の意識を再認識することができたのは貴重だったと思う。

また、他の自治体職員の方と一緒に仕事をすることができたのも、自分にとって良い刺激になった。町民課には、盛岡市と東京都千代田区からも職員が派遣されており、それぞれ派遣期間が異なるため、絶えず職員が入れ替わりしているのだが、派遣初日から事務が比較的スムーズに流れ、職場にも自然にとけ込んでいくのが驚きであった。派遣も含めた全職員の使命感、組織としての一体感がそのような空気を生み出すのだろうか。私も比較的早く職場に慣れることができ、よかったと思っている。

大阪に帰ってからは、震災関係のニュースを以前と違った気持ちで聞いている私がいる。2ヶ月という短い期間であったが、岩手の方の温かさに触れ、第3

の故郷のように感じているからだろうか。大槌町を始め、被災地が 1 日でも早く復興し、被災された方々が心から安心して生活できる日が訪れるよう祈っている。

最後に、今回このような貴重な機会をいただけたこと、また、派遣中の生活を支援していただいたこと、心から感謝いたします。

職員手記
みどりまちづくり部　山本　真由美　（任務：戸籍事務支援）

派遣先：岩手県大槌町
派遣期間：平成 23 年 11 月 1 日～平成 23 年 12 月 31 日

【組織の意志決定等について】

被災地での任務を無事果たすことができて結果的に良かったと思っていますが、出発前は職員課と市民安全政策課の連携がきちんとできているのだろうか？と心配になる場面が数々見受けられ、かなり振り回されて非常に辛い思いをしました。災害などの非常時においては、組織として迅速に意志決定をし、またその決定事項を正確に、かつ決まったラインで伝えることが重要になると思います。

【心のケアについて】

被災地での経験は非常に貴重で、このような機会をいただいたことに感謝しています。帰ってから周囲の人に自分の経験を話すのですが、うまく説明できないもどかしさ、行った者にしか分からない感覚等があり、疎外感を覚えました。

派遣中は、使命感、責任感、ほぼ壊滅状態の町の光景を日々目にすることで無意識に生じる本能的な防御反応、町民や職員の哀しみを感じつつその感情を抑えようとする反応、復興支援に携わることができる喜び、仕事への充実感、満足感など、正負の感情が一時期に一気に生じていました。今振り返れば心身共に極度の緊張状態で過ごし、かなり疲労していたはずなのに、高揚感からそれに気づくことができなかったのだと思います。被災地という非日常の環境が日常になりつつあった頃に帰阪し、元いた場所に帰ったはずなのに違和感を覚え、環境、時間の感覚、緊張感…、様々なギャップを感じて心身のバランスを崩してしまいました。

なぜそのような状態になってしまったのか、最初は分かりませんでした。幸い、被災地派遣を経験されていた職員課の保健師さんのカウンセリングを受ける中で、同じ体験を共有し、押さえていた心の感情を再生することで少しずつ

回復することができています。

帰阪後、「惨事ストレス」という言葉を初めて聞き、調べてみると自分も似たような症状が出ていると思いました。出発前は赴任地で任務を果たせるかどうかばかり心配していて、帰ってからのことを全く考えていませんでしたが、今回の経験で災害時における職員の心理状態を疑似体験でき、よかったと思います。間もなく震災後１年を迎えますが、節目の時に心の疲れが出やすいと言われており、職員の心のケアの重要性が叫ばれています。市民安全政策課としても、災害時において職員の心理状態がどのようになるかを認識しておくことは参考になるのではないでしょうか。

派遣報告書
総務部　林　直子　（任務：戸籍事務支援）

派遣先：岩手県大槌町

派遣期間：平成 24 年 1 月 3 日～平成 24 年 3 月 31 日

１．市の概況

・人口：13,300 人（平成 24 年 3 月 1 日現在）

・市の面積：232.29ｋ㎡

・地勢：岩手県沿岸南部の町。南は岩手県釜石市、北は岩手県下閉伊郡山田町と接している。海岸沿いの小さな範囲の平地に市街地が集中している以外は殆どが山間部である。

漁業以外は産業が少ない。もともと交通が不便な地域であったことや、近年は若年層の流出も進んでおり、過疎化が進んでいた。

【参考】震災前人口：15,994 人（平成 23 年 3 月 1 日現在）

平成 23 年３月から平成 24 年２月末までの転出者数：1,670 人

※このうち平成 23 年 5 月から 6 月末までに 972 人が転出した。

２．被災状況

・震災による死者数：1,227 人（平成　24 年 3 月 31 日現在）

内、行方不明者数：445 人（※）　身元判明数：782 人

※行方不明者数については、親族から役場に届出があったもの。実際はまだ多数、いるものと思われる

・町の商業や経済の機能の大部分が集中していた平野部はほぼ壊滅状態、少数の高台にあった家屋が被害を受けなかった程度である。

・町役場も全壊。町長以下全職員の約４分の１にあたる４０人が死亡あるいは行方不明になった。

・町役場は屋上付近まで浸水し、行政文書や資料、電算機器も流失し、住

被災した大槌町役場

民の基礎となる住民基本台帳や戸籍も流失した。

３．町及び役場のおける復興の進捗状況

・行政機能は旧役場から少し離れた町立大槌小学校の敷地に仮設庁舎を設置。昨年 4 月 25 日からはそこで業務を行っている。今年 7 月からは、大槌小学校校舎を改装して、新しい庁舎となる予定。

・業務については各地から来た派遣職員の支援で行っている。死亡または行方不明の職員のほとんどが課長級以上の管理監督職のほか、中堅職員だったこともあり、そのダメージは非常に大きく、全体的に行政能力の劣化や退化が見られるうえ、レアケースへの対応に遅れが目立っている。

・震災直後から、身元不明も含め、死亡届の届出が殺到したものの、システムが稼働していないためすぐには届書を受理できず、受付することしかできなかったようである。

　住基システムについては被災後、役場に残っていたサーバを回収し、業者に復元を依頼したところ復元に成功したため復旧が早かったが、戸籍システムについては、バックアップデータが平成 23 年２月末までしか法務局に残っておらず（法務局は被害なし）、暫定復旧させて同年４月 13 日から、住基システムとともに稼働を再開後、同月 29 日に戸籍の再製が完了したとのこと。

・現在も住民基本台帳カード発行、公的個人認証サービス、戸籍システムのうち身分証明の発行については停止している。特に、資格取得の関係で身分証明が必要な町民に対して「身分証明を発行することができない証明」を行政証明として無料発行して対応しているが、いずれも震災から１年が経過し、そろそろ対応できるように準備を進めていくことが求められている。

・平野部中心に昨年 12 月に大型のスーパーとホームセンターの複合施設がオープンし、だいたいの生活用品は買い揃えることが可能となった。しかし、町民のほとんどはそこでの買い物でしか必要なものが手に入れられないことや、公共交通機関もバスの便数が不足しており、車を失った被災者や高齢者にとってはますます不便な状況になっている。

・町民の多くは漁業や自営業に携わっていたものが多く、今回の災害で船や家が流失し、かなりの世帯が失業したと思われ、このことも転出者の増幅

の一因と考えられる。

・避難所や仮設住宅も山間部に建設され、ほぼ満員状態となっている。町民の生活拠点となっているにも関わらず、仮設住宅周辺へのスーパーや病院などの仮設店舗の進出は鈍い。

４． 職場の様子について

配属された民生部町民課職員の構成は次のとおり。

箕面市でいう「グループ」が２班あり（町民生活班・国民年金班）町民生活班に所属。

・課長	１名（町職員）
・班長	２名（町職員：町民生活班、国民年金班各１名）
・主任	１名（町職員）
・主査	２名（町職員１名、派遣職員１名）
・主任	１名（町職員）
・主事	５名（町職員４名、派遣職員１名）
・臨時職員	５名
計	１６名

震災に関連した死亡届は減少しており、町民課の人数は適正に思われる。また他の町民に対応する課においても、震災関連の事務は落ち着きつつあり、新規採用の関係もあり、事務職の派遣は今後減少するだろうと思われる。

１月４日の辞令交付式の際に碇川町長と撮影しました

一方で都市整備系の職員が不足しており、派遣職員も都市整備や区画整理に携わった経験のある土木職や建築職の派遣が強く望まれている。

５． 担当していた業務について

・主に戸籍事務を担当していたほか、住民票、戸籍全部（一部）事項証明発

行などを行っていた。残業はほとんどなし。

・この他に戸籍の附票の発行に向けた確認作業は派遣職員で担当。今回の震災で戸籍システムのデータも流失してしまい、戸籍については平成 23 年 4 月 29 日に再製が完了したものの、戸籍の附票は戸籍と異なり、住所を記録するもののため他市町村との連携が必要であった。大槌町に本籍があり、住所地が大槌町以外のかたの記録については国、都道府県、各自治体の協力を得て、震災までの一定期間の附票通知を大槌町に再送してもらい、入力確認作業を行った。 その結果、今年 1 月末で確認作業が完了し、2 月から戸籍附票の発行を再開することができた。

・通常、窓口業務は 2 月から 3 月は住民異動等の来庁者の対応で繁忙となる日が多いが、特に時間を割く転入者が少ないためか、あまり混雑する日はなかったように思われた。

・証明発行では、震災から 1 年を前にして遺族が相続や保険請求等の手続きに証明発行申請に来庁するケースが目立った。

・また、今年 3 月 11 日を境に、減少傾向だった「行方不明者の死亡届」をする遺族も目立った。

町民課事務所のようす

【参考】東日本大震災による死亡届の種類（大槌町で受付したもの）

①行方不明の死亡届（特例）

内容：遺体不明で震災（津波）による死亡と思われる死亡届。死亡診断書が添付できないため、親族からの申述により受理する。戸籍は死亡時刻を「平成 23 年 3 月 11 日午後不詳」とする。

②戸籍法第 92 条第 1 項の死亡報告

内容：遺体の身元が不明の報告。警察署から報告される。

③戸籍法第 92 条第 3 項死亡届（①を届出済）

内容：行方不明の死亡届により戸籍の記載が済んでいる者で遺体の身元が判明した場合の届出。①で戸籍記載が完了しているため、戸籍への記載は不要

④戸籍法第 92 条第 3 項死亡届（①が未届出）

内容：①の届出をしていない者について、遺体が判明した場合の届出。
戸籍は死亡時刻を「平成 23 年 3 月 11 日推定午後 3 時」とする。

６． 大槌町での生活について

（１）住居及び近所の様子

大槌町に隣接する釜石市栗林町の仮設住宅に入居。部屋は 4 畳半とキッチン。バス・トイレは別。底冷えがひどく苦労した。仮設ということもあり、強風で家が揺れることもあった。滞在中に玄関に風除室や網戸が設置された。栗林町自体は山間部であるため、震災の影響はさほど大きくなかったように思われる。

3 月はほぼ毎日震度 1～2 の地震があり、3 月 14 日午後 7 時前には、昨年の震災と同所の三陸沖を震源とした震度 3 の地震が発生し、震災後初めて津波注意報が発令され、役場近所にいた私も高台の公民館に他の職員とともに避難する経験をしたほか、同月 28 日にも 20 時ごろに自宅で震度 5 弱の地震を経験をした。

（２）通勤について

大槌町の公用車を借りて通勤した。通勤時間は約 20 分。

車は休日も借りることができたが、ガソリンの給油について、負担区分（公費か私費か）が曖昧で必要最小限の外出しかできなかったことが悔やまれた。震災による道路上の障害物はほとんど取り除かれており、運転には支障はなかったが、信号や街頭の整備がまだ完全ではなく、夜間は暗闇である。

７． 被災地派遣を経験して

当初、派遣職員の私では、町民のかたからみれば、大槌町の人間でもなければ、被災者でもないので、窓口対応では「よそもの扱い」されるのではと思っていたのですが、どのかたにも親切にしていただき、こちらが逆に元気づけられることも多々ありました。箕面市と異なり、市外からの転入者が少なく、来庁者のほとんどは、昔から大槌町に住んでいるかたです。箕面市の窓口課に来庁する市民のかたに比べ、誰もが自分の故郷である大槌町を愛し、誇りに思い、職員と町民が一丸となって、復興に向けて前進しようとしていることは窓口対応をしていて常々感じました。

職場の穏やかな雰囲気で、かしこまることもない中での手続きは、地域に密着

した良好な関係の中で行われ、職員も来庁者も気は楽です。

しかし、一方で職員の個人情報保護をはじめとした法律や条例に関する知識が浅く、町民の疑問への対応に相当時間を要することもありました。また、町民と職員が「知り合い」というケースも多く、条例や規則に定義されていない手続きの簡素化や町民の「甘え」も目立ちました。これらについては今後、窓口対応を行ううえでの課題になると考え、岩手県市町村課と大槌町町民課長に提言しました。どの業務についても、職員は住民に対して説明責任を果たす義務があり、「震災」を理由に対応が遅れることについても、そろそろ許されなくなりつつあります。今はまだ復興の途上でありますが、今こそ、そういった点を見直し、職員が意識を変えることで、町民の意識を高揚させ、サービスの質をあげていくときではないかと考えます。

箕面市で勤務して 20 年、その半分以上を窓口課で勤務し、窓口業務のノウハウはある程度はわかっていたつもりでいましたが、大槌町に派遣され、業務内容はもちろん、その他にも改めてわかったこともありました。やはり、このような大規模の災害からの復旧にあたっては、役場機能の中でも、証明発行等の行政サービスは町民の生活に密着しているため、早期の復旧が肝心となることや、それゆえの臨機な対応が求められることもよくわかりました。

また、この他にも当たり前の日常に感謝することや、人とのつながりを大事にすることも日々実感し、誰もが想像できない未曾有の災害で大切な人を失うことを思えば、もう少し、何事に対しても寛容になろうと思うようにもなりました。

この三ヶ月、人から必要とされることや感謝されることが多く、とても濃密な時間でした。私にできることといえば、仕事を通してなるべく元気に明るく振る舞い、町民のかたに笑ってもらうことくらいしかなかったのですが、それすらもありがたく思われ、かけられた言葉に逆に私が勇気づけられ、頑張ろうと思った毎日でした。災害派遣を経験した私がこれからやるべきことは、やはりこの現状を語り継いでいくことだと思います。

昨年の２月に第一中学校の生徒会が大槌町を訪問したことに関連しますが、私たちだけではなく、現在の便利さや豊かさに慣れてしまっていることが当た

り前の今の子どもたちにも、そのありがたさを知ってもらいたいです。阪神大震災の時の神戸市のような都市部での被害とは異なり、小さな町では復興はまだかなり先のことになると感じます。派遣期間は終了しましたが、今後も大槌町の復興を見守り、できる限りの支援を続けていきたいです。

大槌小学校グラウンドにある仮設庁舎

仮設住宅外観

仮設住宅の中のようす

職員手記
総務部　林　直子　（任務：戸籍事務支援）

派遣先：岩手県大槌町
派遣期間：平成 24 年 1 月 3 日～平成 24 年 3 月 31 日

１.被災地に赴くまでの出来事

私は、平成３年４月に箕面市役所に採用され、最初の勤務先が市民生活部市民課に配属され、戸籍事務の担当として、８年間市民課で業務を行いました。

私が市民課に在籍中の平成７年に阪神淡路大震災が起き、震災の起きた時間が真冬の早朝ということや、震源に近かった神戸市の被害が甚大であったことから、兵庫県内の自治体のいくつかは神戸市をはじめとした被災地支援のためにしばらく通常業務ができない状況となりました。

また箕面市の近隣市の兵庫県の自治体も被災状況は深刻で亡くなられたかたが多く、兵庫県内の火葬場だけでは火葬窯の数が不足し、箕面市にも震災に関連した死亡届が数件あったと記憶しています。

その後、平成１９年度から再び、窓口課に配属され、一昨年３月１１日に東日本大震災が起きました。この時、阪神淡路大震災の時の戸籍事務ことを思い出しました。同時にその夜からテレビで繰り返し流される映像を見て、これは、阪神淡路大震災のとき以上に大変なことになることも確信しました。

そして、ほぼ同時期に箕面市役所職員のうち、戸籍事務経験者に対して大槌町への派遣意向調査がありました。私は迷わず「行きます。」と答えたものの、その後、色々葛藤もありました。連日テレビで放送される津波の映像を見た娘から大槌町に行くことを強く反対されました。この時期、近いうちにまた大きな余震と津波があるおそれがあることが報道されていたからです。

私としては、戸籍事務が箕面市だけではなく他の自治体の役に立てる業務であること、これまでの自分の担当してきた業務の中で 1 番自信があったことから、未知な土地で役に立ちたいという気持ちが強くありました。

派遣期間は、昨年の 1 月から 3 月でした。花巻市内から、これからの 3 か月

を過ごすことになる仮設住宅がある釜石市に向かう電車の中で、娘から「お母さんが行くと決めたことなのだから、身体に気をつけてがんばって。応援しているよ。」とメールがありました。娘も私の頑張りを認めて応援してくれているのだということがわかり、これからの 3 か月間の生活を頑張ろうという気持ちを改めて奮い立たせてくれるきっかけとなりました。

2.大槌町役場で担当していた業務について

大槌町役場では箕面市での戸籍事務経験から、町民課に配属され、戸籍事務と証明発行事務を担当していました。その中でも、箕面市では経験したことない、衝撃的な業務がありました。「行方不明者の死亡届」です。

死亡届は死亡診断書や死体検案書が添付されて届出されるのが一般的ですが、そういった書類の添付がないまま、明らかにこの震災で死亡したと思われるかたの届を親族の申述に基づいて受付するという法務省からこの震災によって通達のあった特例的な届です。

行方がわからない、遺骨もない人を「死亡とみなす」、「戸籍から消す」ことに踏ん切りがつかなかった親族が、死亡届を出すということは、とても勇気がいることだと思いますし、その心情を考えると、感情移入してはいけないとわかっていても、とてもつらいものがありました。親族からの申述については、震災当時のこと、避難時の行方不明者の様子を聞き取りました。中には、怖く、辛く、不安だったその時のことを言葉を選び泣きながら、話してくれたかたもいました。この申述書を死亡届の添付書類として、戸籍消除の処理をしたことは、仕事とはわかっていても悲しく辛いものでした。

そんな中、私の話し方、役場付近の地理に土地勘がないことから、来庁される町民のかたもすぐに私が派遣職員であることに気づき、「遠いところからありがとう」とか、「関西と違って寒いから気を付けて」などたくさんお気遣いをいただき、ありがたく思うこともたくさんありました。「岩手日報」という岩手県の新聞で派遣職員として私のことがとりあげられたときも、わざわざ「新聞見たよ、ありがとう。」と言いにきてくれた町民のかた、「関西の人は元気だわ。

あんたとしゃべっていると元気になる。」といって手を握ってくれたかた、私自身がここで少なからず必要とされていること、役に立てていることを感じ、来て良かったと思えたことがたくさんありました。

3.最後に

震災からまもなく２年を迎えようとしている中、関西では、震災関連のニュースといえば被災地の状況よりも原子力発電のことの方が取り上げられるようになり、それすらも一時期に比べ、取り上げられかたが変化していきています。

被災地の各自治体は復興に向けて人的にも財政的にも苦労しているのが現状です。その人たちも、職員である前に被災者であり、かけがえのない家族や財産を失ったにも関わらず、復興に向けた公務に現在も追われ、泣く間もないまま業務をしています。震災直後は気を張って頑張ってきた職員や町民も時間が経過し、心身ともに色々なことに疲れており、体調面だけではなく、「心」のケアの重要性も今後、さらに課題になると思います。

最後になりますが、この大槌町への派遣を通じ、業務以外にも、当たり前の日常が過ごせることの幸せや、人とのつながりを大切さも日々実感し、もう少し、何事に対しても寛容になろうと思うようにもなりました。

誰しも自分の心に痛い、辛い思いをした人ほど、人に優しくなれるものなのでしょうか。

決して卑屈にならず、少しずつではありますが、頑張ろうとしている大槌町の町民のかたの気概は私にも十分伝わり、逆に励まされて勇気づけられたあのころの気持ちを思い出すと、今がどれだけ辛くても、不思議と頑張ることができる自分がいます。

６．草の根支援

Contents

2011/03/12　義援金の受付が始まりました
2011/03/14　支援の輪が広がっています
2011/03/16　「救援物資」を積み込んだトラックが、被災地の釜石市へ出発しました
2011/03/17　被災地へ向けて、心温まるメッセージが寄せられました
2011/03/17　「救援物資」が無事、釜石市に到着しました
2011/03/18　3 月 19 日からの 3 日間、箕面マーケットパークヴィソラで街頭募金やります。廣田遥さんも応援
2011/03/18　日章アステック株式会社から義援金 600 万円を受け付けました
2011/03/19　この 3 日間、救援物資の受付もやっています
2011/03/22　第一中学校の生徒会が義援金の街頭募金活動を行っています
2011/03/22　週末 3 日間に、さまざまな被災地支援活動が行われました
2011/03/23　被災地のかたに、温かいお風呂へ入ってほしい～４トンの冷凍車を改造して被災地へ～
2011/03/28　箕面発！冷凍車を改造した移動風呂が被災地で人気
2011/04/04　サントリーサンバーズが東日本大震災の義援金を呼びかけ！
2011/04/21　チャリティーブレスで箕面から被災地の子どもたちに元気を送ろう
2011/04/26　吹奏楽を通じて届けるエール
2011/05/18　色と癒しのチャリティーイベントによる義援金を受け付けました
2011/05/24　「手をつなごうコンサート」実行委員会から義援金を受け付けました
2011/05/28　関西から東北にエールを！空楽フェスタ 2011
2011/06/22　箕面市立豊川北小学校の 4 年生 66 名が、被災地の小学生を励ますためにモザイク画を作成しました！
2011/06/30　箕面地ビールでおなじみ A.J.I.BEER さんから義援金をいただきました
2011/07/07　東日本大震災の支援体験を子どもたちに伝える授業

2011/07/21　おたふく手袋株式会社から、作業用手袋をいただきました
2011/08/22　大阪大学夏まつり実行委員会から義援金をいただきました
2011/09/14　（番外編）救援物資を和歌山県新宮市へ届けました
2011/10/05　箕面市を出発した支援物資が無事に到着しました！
2011/10/06　「KARAOKE　CAFE　しぶおんぷ友の会」から義援金をお預かりしました！
2011/10/21　聖母被昇天学院中学校高等学校の皆さんから義援金をお預かりしました
2012/03/01　『忘れないで』岩手県大槌町・釜石市を訪問した第一中生徒会が、市長に結果報告
2012/03/09　箕面マーケットパーク visola で東日本大震災復興支援募金活動やチャリティーコンサートが行われます
2012/03/13　東日本大震災復興支援募金活動やチャリティーコンサートが行われました
2012/07/11　復興再開した被災地の小学校に、箕面市立豊川北小学校の 4 年生が箕面大滝のモザイク画を贈ります
2013/01/21　箕面市立第一中学校の生徒が募金活動中！～岩手県の大槌中学校に直接届けます～

撮れたて箕面ブログ掲載記事
2011/03/12　義援金の受付が始まりました

箕面市役所で、東北地方太平洋沖地震に対する義援金の受付が始まりました。

受付窓口は、箕面市役所の 1 階ロビーに設置されています。3 月 12 日（土曜日）午後 1 時に設置されて以降、箕面市ホームページなどを見たかたが次々と訪れています。

3 月 13 日（日曜日）は、かやの広場（箕面マーケットパークヴィソラ）にも設置しています（領収書の発行はできません）。

また、箕面市職員の幹部会からも 20 万円の寄付が実施されます。

3 月 14 日（月曜日）からは、箕面市社会福祉協議会ボランティアセンターの窓口において、救援物資の受付窓口も設置されます。

撮れたて箕面ブログ掲載記事
2011/03/14　支援の輪が広がっています

みなさんの、東北地方太平洋沖地震に対する善意の輪が広がっています。

昨日は、箕面マーケットパークヴィソラでも、義援金の街頭募金を行ったところ、通りがかった多くの人が募金してくれました。

昨日は日曜日で家族連れのかたが多かったので、多くの子どもたちも募金してくれました。

結果、3 月 12 日（土曜日）、13 日（日曜日）の 2 日間で箕面市役所 1 階ロビーで行った分などと合わせて、なんと 300 万円近くの募金額が集まりました。

また、今日からは、箕面市社会福祉協議会ボランティアセンターで、救援物資の受付も始まりました。

毛布やタオル、インスタント食品など多くの救援物資が寄せられています。

撮れたて箕面ブログ掲載記事
2011/03/16　「救援物資」を積み込んだトラックが、被災地の釜石市へ出発しました

３月 16 日（水曜日）、箕面市社会福祉協議会ボランティアセンターに寄せられた「救援物資」は、今井京阪神運輸株式会社のご協力によるトラックに積み込まれ、東北地方太平洋沖地震の被災地である岩手県釜石市へ出発しました。

箕面市社会福祉協議会ボランティアセンターでは、いち早く３月 14 日（月曜日）から、東北地方太平洋沖地震に対する救援物資の受付を実施しており、物資を被災地へ届ける手段に苦慮していたところ、今井京阪神運輸株式会社の今本建二さんが、岩手県釜石市への運搬協力を申し出られました。

今本さんは、阪神・淡路大震災で被災され、西宮市のご自宅が全壊した経験もあり、昨日３月 15 日（火曜日）から会社の前で、ご自身が所属しているＮＰＯの活動として救援物資受付をされていました。箕面市が物資搬送に苦慮していることを聞きつけ、ともに運搬できればと今回のご協力となりました。

３月 16 日（水曜日）午後２時に 10ｔトラックが到着。箕面市社会福祉協議会の職員ら約 30 人がリレー方式などで１時間弱、ボランティアセンターに寄せら

れたタオル、毛布、インスタント食品などの救援物資の積み込みを行いました。

10ｔトラックは、その後会社へ戻り、今本さんらが受付された救援物資を積み込んだ後、箕面市の災害用備蓄品（毛布、アルファ化米、水）を積み込んだ4ｔトラックとともに、午後4時30分、釜石市教育センターへ向けて出発しました。

撮れたて箕面ブログ掲載記事
2011/03/17　被災地へ向けて、心温まるメッセージが寄せられました

箕面市役所 1 階ロビーに設置している義援金の募金箱に、3 月 15 日（火曜日）、箕面市在住の小学 2 年生（女子児童）から、被災者へ向けた手紙　『今回の地しんでこまっている人へ』　を添えて、義援金 1260 円が寄せられました。

（手紙の内容）

『今回の地しんでこまっている人へ』

「このお金は、お兄ちゃんにおたん生日プレゼントのお花をかうはずだったお金です。ところがお兄ちゃんとそうだんして、ぼきんすることにしました。おたんじょうびプレゼントをわたしたつもりにしました。わたしは、せんそうで、心をいためさせてしまった、中国やかん国までたすけにきてくれているのがとってもうれしくなると思います。わたしは、そんな中国やかん国はやさしいなあ、ておもいます。なのではやく元気になってください。」

この児童は、小学 5 年生の兄にどうしても誕生日プレゼントをあげたいと、1 年間、少しずつお金を貯金箱に貯めてきたとのことです。

ところが、今回の地震の被災者のことを知り、募金もしたいけれど、兄にプレゼントも渡したいとの葛藤があり、泣きじゃくっていたそうです。

そこで、母親から「今の自分の気持ちを紙に書いてごらん」と伝えたところ、この手紙を書いたそうです。

中国と韓国の話については、兄に戦争の話をしているときに隣で聞いていたり、テレビのニュース番組などを見て何かを感じ取っていたのかもしれないとのことです。

なお、兄の誕生日は 3 月 12 日（土曜日）だったそうです。

児童が寄附したこの義援金 1260 円は、児童が洗濯物をたたんだら 20 円など、いっしょうけんめいに家のお手伝いを

して母親からもらった分で、兄のために1年間こつこつ貯めていたものだそうです。

撮れたて箕面ブログ掲載記事
2011/03/17　「救援物資」が無事、釜石市に到着しました

3月17日（木曜日）午前10時35分、「救援物資」を積み込んだトラックが無事、釜石市教育センターに到着しました。

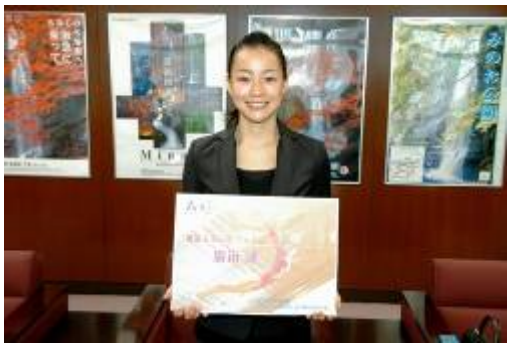
▲昨日、箕面市社会福祉協議会ボランティアセンターから出発したときのようす

撮れたて箕面ブログ掲載記事
2011/03/18　3月19日からの3日間、箕面マーケットパークヴィソラで街頭募金やります。廣田遥さんも応援

箕面市では、3月19日（土曜日）からの3日間も、大型商業施設「箕面マーケットパーク ヴィソラ」でも、午前9時から午後6時まで、義援金受付活動を行います。

▲3月13日（日曜日）の街頭募金のようす

3月20日（日曜日）午前11時頃には、昨年12月の全日本トランポリン競技選手権大会で、前人未到の10連覇の偉業を成し遂げた、「箕面トランポリン大使」の廣田遥さんも「箕面マーケットパークヴィソラ」で、街頭募金活動に参加する予定です。



▲、「箕面トランポリン大使」の廣田遥さん

また、本日3月18日（金曜日）に行われた採用前懇談会に出席した、4月から市職員として新規採用される予定者も、箕面市の被災者支援活動の説明を受けて、その趣旨に賛同した13人が、街頭募金活動や救援物資の積み込み活動を行います。

撮れたて箕面ブログ掲載記事
2011/03/18　日章アステック株式会社から義援金 600 万円を受け付けました

箕面市では、東北地方太平洋沖地震に対する義援金として、日章アステック株式会社から 600 万円を受け付けました。

箕面市では、3 月 12 日（土曜日）から東北地方太平洋沖地震に対する義援金の受付窓口を設置しており、3 月 18 日現在、市内公共施設 25 カ所に受付窓口を設けています。

日章アステック株式会社さんからは、昨日 3 月 17 日の午後、箕面市役所 1 階ロビー窓口で 600 万円の小切手をいただきました。本日 3 月 18 日正午ごろ、倉田哲郎市長は、箕面市船場東にある日章アステック株式会社本社を訪れ、杉田章会長、杉田章一代表取締役社長に謝意を伝えました。

杉田章一代表取締役社長は、「テレビで被災されたかたのようすを見ていて、何かしたいけど何をすればいいのかという歯がゆい気持ちが、私も社員たちにもありました。会社として、普段働いてくれている正社員 60 人、1 人あたり 10 万円ずつで寄付したとして計算し、計 600 万円をお渡しした次第です。社員一同の気持ちです」と話しました。

撮れたて箕面ブログ掲載記事
2011/03/19　この 3 日間、救援物資の受付もやっています

3 月 19 日（土曜日）、20 日（日曜日）、21 日（祝日）の 3 日間、箕面市社会福祉協議会ボランティアセンターでは救援物資の受付をやっています。

受付時間は午前 9 時～午後 5 時までです。

また、この 3 日間の間で救援物資の受付・仕分け作業などをしていただけるボランティアも募集しています。

撮れたて箕面ブログ掲載記事
2011/03/22　第一中学校の生徒会が義援金の街頭募金活動を行っています

箕面市立第一中学校の生徒会では、東北地方太平洋沖地震で被災されたかたへの義援金の街頭募金活動を行っています。

第一中学校の生徒会では、普段からユニセフ募金活動などを行っており、今回の東北地方太平洋沖地震では、その被害の大きさから、「生徒会として何かできることはないか」と考え、街頭での義援金の募金活動を行うことにしました。

この募金活動は、3 月 16 日（水曜日）から 3 月 23 日（水曜日）までの平日、5 日間行われています。

義援金募金活動の場所と時間は以下のとおりです。

○阪急箕面駅西口：午前 7 時 30 分から午前 8 時 15 分

○スーパーマーケットみのおいかり前：午後 4 時 00 分から午後 5 時 00 分

○第一中学校北門と西門前：午前 7 時 50 分から午前 8 時 20 分

この日は、午後 4 時から「いかりスーパーマーケットみのおいかり」前で義援金募金活動を行いました。

募金活動を行った 2 年生の平田航（ひらたわたる）さんは、「今回の地震で、多くのかたが困っておられます。少しでも、被災にあわれたかたのために、お役に立てればと思って、街頭募金活動を行っています。ご協力をお願いします」と話していました。

3 月 16 日（水曜日）から始めた義援金募金活動では、集計できている 3 月 22 日（火曜日）正午現在で、36 万 6 千 114 円が集まっています。

撮れたて箕面ブログ掲載記事
2011/03/22　週末 3 日間に、さまざまな被災地支援活動が行われました

3 月 19 日（土曜日）、20 日（日曜日）、21 日（祝日）の 3 日間、箕面市内では東北地方太平洋沖地震で被災されたかたへ、さまざまな支援活動が行われました。本当にいろいろなかたにご協力をいただきました。ありがとうございました。

【義援金受付活動】

「箕面マーケットパークヴィソラ」で 3 日間、午前 9 時から午後 6 時まで、箕面市赤十字奉仕団など市民ボランティアのみなさんと 4 月から市職員として新規採用予定者などで義援金受付活動を行いました。

3 月 20 日（日曜日）には、「箕面トランポリン大使」の廣田遥さんが街頭募金活動に参加いただき、東北地方太平洋沖地震で被災されたかたへの義援金の募金を呼びかけました。

【救援物資活動】

箕面市社会福祉協議会ボランティアセンターでも、3 連休の間、救援物資の受付窓口を開けることにし、物資の受付・仕分け作業などに多くのボランティアが参加いただきました。

3 月 19 日（土曜日）には、多くのかたから提供いただきましたタオル・毛布などの救援物資を被災地に送るために、万博記念公園まで搬送するための積み込み活動を行いました。

撮れたて箕面ブログ掲載記事
2011/03/23　被災地のかたに、温かいお風呂へ入ってほしい～４トンの冷凍車を改造して被災地へ～

3 月 22 日（火曜日）、今井京阪神運輸株式会社のお風呂付きトラックが、被災されたかたに、温かいお風呂に入ってもらおうと被災地へ向けて出発しました。

今井京阪神運輸株式会社では、21 日（祝日）、社員 12 人が半日掛かりで 4 トンの冷凍車を改造し、3 つの「浴槽」と 2 つの洗い場を備えたトラックを作りました。

現地へは、ドラム缶を 10 缶積んだ 4 トン車とともに赴き、現地近くの清流で水をドラム缶に入れ、現地で調達した材木を燃やしてお湯にし、ポンプによりお風呂車にお湯を流すことで、お風呂を利用していただけるそうです。

今回は、今本代表取締役ら 5 人がまずは被災地の岩手県九戸郡野田村へ向かい、約 1 週間の滞在を予定しています。

今本さんは、「被災地のようすをテレビで見ていて、お風呂が不足しているのを知りました。元々が冷凍車なので、お湯が冷めにくいと思います。早く被災されたかたに、温かいお風呂につかっていただき、少しでも避難所生活の疲れを癒してほしいです」と話しました。

今本さんは、阪神・淡路大震災で被災され、西宮市のご自宅が全壊した経験もあり、今回の地震では、会社の前で、ご自身が所属しているＮＰＯの活動として救援物資受付をされていました。また、箕面市が物資搬送に苦慮していることを聞きつけ、会社として、岩手県釜石市へ救援物資を運搬されました。

撮れたて箕面ブログ掲載記事
2011/03/28　箕面発！冷凍車を改造した移動風呂が被災地で人気

3 月 23 日の撮れたて箕面ブログでお伝えした、今井京阪神運輸株式会社の「お風呂付きトラック」が被災地で人気と報じられています。

箕面を 3 月 23 日（水曜日）に出発した「お風呂付きトラック」は、翌日に被災地の岩手県九戸郡野田村へ到着。以後、現地に滞在し、被災されたかたに喜ばれているそうです。

撮れたて箕面ブログ掲載記事
2011/04/04　サントリーサンバーズが東日本大震災の義援金を呼びかけ！

4 月 3 日（日曜日）、サントリーサンバーズの選手・スタッフ 20 名が、箕面マーケットパークヴィソラで、東日本大

震災の被災者支援のための義援金募金活動を行いました。サントリーサンバーズのみなさんが大声で支援を呼びかけると、たくさんの道行く人々が募金に協力していました。

サントリーサンバーズは、箕面市をホームタウンとするバレーボールチームで、Vプレミアリーグでは常に優勝争いをしている強豪チームです。また、従来からさまざまな社会貢献活動に積極的に取り組まれており、箕面市でも子どもの見守り活動などでずっとご協力いただいています。

この日集まった義援金は、4月6日（水曜日）に箕面市役所へお届けいただき、全額、日本赤十字社を通じて被災地の復興支援に役立てられます。

また、4月2日・3日の両日、かやの中央一帯で『visola さくらチャリティーイベント』が開催され、多種多様なブースとステージイベントにたくさんの市民が訪れました。こちらも、ブースでの売り上げなどは、被災地の復興支援に役立てられるとのことです。

撮れたて箕面ブログ掲載記事
2011/04/21　チャリティーブレスで箕面から被災地の子どもたちに元気を送ろう

4月23日（土曜日）・24日（日曜日）の午後1時から5時、チャリティーブレスをつけて被災地の子どもたちにメッセージを送る「がんばろう東北！箕面から被災地の子どもたちに元気を送ろう！」が、箕面マーケットパークヴィソラで開催されます。

この催しは、東北楽天ゴールデンイーグルスと箕面青年会議所の共同企画で実施され、2 個セット 500 円で

チャリティーブレスを購入いただき、1個は購入者自身が身につけて被災地を応援し、もう１個は作成いただくメッセージカードを添えて、箕面青年会議所のみなさんが、6月４日（土曜日）・5日（日曜日）に楽天イーグルスの公式戦後の被災地の子どもたちと選手とのふれあいイベント会場に届けます。なお、収益金は全額、被災地の子どもたちの支援にあてられます。

また、会場では、被災地の子どもたちに届ける千羽鶴を折っていただいたり、「たきのみちゆずる」との記念撮影会、楽天グッズが当たる抽選会なども開催されます。

箕面青年会議所理事長の坂東諭さんは「被災地域の子どもたちを直接支援できる方法がないかと楽天球団とご相談させていただいた結果、子どもたちの心のケアを目的とした事業を行いたいと互いの思いが合致し、東北楽天ゴールデンイーグルスとの共同企画にて開催させていただくこととなりました。

４月２３日・２４日で集まりました寄付金・メッセージ・千羽鶴は全て私たち箕面青年会議所メンバーが責任を持って直接仙台に赴き、被災地の子どもたちのためにお届けさせていただきます」と話しています。

【がんばろう東北！箕面から被災地の子どもたちに元気を送ろう！】

開催日時　4月 23 日（土曜日）・24 日（日曜日）午後１時～5時

開催会場　箕面マーケットパークヴィソラ

開催内容　チャリティーブレスの販売（収益は全て寄付）・被災地域の子どもたちへのメッセージカード作成、千羽鶴の作成、楽天グッズが当たる抽選会、たきのみちゆずるとの撮影会

〈現地（仙台市）でのイベント〉

開催日時　6月４日（土曜日）・5日（日曜日）〈予定〉

開催会場　クリネックス宮城（楽天本拠地スタジアム）

開催内容　被災地域の子どもたち（約150名）をご招待しての楽天対西武（ファーム公式戦）の試合観戦、試合終了後の楽天選手とのふれあいイベント、炊き出し・記念撮影・グッズプレゼント

※箕面青年会議所メンバーが参加

撮れたて箕面ブログ掲載記事
2011/04/26　吹奏楽を通じて届けるエール

４月 24 日（日曜日）、箕面市立市民会館（グリーンホール）大ホールにて、第15 回箕面市ブラスフェスティバルが開催されました。

このイベントは、箕面市立中学校吹奏楽部（止々呂美、彩都除く）、箕面高校吹奏楽部、箕面自由学園高校吹奏楽部、箕面市青少年吹奏楽団、招待団体（豊中

市立第十四中学校吹奏楽部）が一堂に会して行う合同演奏会です。

今回は「東日本大震災復興支援コンサート」として、被災地の１日も早い復興を祈り、吹奏楽を通じてエールを送ることを目的の１つとして開催されました。

会場に設置された義援金箱

開場前から、会場入口には長蛇の列が。

ホールはたくさんのお客さんで埋め尽くされ、ほぼ満席状態となりました。

出演者は、息のあった演奏はもちろんのこと、歌やパフォーマンスなど楽しい演出も加え、それぞれ個性豊かな演奏で観客を楽しませてくれました。

そして、最後には出演者全員による合同演奏が！

舞台上から客席の通路までを埋め尽くす出演者たち。横から、前から、後ろから、管楽器の音が会場中に響き、迫力満点です。

演奏した曲は「グリーンハーモニー」と「世界に一つだけの花」。被災地を勇気づけるために、いつもとは違う趣向で選んだ曲です。

約 400 人の出演者が一つとなって奏でる美しくあたたかいメロディに、会場からは大きな拍手が送られていました。

この日会場では、72,117 円の義援金が集まりました。

ご来場のみなさまのあたたかいご支援に感謝いたします。

（※この義援金は、日本赤十字社を通じて被災地の復興支援に役立てられます）

撮れたて箕面ブログ掲載記事
2011/05/18　色と癒しのチャリティーイベントによる義援金を受け付けました

東日本大震災に対する義援金として、北摂 COLORS と特定非営利活動法人市民活動フォーラムみのおから連名で 9 万 4886 円を受け付けました。

両団体は、被災地支援を目的に、5 月 8 日（日曜日）にみのお市民活動センターで「色と癒しのチャリティーイベント」を開催し、集まった参加費を義援金として寄附されました。

このイベントを企画したのは、それぞれの人に似合う色を分析・アドバイスするカラースタイリストの高田裕子さん。「被災地の人々を支援するために、自分の特技を活かそう」と思いついたそうです。「被災地支援をしたいけど、何をしたらよいのかわからない、という参加者の気持ちを受け止め、色と香りで参加者を癒しつつ、参加費が義援金になることで参加者の“支援したい”という気持ちを満たすことができたのでは。」と語っていました。

また、もう一人の企画者である上田雅代さんは、「震災が起きた翌日から、箕面市の職員が休日返上で募金活動をしている光景を見て感動し、箕面市で支援イベントをすることに決めました。」と話していました。

撮れたて箕面ブログ掲載記事
2011/05/24　「手をつなごうコンサート」実行委員会から義援金を受け付けました

5 月 23 日（月曜日）、東日本大震災に対する義援金として、「手をつなごうコンサート」実行委員会から 148,550 円の義援金を受け付けました。

「手をつなごうコンサート」は、ＲＭＯ（Recorder Magic Orchestra）代表の成元雅子さんが「被災地の支援のためにチャリティーコンサートをしよう」と音楽仲間に協力を呼びかけ、4 月 29 日（祝日・金曜日）にメイプルホール小ホールで開催されました。

日頃それぞれに活動している団体も、「被災地のためにできることをしたい」という思いは共通。成元さんの呼びかけに応えて、すぐに有志の団体が集まったそうです。福島県会津地方出身のかたの詩吟を含め、リコーダーやウクレレなど 9 つの団体が演奏を披露し、最後は会場全体で「ふるさと」の歌を合唱。

当日は、延べ約 130 人の参加者でホールがいっぱいになったそうです。会場に設置していた義援金箱にはたくさんの寄附が集まりました。「子どもたちもお小遣いの小銭を握りしめて寄附に来てくれた」と語るのは、共催団体の特定非営利活動法人市民活動フォーラムみのお事務局長の須貝昭子さん。主催者のネットワークを通じて、箕面に来ている留学生など外国人のかたも大勢参加されたそうです。

成元さんは、「被災地支援の気持ちを忘れずに、来年もぜひ開催したい。」と意気込みを伝え、市長も、「あさってから岩手県に行く。実際に現地を見た上で、本当に必要な支援は何なのかを考え、箕面からできる支援を呼びかけていきたい。」と応えました。

撮れたて箕面ブログ掲載記事
2011/05/28　関西から東北にエールを！空楽フェスタ 2011

5 月 28 日（土曜日）、大阪国際空港（伊丹空港）で「空楽フェスタ 2011」（主催：大阪国際空港ターミナル株式会社）が行われ、箕面市も空港周辺市としてゆずると一緒にイベントに参加しました。

大阪国際空港を身近に感じていただくために毎年開催している「空楽フェスタ」ですが、今回は東日本大震災の発生を受け、「がんばろう！日本」をテーマに、来場者のみなさんに楽しんでいただ

きながらも東北地方の早期復興を支援するためのイベントが行われました。

オープニングセレモニーに登場した伊丹市立東中学校の地域活性隊の生徒さん達は、

オープニング後にはイベント呼び込みのお手伝い。

あふれる若さでイベントの盛り上げに大貢献！

そんなイベントの一つが、さくらんぼの種を飛ばして距離を競う、さくらんぼ種とばし大会！使われるのは、伊丹空港からの直行便が就航している山形空港の所在地、山形県東根市産の大粒のさくらんぼ！

飛ばす種を用意するため、まずはさくらんぼを食べられると知って、ゆずるもやる気満々！

……でしたが、小学生以下の「子どもの部」・中学生以上の女性の「レディースの部」・中学生以上の男性の「一般の部」のどれに参加すべきか迷ってしまい、参加断念。

「一般の部」の一位の方は　なんと13 メートルを超す大記録を残されていました。

また、空港周辺市のゆるキャラも大集合！箕面市のたきのみちゆずるをはじめ、池田市のふくまるくん、伊丹市のたみまるくん、川西市のきんたくん、豊中市のワニ博士が一堂に会し、会場を盛り上げていました。

ほかにも、マジックやバルーンアートなどのコミカルパフォーマンスや、

東北各県の特産品を扱う東北地方物産・観光展などが行われ、

台風が近づく中での開催にもかかわらず、多くの人でにぎわっていました。

せっかく空港に来たんだから、顔出しパネルで記念撮影しようとしたゆずるでしたが…

残念、やっぱり顔が入りきりませんでした。

撮れたて箕面ブログ掲載記事
2011/06/22　箕面市立豊川北小学校の 4 年生 66 名が、被災地の小学生を励ますためにモザイク画を作成しました！

東日本大震災の被災地の小学生を励まそうと、6 月 22 日（水曜日）、箕面市立豊川北小学校の 4 年生 66 名が、福島県いわき市立永崎小学校の児童に向けて、動物などのモザイク画 66 点と「福島県いわき市立永崎小学校のみなさんあきらめないで！」のメッセージを一文字ずつ描いた26作品の合計92作品を完成させました。

この作品に取り組もうとしたきっかけは、始業式の日の児童朝会で、校長先生から「震災で困っている人たちに、自分たちに何かできることはないか考えましょう」という話を聞き、児童自らが図工の授業で「被災地で頑張って暮らしている自分たちと同じ小学生を励ますために、元気が出るような作品を作って被災地に届けたい」と発案し、モザイク画を作成することになりました。

作品を送り届ける福島県いわき市立永崎小学校は、箕面市社会福祉協議会を通じて、福島県教育委員会から紹介していただきました。

現在、永崎小学校は、今回の東日本大震災の津波と地震により、校舎が被害に遭ったため、同じいわき市内の市立江名小学校の校舎を一部間借りして授業を行っています。

メッセージを含むモザイク画は、週に 1、2 時限ある図工の授業で、4 月 13 日（水曜日）から 2 カ月以上（授業時間：計 15 時限）かけて作成したもので、作品は動物、花、昆虫、魚など、子どもたちに親しみやすく、見て元気になってもらえるものを児童自らが考え完成させました。

モザイク画の作品は、まずテーマを何にするかを考え、決めたテーマの輪郭をえんぴつと黒色のポスタカラーを使っ

て色画用紙に描いていきました。

その後、水をふくまないスポンジにいくつかの絵の具をつけて、白画用紙にたたいたり、パレットにいくつかの絵の具を出し、それをヘラで混ぜ合わせて白画用紙に塗ったりなどして、モザイク画のもとになるピースを作りました。

ピースは、親指の爪くらいの大きさにはさみで切り、最後にピースを色画用紙に貼って完成させました。

4 年 1 組の稲中孝多さんは、「福島県が早く元のまちに戻って、元気になってほしい。」と作品に込めた思いを話していました。

同じく 4 年 1 組の山内桃佳さんは、「完成した作品を見てもらって、みんなが笑顔になってほしいです。」と話していました。

完成した作品は、明日 23 日（木曜日）に箕面市立豊川北小学校から発送し、明後日の 24 日（金曜日）にいわき市立永崎小学校の子どもたちへ届けられる予定です。

撮れたて箕面ブログ掲載記事
2011/06/30　箕面地ビールでおなじみ A.J.I.BEER さんから義援金をいただきました

6 月 30 日（木曜日）、A.J.I.BEER INC の大下正司さんが箕面市長を訪れ、東日本大震災に対する義援金として、11 万 6600 円を手渡しました。

6 月 18 日（土曜日）・19 日（日曜日）に開催されたイベントの収益の一部を義援金として寄附されました。

いただいた義援金は、日本赤十字社を通じて、被災者の皆様のために使われます。

撮れたて箕面ブログ掲載記事
2011/07/07　東日本大震災の支援体験を子どもたちに伝える授業

7 月 6 日（水曜日）、箕面市立中小学校で小学校 1 年生を対象に「震災支援学

習」が行なわれました。

ゲストティーチャーの一般社団法人インタープリテーションネットワーク・ジャパン（IPNET-J）の皆さんが、道徳の授業において、東日本大震災の被災地支援体験について、スライドを使って伝えたり、被災された方からの手紙を朗読したり、被災地の子どもたちと遊んだ切り絵パズルを楽しんだり、全員で「ふるさと」を合唱したり、小学校１年生の子どもたちの関心を高める分かり易い語りかけで、大人でも十分に楽しめるライブ感あふれる授業を展開されていました。

おかげで、中小学校の１年生たちは、とても集中して聞き入っていました。

切り絵パズル

完成した切り絵パズルを囲んで手紙の朗読

切り絵パズルは被災地の子どもたちも楽しみました。

集中して聞き入る子どもたち

「感謝の気持ち、助け合いの心を大切に」

撮れたて箕面ブログ掲載記事
2011/07/21　おたふく手袋株式会社から、作業用手袋をいただきました

7 月 21 日（木曜日）おたふく手袋株式会社の井戸端会長から、「被災地の復興作業を支援したい」と作業用手袋をいただきました。

いただいた手袋は、掌部天然ゴム加工手袋 25,000 双で、すべり止めが付いた作業用手袋です。

東日本大震災の被災地では、今まさにがれきの撤去等土木作業が行われており、手袋は欠かせない存在です。

おたふく手袋株式会社のご好意に応えるため、いち早く被災地へ届けます。

撮れたて箕面ブログ掲載記事
2011/08/22　大阪大学夏まつり実行委員会から義援金をいただきました

8 月 19 日（金曜日）大阪大学夏まつり実行委員会の本間委員長と平井副委員長が、7 月 9 日（土曜日）実施された第 32 回大阪大学夏まつりで集めた義援金を持参されました。

この義援金は、夏まつり当日の募金箱に 20271 円　着付けコーナーで 10200 円　バザーで 17090 円　模擬店で 34000 円　写真部の皆さんが自分の作品を販売して 7200 円　合計 88761 円の義援金が集まりました。

本間委員長からは、「当日参加された皆さんの気持ちを一つにしました。日本赤十字社を通じて被災地の皆さんに届けてください」と倉田市長に伝えられました。

夏まつりのメンバーはこの義援金以外に、彩都の丘小中学校の子どもたちと一緒にメッセージボードをつくり、夏まつり当日やみのおまつりで展示をされました。

倉田市長からは「みなさんの気持ちを日赤を通じて被災地のかたがたに伝えていきます」と話しました。

【番外編】

撮れたて箕面ブログ掲載記事
2011/09/14　救援物資を和歌山県新宮市へ届けました

箕面市は、台風 12 号で甚大な被害を受けた和歌山県新宮市へ、9 月 14 日（水曜日）、救援物資（非常食 2100 食、肌着セット 200 セット）を届けました。
また、市職員 4 名で新宮市までの運搬を行うとともに、現地では被災状況等を確認し、今後の支援活動へつなげる予定です。

この日午前 10 時に、救援物資の非常食 2100 食（野菜シチュー2000 食、おかゆ 100 食）、肌着セット 200 セット（肌着、靴下、タオルのセット。男女 100 セットずつ。）を、箕面市所有の 2 トンダンプに積み込み、和歌山県新宮市の新宮市職業訓練センターをめざし出発しました。

物資搬送は、市民安全政策課職員 2 名、道路維持・土木施設担当職員 2 名の計 4 名で行い、救援物資の引渡し後、現地で被災状況などを見極め、今後、必要な支援について新宮市職員から情報収集を図るなどの活動をしました。

新宮市では、いまなお（9 月 13 日現在）避難所 10 カ所に約 90 人のかたが避難され、完全に孤立している世帯もあるとのこと。救援物資は避難所や孤立世帯へ届けられます。

箕面市市民安全政策課職員は、「箕面市もこれまで幾度か水害、土砂災害に見舞われており、今後も市として可能な限りの支援をしたいと考えています。一日も早い復旧・復興を願っています」と話しています。

撮れたて箕面ブログ掲載記事
2011/10/05　箕面市を出発した支援物

資が無事に到着しました！

こんにちは。岩手県大槌町に災害派遣中の西田です。

7 月 28 日から 10 月 31 日までの約 3 カ月間、大槌町教育委員会事務局の職員として、被災した学校施設に代わる仮設校舎の建設業務などを担当しています。

さて、今日は 10 月 3 日（月曜日）に箕面市を出発した支援物資が無事に到着しましたので、その様子を皆さんにお伝えしたいと思います。

＜釜石・大槌地区消防本部にて＞

箕面市消防本部では、震災直後に釜石市と大槌町へ派遣していた消防職員 16 名から現地の悲惨な状況の報告を受け、箕面市防火協会会長と消防職員有志から集まった義援金で購入した防火服などの他、賛同いただいた消防装備品製造・販売企業など 9 社から無償で提供を受けた消防装備品を釜石市へ向けて発送しました。

10 月 4 日（火曜日）の午後、消防装備品を乗せたトラックが無事に釜石市へ到着しましたので、釜石市の教育センター内に仮移転している釜石・大槌地区消防本部を訪ね、受け渡しをしてきました！

（釜石・大槌地区消防本部です。庁舎は津波により被災し使用できないため、仮移転しています。）

（お忙しいにも関わらず、早速試着してくださいました！）

箕面市消防本部の三上消防長から預かったメッセージを代読し、支援物品の目録などと併せて、釜石・大槌の千葉消防長へお渡ししました。

「厚意を無駄にしないよう、最大限活用させていただきます。」と感謝されていました。

＜大槌町立小中学校仮設校舎にて＞

引き続き、箕面市から同じトラックで到着した、小中学校用の教卓と書類保管用ロッカーを、9 月 15 日に完成した大

槌町立小中学校仮設校舎へ届けてきました。

これは箕面市内の小学校から支援できるものがないか？箕面市教育委員会事務局で調査し、今回同時に発送したものです。

（壊れていないか？点検中です。）

（子どもたちは元気いっぱいに走っていました！）

「あれ？教卓は？」と思っているうちに教卓は教室へ運ばれていきました。早速授業に活用されるようです。書類保管用ロッカーは職員室や会議室で活用されるとのことです。

支援物資の発送に携わっていただいた皆さん、無事に届けていただきありがとうございました。また、運搬をお願いしました「株式会社レボ・アクティマ」さん、おつかれさまでした。

＜支援物資の状況など＞

私が勤務している教育委員会事務局にも、全国各地の企業や個人の方から毎日多くの支援物資の申し出をいただいています。ノートや鉛筆などの学用品、ランドセル、児童生徒用の机、ピアノ、暖房器具などなど数え上げればキリがありません。

本当にありがたいことなのですが、残念なことに「支援をしたい！」と思われる気持ちと、支援を受ける側のニーズが合っていないというのが現状です。

上に記載した品々も、これまでのご支援のおかげで十分に足りており、「本当にありがたいのですが、お気持ちだけいただきます」と言って断ることがほとんどです。非常に残念な思いでいっぱいになります。

しかしながら、まだまだ不足している物もあり、今後も多くの支援が必要な状況が続いています。

この様なすれ違いを少しでも減らすために、支援をご検討いただく際には、遠慮せずに、ぜひとも支援先へご一報いただければと思います。

私たち大槌町教育委員会事務局の職員も、「どの学校に何が必要なのか？」日々ニーズの把握に努めております！

ところで、話は変わりますが 9 月 30

日（金曜日）は釜石・大槌付近は「大潮」でした。

内陸部に位置する箕面市では聞きなれない言葉かもしれませんが、「一日の潮の干満の差が大きい状態のこと。」を言うそうです。

被災地では今回の震災によって地盤沈下があったため、満潮時刻が近づくと、少しずつ道路や岸壁が海に飲み込まれていきます。

（大槌町内の海岸線を走る道路の様子）

この道路は、大槌町の中心部へ通じる重要な生活道路です。写真奥が海、中央が道路、私の後ろには住宅地があります。

写真ではわかりにくいかもしれませんが、すでに海と陸地の高さが同じになっており、道路の一部が海に沈みつつあります。写真を撮影したのが夕方 5 時頃で、この日の満潮時刻は夕方 6 時頃でしたから、この後、道路が完全に冠水したかもしれません。（危険ですので、私はすぐにその場を離れました。）

大槌町に限らず、まだまだ被災した各地ではこの様な危険で不便な状況が続いています。一日も早く復興の日を迎え、この様な状態が少しでも早く解消されていくよう、残りの派遣期間も精いっぱい自分の役割を果たしていこうと思います！

撮れたて箕面ブログ掲載記事
2011/10/06 「KARAOKE CAFE しぶおんぷ友の会」から義援金をお預かりしました！

平成 23 年 10 月 5 日（水曜日）に「KARAOKE CAFE しぶおんぷ友の会」の中西幸治顧問他役員等 3 名の方が、倉田市長に面会され、東日本大震災への義援金を手渡されました。

同友の会は、先日 10 月 1 日（日曜日）に市立メイプルホール・大ホールで震災復興支援のために『東日本大震災復興チャリティ歌謡祭』を開催され、その収益金すべてを義援金として持参されたものです。

日頃は、カラオケで歌うことを通じて会員相互の交流を深められていますが、『歌の“力”と“心”』で復興を！の合い言葉で、震災直後の今年 4 月から半年をかけて会員の皆さんが汗をかきながらの準備の末に開催されたものです。

歌謡祭は、午前 10 時から始まり、皆さんの歌も、東北応援のためか、東日本の歌をたくさん歌われ、最年少は 19 才

から最高齢 97 才までと幅広く、総勢 90 人の参加がありました。途中お昼には「たきのみち　ゆずる」も登場して義援を募ってくれました。

会場は、熱唱につづく熱唱で、外の肌寒さとは反対にどんどん暑くなっていました。

夕方には、倉田市長もチャリティ応援のためにかけつけ、震災復興の支援を呼びかけました。

歌謡祭参加の皆さん、また開催スタッフの皆さん、義援金をありがとうございました。

撮れたて箕面ブログ掲載記事
2011/10/21　聖母被昇天学院中学校高等学校の皆さんから義援金をお預かりしました

10 月 20 日（木曜日）に聖母被昇天学院中学校高等学校の生徒の皆さんが倉田市長に面会され、東日本大震災への義援金を手渡しました。

この日は、学校を代表して、生徒の大下さん、奥田さん、國司さん、教頭の三宅さん、E.S.S 部顧問のトムソンさんら 5 名が市役所を訪れ、義援金募金活動や学校生活の様子を伝えました。

今回の募金活動は、「学祭爆走！Funky Monkey Ladies～東日本に笑顔を～」と元気なテーマを掲げて 9 月 17 日（土曜日）に開催された学院祭で行なわれました。滝ノ道ゆずるも参加しましたヨ。

各教室に募金箱を設置するとともに、生徒の皆さんが懸命に働いたポップコーンやたこ焼きなどの模擬店の売り上げを合わせて、義援金の額は 23 万 4291 円にも上りました。

これまでにも、学校では小中高の児

童・生徒が共同で学用品や手作りうちわを被災地に届ける活動もされています。

撮れたて箕面ブログ掲載記事
2012/03/01　『忘れないで』 岩手県大槌町・釜石市を訪問した第一中生徒会が、市長に結果報告

3 月 1 日(木曜日)午後 3 時、岩手県大槌町と釜石市に義援金(計 35 万 9274 円)とプランター計 8 つ、メッセージカード 500 枚、絵本 100 冊を届けた箕面市立第一中学校生徒会役員 6 名(2 年生 4 名、1 年生 2 名)が箕面市役所を訪れ、倉田哲郎箕面市長に結果報告をしました。

第一中学校生徒会の 2 年生 4 名は 2 月 17 日(金曜日)から 19 日(日曜日)、箕面市立中学校生徒会を代表して大槌町と釜石市を訪問し、大槌中学校生徒会や仮設住宅に住んでいるかたとの交流、箕面市から現地へ派遣されている職員からの話の聞き取り、釜石市でのボランティア活動などを行いました。
(交流の様子)

↑おみやげのもみじの天ぷらが大好評

(仮設住宅にて)

(現地に派遣されている職員からの聞き取りの様子)

(現地の人から依頼された写真の洗浄作業ボランティアの様子)

そしてこれらの活動をまとめたビデオと報告書をもとに、1時間半かけて倉田市長へ結果報告をしました。

生徒達からの報告の中で、1年経った今もなかなか復興の目処が経っていないこと、箕面にいては分からない、実際の被害の様子を見て受けた衝撃などについて語られました。

さらに生徒らは、まだまだ継続的な支援が必要なこと、「東日本大震災」という災害を風化させないことの必要性を訴

えました。
生徒会長の今木沙恵さんは「事前に写真などを見て勉強をしていたのですが、想像をはるかに超える状態でした。1年経ったからある程度復興もしているだろうと考えていたのですが、それは全く違って、まだまだ復興の目処が経っていない状況でした」と話しました。
朝喜理沙さんは「現地の人と交流して、こちらが元気をもらうぐらい、みなさんが前向きで明るかったのが印象的でした。そして必ずおっしゃっていたのが**『忘れないで』**ということ。この経験を多くの人に伝えていきたいです」と話しました。

これに対し倉田市長は「偶然最初に市消防隊を派遣した先が大槌町と釜石市だったことからできた繋がりですが、この縁を今後も大切にして、どう継続的に支援していけるか、活動を広げられるかを考えていきたいですね」と話しました。

以下は今回第一中学校生徒会から提供を受けた、現地の写真です。
既に東日本大震災から 1 年が経とうとしており、関西にいては実感が薄れてきつつありますが、今回訪問した生徒会役員からの「風化させてはいけない」という思いを感じとっていただければと思います。

中学校と小学校 4 校の計 5 校の生徒が 1 つの仮設校舎で学んでいます。

熱でひしゃげたブレーカー

焼け焦げた教室

地盤沈下した道路

大槌中の生徒達のメッセージ

行く先々で残る爪痕

釜石市の「復興の鐘」

第一中学校生徒会は、この訪問結果を今後全校集会や大阪府内の生徒会が集まる「生徒会サミット」、寄付金などで支援を受

けた各種団体へ報告・啓発を行うことを予定しています。

この活動を次の代へと引き継いでいくこと、継続的な支援・交流方法を形にしていくことが課題だとのことです。

撮れたて箕面ブログ掲載記事
2012/03/09　箕面マーケットパーク visola で東日本大震災復興支援募金活動やチャリティーコンサートが行われます

3 月 11 日（日曜日）に箕面マーケットパーク visola で、東日本大震災復興支援の募金活動やチャリティーコンサートが行われます。

日時：平成 24 年 3 月 11 日(日曜日)　午前 11 時 30 分～午後 5 時

会場：箕面マーケットパーク visola
エルステージ付近、みのお市民活動センター

内容：復興支援金募金活動、復興支援のパネル展示、消防車・白バイ展示

中野サユリさん、LuckDuck、セーリング、聖母被昇天学院コーラスクラブ聖歌隊のみなさんによる復興支援チャリティーコンサートも開催します。

被災地に支援に行った箕面市職員も、被災地での経験を語ります。

ゆずる君募金型自動販売機も展示します。是非、お越しください。

撮れたて箕面ブログ掲載記事
2012/03/13　東日本大震災復興支援募金活動やチャリティーコンサートが行われました

3 月 11 日（日曜日）、箕面マーケットパーク visola で、東日本大震災復興支援の募金活動やチャリティーコンサートが行われました。

中野サユリさん、LuckDuck、セーリングのみなさんが熱唱。

心があたたまる歌声でした。

聖母被昇天学院コーラスクラブ聖歌隊による清らかで美しいコーラス。

ゆずる君、募金活動に参加。ゆずる君の募金型自動販売機も登場。この自動販売機で飲み物を買えば、売り上げの一部が被災地へ送られます。

イオン防災グッズコーナー。事前の準備は大切ですね。水や電池の備蓄、家具の固定は大丈夫かな。思ったときに行動しなくちゃ。

白バイや消防車にゆずるも大喜び。

被災地に派遣された市職員の現地での貴重な体験が聞けました。

被災地での市職員による支援活動や今すぐ家庭でできる事前の備えのパネル展示もありました。

撮れたて箕面ブログ掲載記事
2012/07/11　復興再開した被災地の小学校に、箕面市立豊川北小学校の 4 年生が箕面大滝のモザイク画を贈ります

東日本大震災で津波に襲われた小学校の復興再開を記念し贈呈するため、箕面市立豊川北小学校（中村　香校長、児童数 438 人、粟生間谷西 4-3-1）の 4 年生 81 名が、秋の箕面大滝を描いたモザイク画を完成しました。

豊川北小学校では、昨年 6 月、被災した小学生を励ますために、福島県いわき市立永崎小学校の児童に向け、動物などのモザイク画を作成し贈呈しました。当時、永崎小学校は、東日本大震災の地震と津波により校舎が被害に遭ったため、いわき市内の江名小学校の校舎を間借りして授業を行っていました。

モザイク画を受け取った子どもたちからは、「うれしかった」「元気がもらえた」など心のこもったお礼の手紙が届き、作成した 4 年生の子どもたちも感激していました。

その永崎小学校が、校舎の修復を終え元の場所に平成 24 年 3 月 19 日に再開したという話を、モザイク画指導の中田和成（なかたかずなり）先生が今年の 4 年生の子どもたちに伝えたところ、「支援を継続したい。再開の記念に今年もモザイク画を贈ろう」と子どもたちから声が上がり、今回のモザイク画を作成することになりました。図柄については、永崎小学校から「箕面の良いところを知りたい」とのリクエストがあり、4 年生全員で紅葉が美しい秋の箕面大滝のモザイク画を作成することになりました。

4 月 11 日から製作を始めたモザイク画は、図工の授業で 3 カ月（延べ 38 時間）をかけて完成したもので、縦約 2 メートル、横 2 メートルの大作となっています。

モザイク画の作品は、図案を全員で考えてから、まず画用紙を張り合わせ完成品サイズの紙に下絵を絵具で描きました。その後、下絵を一旦ばらばらにし、一人ひとりが各パートの紙に、画用紙を絵具で彩色し 5 センチ角ほどに切ったピースを張り付けて制作。それを今回合体し、一枚の作品に仕上げました。出来上がった作品を前に、子どもたちは完成した喜びと自分の学校に戻れた永崎小学校の子どもたちへの思いで満面の笑みを浮かべていました。

4 年 1 組の平田歩輝（ひらたあゆき）さんは、「滝や岩などが立体的に見えるよう、ピースの色をちょっとずつ変えるのがむずかしかった」と今回の作品制作を振り返って話しました。

また、同じく 4 年 1 組の川崎ひなた（かわさきひなた）さんは、「被災地の人に元気になってもらいたい」と作品に込めた思いを話しました。

完成した作品は、乾燥させたのち、7 月 18 日（水曜日）にいわき市立永崎小学校に贈られる予定です。

撮れたて箕面ブログ掲載記事
2013/01/21　箕面市立第一中学校の生徒が募金活動中！～岩手県の大槌中学校に直接届けます～

東日本大震災で被災し、津波で被害を受けた岩手県大槌町立大槌中学校を支援するため、箕面市立第一中学校（石井

敬子校長、生徒数 622 人、箕面市新稲3-2-1）の生徒会が募金活動を行っています。

生徒会の役員生徒は集めた募金を直接大槌中学校に届け、大槌中学校生徒会との交流や町内の見学を行う予定です。

第一中学校生徒会は、震災直後の2011年3月16日から募金活動を行いました。

その募金は日本赤十字に託しましたが、生徒たちは「直接被災地を支援したい」と2012年は箕面市が職員を派遣している大槌町の中学生を支援することに決め、PTA や地域のみなさんに旅費などの支援を受け、集めた募金などを生徒会役員の生徒が直接大槌中学に届けました。

その時の訪問では、大槌中学校生徒会との交流のほか、仮設住宅の訪問や写真洗浄のボランティア活動を行いました。

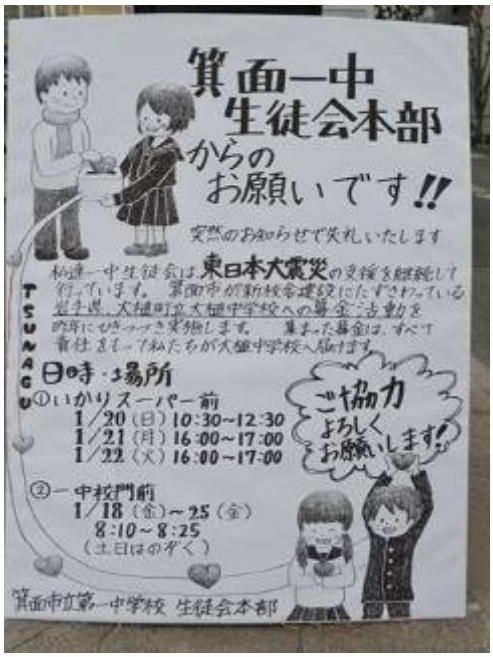
<昨年、大槌町を訪れたときの様子＞

そのときに大槌町を訪れた生徒会役員の生徒らは、「震災のことを忘れてはいけない。自分たちが知ったことを箕面のみんなに伝えたい」との思いで、学校や PTA などで 9 回も大槌町訪問の報告活動を行ってきました。

＜倉田市長に報告した時の様子＞

継続した支援を行うと決めていた生徒会では、今年度 5 月に募金を校内で実

施し、今回の街頭募金活動では役員 6 名が、地域に 2000 枚のチラシ・ポスターを配り、学校の校門前や市内スーパー前で募金の協力を呼びかけています。



生徒会では、今回と前回の募金と地域のかたから預かった義援金をあわせて、今年も大槌中学校に直接届ける予定にしています。

今回は、生徒 6 名、引率教員 2 名、地域の大人 1 名の計 9 名が 2 月 1 日（金曜日）から 3 日（日曜日）に大槌町を訪れ、募金を届けるほか大槌中学校の生徒会との交流や町内施設の見学、被災したかたからの聞き取りを行う予定にしています。

生徒会会長の中塚一誠（なかつかいっせい・2 年生）さんは、「復興状況など現地で見て聞いて学んだことをみんなに伝えることで、震災を風化させないようにしたい」と話していました。

●募金活動

第一中学校校門前

1 月 18 日（金曜日）から 25 日（金曜日）午前 8 時 10 分から午前 8 時 25 分

スーパー前

1 月 20 日（日曜日）　午前 10 時 30 分から午後 0 時 30 分

1 月 21 日（月曜日）から 22 日（火曜日）午後 4 時から午後 5 時

おわりに

Contents

現地派遣中の職員３名からの最新レポート
市長手記　（初動　～市役所の裏側で）
“おわりに”に替えて　～東日本大震災を教訓にした箕面市の防災改革

【現在派遣中の職員３名からの最新レポート】

現地からの職員レポート（2013/03/08 撮れたて箕面ブログ掲載）
みどりまちづくり部　　西田　昭浩 （大槌町震災復興事業に係る事業計画策定、用地買収等） みどりまちづくり部　　西山　央 （小中一貫校施設整備、仮設校舎の施設整備営繕） 市立病院事務局　　橋本　実華 （下水道の工事関係予算執行管理、支払い業務、補助金申請の業務補助等）

こんにちは。岩手県大槌町に災害派遣中の橋本・西田・西山です。

現在、箕面市から大槌町へは３名の職員が長期派遣されており、西田は昨年の春から、西山は夏から、橋本は秋から、それぞれ約１年間、大槌町の職員として、被災した町の復興業務を担当しています。今日は大槌町の復興状況について、皆さんにお知らせしたいと思います。

〈大槌町の状況〉

大槌町は岩手県の沿岸南部に位置しており、平成年３月１１日の東日本大震災で被災した市町村の一つです。東西に広い町で町域は約 200 平方キロメートルと、箕面市の約４倍で、震災前の人口はおよそ 15,000 人でした。震災でお亡くなりになられたかたや、行方不明のかたの人数は、人口のほぼ１割にもおよび、震災から２年を経過しようとする現在も 400 名以上のかたが行方不明のままです。心からお悔やみ申し上げますと共に、一日も早い復旧・復興をお祈り申し上げます。

さて、大槌町の中心市街地は海岸線沿いに集中しており、高さ６ｍほどの防波堤に守られていましたが、これを超える津波と直後に発生した大規模な火災により、ほぼ全てを失いました。箕面市に置き換えて考えると、

高台から見下ろした大槌町の市街地、平成２３年８月撮影

止々呂美や粟生、如意谷、新稲などの高台の住宅地を除き、全て被災したようなイメージです。赴任直後に大槌の景色を目の当たりにした時は、津波の威力の凄まじさに、只々愕然とするのみでした。

震災からおよそ２年が過ぎ、大量にあった震災による廃棄物は集積、分別され、ほんとうに少しずつではありますが処理が進んでいます。また、仮庁舎（役場）のある町の中心部では、被災した建物の解体が進んでいく中、仮設建物で営業を再開する店舗も増え、必要最低限の生活必需品は揃うようになりました。しかし、未だ2,000 世帯、4,600 人ものかたが仮設住宅で生活していたり、大きな余震が起こるたびに避難しなければならなかったり、決して復興したとは言えない状況が続いています。

震災からおよそ２年を経過した大槌町の市街地
平成 25 年２月撮影

震災前の大槌町の市街地
平成２１年１１月撮影

＜市街地再生に向けて＞

この壊滅的な被害を受けた被災地を一日も早く復興し、被災者の皆様の生活再建を行うため、中心市街地２９．７ｈａを対象に、今回発生したクラスの津波が来ても、浸水しないように盛土した地盤を作り、従前以上に住環境を向上した住宅地を再興させる「都市再生区画整理事業」や、盛土や防潮堤整備後も、浸水する可能性がある区域の住民を、高台に造成する団地等に移転していただく「防災集団移転促進事業」や「災害公営住宅整備」等の大規模な復興まちづくり事業が急ピッチで進められています。

これらの事業を進めるためには、住民や地権者の理解や協力が必要不可欠ですが、事業の対象となる住民や地権者数が多いことや、土地所有者が全国各地に離散されている事等から、合意形成を得るのに困難な状況にあります。

しかし、我々のような応援職員が全国から集まり、地元の職員と力を合わせて、昼夜を問わず、用地交渉や計画策定、住民説明に奔走しています。

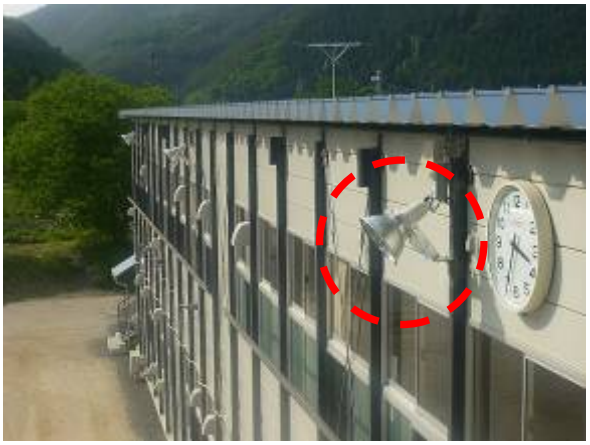
〈大槌町の学校〉

大槌町には、町立の小学校が５校、中学校が２校ありますが、津波と火災の被害により、このうち小学校４校、中学校１校の施設が使用できなくなりました。現在は震災後に建設した仮設校舎で、被災した５校の児童、生徒が合同で授業を受けていますが、校舎を建設できるスペースが限られているので、十分な教室数が確保されていなかったり、体育やクラブ活動をするための運動スペースが狭かったり、子どもたちにとっては満足な環境で学ぶことができないのが現状です。

５校合同で手狭な仮設校舎

被害の無かった吉里吉里中学校も、運動場には仮設住宅が建ち並んでいます。

このような学習環境を改善するため、多くのかたから本当にたくさんのご支援をいただきました。



防犯灯を兼ねた運動場の照明
（民間テレビ局からのご支援）

低学年用の遊具（民間企業からのご支援）

増築工事中の仮設校舎（民間企業からのご支援）

この他にも「日本赤十字」や「ユニセフ」、「セーブ・ザ・チルドレン」など多くのご厚意によって学校運営が支えられています。

さて、大槌町では、被災した学校施設を施設一体型の小中一貫教育校として再建する計画になっており、平成２８年度の開校を目指して準備を進めています。今、東日本大震災の被災地で大きな問題となっている土地の確保も、地域住民のかたのご協力もあって、ようやく目処が立ち、いよいよ測量、設計といった具体的な検討に入ろうとしているところです。

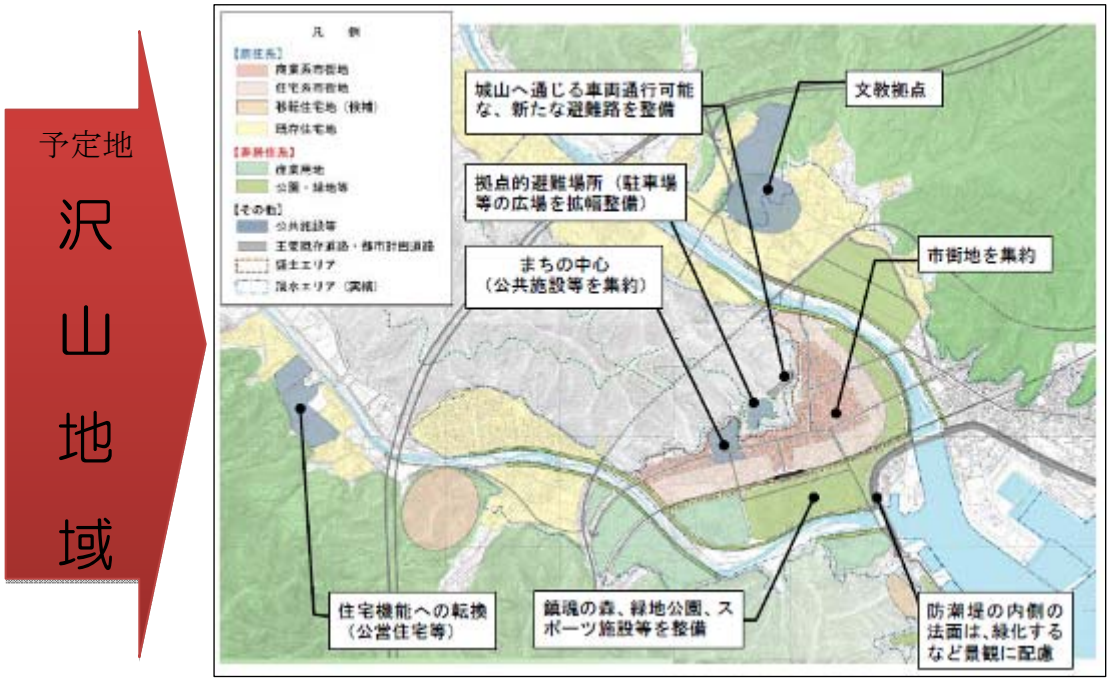
【学校の再建計画】

○安全性　…津波浸水区域外であり安全であること。

○利便性　…アクセスが容易であること。（コンパクトなまちづくり）

○迅速性　…早期に建設できること。

○面積確保　…校舎と運動場の面積が確保できること。



（※図：津波復興基本計画より抜粋）

市街地再生や学校の再建に向けてまだまだやるべきことは山積みです。

しかし、大槌町は震災によって多くの役場職員がお亡くなりになられたため、復興業務を支えるために、これからも自治体職員の継続的な派遣が必要とされています。

私たち派遣職員は、それぞれおよそ１年間で任期を終えるため、復興半ばで被災地を離れることになりますが、一日も早い復興を目指して、残りの派遣期間も精いっぱい努めようと思います。

市長手記
箕面市長　　倉　田　哲　郎

初動～市役所の裏側で

３月１１日の１４時４６分、箕面市内で車のなかにいた僕は、地震にはまったく気づきませんでした。１６時頃に市役所に戻ったら、職員がテレビに釘付けになっていて「大変なことになっている」と。

消防本部には緊急消防援助隊の出動要請が届き、当日、出勤していた消防職員は帰宅することなく、その日のうちに、いわば着のみ着のままで東北へ派遣されました。

「これは大変なことになった。」と思いつつも、なにぶん遠い東北の地。消防を送ることのほかに、大阪の小さな市役所ができることってなんだろう・・・と悩みながら、１１日の晩遅くまでテレビとインターネットで情報収集を続けたのをよく覚えています。

以降、２人の副市長と市長政策室長と常に相談をしながら、「とにかく動けることをやろう」との合言葉のもとに、混沌としたなかで後方支援をスタートさせたというのが当時の実情でした。

３月１１日の晩、Twitter などに次々と流れる情報を見ていると、情けないことに、当日の晩には早くも都心部で「義捐金詐欺」が発生しているとの話が。誰もが感じる「支援したい」という気持ちにつけこむ許しがたい行為。それなのに、有効に防ぐ方法がない・・・すぐに「“市役所”という公的でわかりやすい看板の使いどころだ」と思い至り、翌日から「箕面市役所」という名称を全面に出して義捐金を募ることにしました。

また、「いずれ絶対に自治体としての職員派遣が必要になる。“鉄は熱いうちに打て”だ。」と感じ、「発災直後で誰もが“なんとかしなきゃ”と感じている今のうちに、派遣志願の職員を募ってほしい」と指示を出し、週明けには４０～５０名の箕面市職員が名乗りをあげてくれました。これは、現在でも箕面市が職員派遣を継続できている大きな力になっています。

３月１２日は土曜日（市役所は閉庁日）でしたが、なんとか準備が整い、お昼頃から箕面市役所での義捐金受付を開始することができました。Twitter でそのことを流すと、すぐに「Twitter で見ました」と寄付にきてくださった方がいたのが印象的でした。この様子を見ながら「人の多いヴィソラで募ろう」と決め、翌１３日からは箕面マーケットパークヴィソラで義捐金受付を開始することに。

当時のログを見返してみると、Twitter で２２時半に流した「明日１３日（日）、箕面市役所が箕面マーケットパークヴィソラ街頭で義援金を募ります（９～１８時）／市が確実に日本赤十字に届けます」という告知が、その日の１時間後には１００以上リツイートされていました。たくさんの人の想いが、必死で同じ方に向かっていたのがよくわかります。

同じ１２日の土曜日には、僕にとって自治体の情けなさや、当時の混乱ぶりの象徴的な事象もありました。

緊急消防援助隊の箕面市第２陣を、翌日１３日に送り出すことが決まったのですが、初日に出発した第１陣が着のみ着のままでいったため、第２陣には先発隊の分も含めて現金を持たせることにしました。厳冬の東北地方、身の回りにある装備を持参したとはいえ、途中で必要なものを調達しなければならないかもしれません。また、１週間程度で帰還する予定ではあるけれど、延長もあるかもしれない、不慮の事態もあるかもしれない、と。

ちなみに消防本部というのは、いつも献身的すぎて、こういうときにも十分な予算を求めません。たしか１人あたり１～２万円程度が必要と求められたので、「最低１人１０万円は用意すること。第１陣・第２陣あわせて１５人以上の隊員だから２００万円は持たせるように。」と指示をしました。

ところが、市役所の金庫を開けてみたら、入っていたのがなんと３万円だけ。防犯のため現金はすべて金曜日の業務終了後に銀行に預けていたのです。そして、土・日はＡＴＭでしかお金をおろせないわけですが、市役所は通帳のみでカードをつくっていません。・・・つまり、市役所は週末に２００万円が用意できないという情けない状況だったのでした。

当初は、仕事上、携帯の連絡先を知っていた某銀行の役員さんに電話して、なんとかならないものか相談もしましたが、非常に手間がかかる様子だったので、僕も含めてその場にいた副市長ほか数人で、個人的に現金をおろして立て

替えることにしました。本来ならば公費を個人が立て替えるのは（市役所では）公金の取扱い上あまり望ましくない行為なのですが、背に腹はかえられず、焦る気持ちで銀行に走ったのも、当時の混乱ぶりを象徴していたような気がします。

３月１３日の日曜日には、僕も街頭で義捐金受付に立ちました。財布を逆さまにして全部いれてくださるような方が、少なからずいて、なんだか涙がでました。小さい子が、小さなお財布を空っぽにしてくれたのも目にしました。

夕方、撤収しようとした募金箱は、重すぎて一人では持ち上がりませんでした。たった１日で２００万円超。職員とともに涙ぐみながらの撤収作業でした。

また、義捐金だけでなく「救援物資をどこに持って行ったらいいか？」との問い合わせが多かったので、翌１４日からは救援物資も集めることにしました。箕面市社会福祉協議会が名乗りをあげてくれたので、ここで受け付けることに。各地域の地区福祉会の皆さんも物資受付に参加してくれましたし、継続的な体制を組む人手が足りなかったので、翌４月から市役所採用予定の内定者たち（当時、大学生）にも声をかけてなりふり構わず体制を組みました。

実は、救援物資については、募っていいものかどうか躊躇もありました。阪神淡路大震災のとき、全国から大量の古着が送られてきて、現場でさばけず混乱した経験がかなり尾を曳いていました。箕面市役所でも「闇雲に集めて送ったら被災地に迷惑がかかる。被災地で必要なものを確認してからでないと。」という意見もあり、議論になり、最終的には「とにかく絶対に必要なものに限って集めよう。分類して送ろう。」との結論に至り、３月１４日（月）から「タオル・毛布（新品に限定）」「消費期限内の食料品（粉ミルク含む）」に限定して救援物資受付を開始したという経緯でした。

結果として、救援物資の受付スタートは、大阪府（＋近隣府県？）では箕面市が最速でした。その後もしばらくは募集に踏み切った自治体は少なかったようで、遠く和歌山県から箕面市まで車をとばして救援物資を持参してくれた方や、群馬県から宅急便で箕面市に救援物資を送付してくれた方までいました。

週明けの３月１４日から１５日にかけて、僕たちを悩ませたのは、集めた救援物資を「どこに」送り届けるかという難題でした。目的地も定めず送り出す

わけにもいかない一方で、被災地の市町村とはまったく連絡がつきません。そこで、考えた挙句、被災地で活動している箕面市消防本部の職員に連絡をとったところ、「釜石市・大槌町にとにかく持ってきてほしい」と現地と話をつけてくれました。これが、現在まで続く箕面市の大槌町支援のスタートになりました。

そして、どうやって搬送しようか悩んでいたところ、箕面市が救援物資を集めているのを聞きつけた箕面市内の今井京阪神運輸（株）さんが被災地へのトラック運送を申し出てくださり、翌１６日に箕面市独自で救援物資の第一陣を送り出すことになりました。

被災地には焼け石に水かもしれない、でも、たとえ小さな雨粒でも、雨になったら焼け石だって冷える・・・そんな想いでトラック搬入を手伝い、３月１６日の１４時頃、箕面市社会福祉協議会にご寄付いただいた救援物資と、箕面市備蓄の食料・水・毛布などが１０トン車両満載で出発しました。結果として、救援物資の搬送も大阪府では最速だったようですが、これを実現したのは、いろんな人の善意の連鎖の賜物でした。

前１５日の深夜２３時頃には、震災初日に箕面市消防本部から送り出した緊急消防援助隊の第一陣が帰還しました。

消防本部で出迎えましたが、８名の隊員たちはみんな声がガラガラでした。消防車・救急車は、土ぼこりでドロドロでした。被災地の過酷さを垣間見たような気持ちになり、涙が出ました。とにかく無事でよかった、帰って休むようにとしか言えませんでした。

・・・こうして、震災後の数日が過ぎました。正直、混沌としたなかで、行き当たりばったりに手探り支援を続けた数日間でした。

前述のとおり（これは後からわかったことですが）箕面市は、義捐金や救援物資の受付・発送が大阪府内最速でした。たしかに、当時、他の市町村の支援の動きが多く見えてきたのは、震災の翌週半ばくらいからだったように感じます。これは、大変情けない話ですが震災が金曜日だったという不幸や、「拙速に動くと被災地に迷惑がかかるのでは」という阪神淡路大震災の経験が自制的に働いた結果、多くの関西の市町村で初動支援が遅れたケースがあったと僕は分析しています。

もちろん箕面市だって決して秩序だっておらず、不測の事態ばかりでした。

でも、この情けない経験をも自治体は直視し、決して忘れてはならないと思っています。自らの地域防災の備えに力を入れるのは当然ですが、支援についても初動を考えておかなければなりません。いつ、自分たちが支援される立場になるかわからないのですから。

その思いも込めて、初動の裏側も記録にとどめておきます。

“おわりに”に替えて

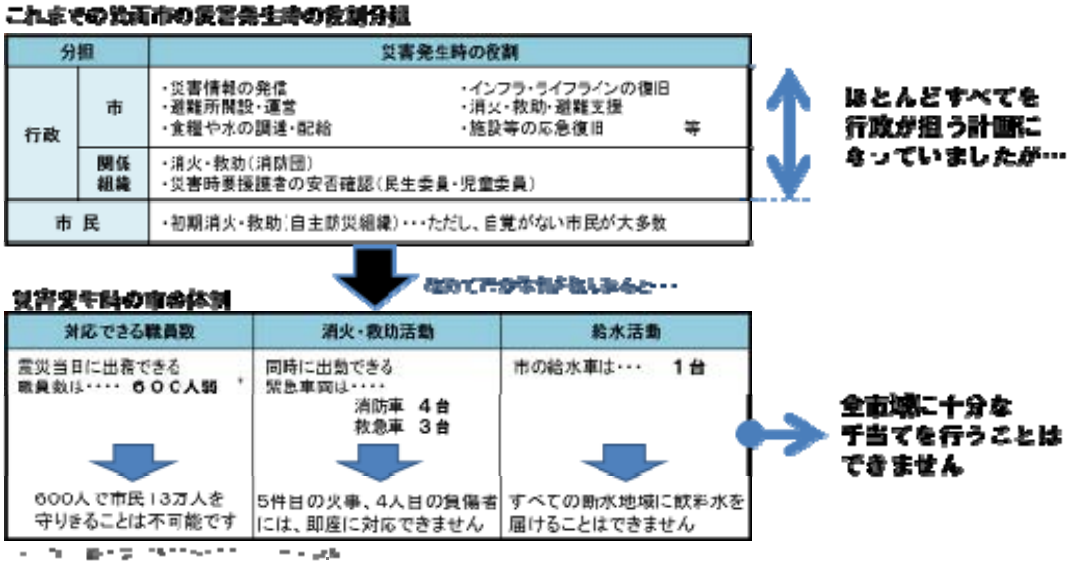
東日本大震災を教訓にした箕面市の防災改革

箕面市では、東日本大震災の教訓を本市の防災体制に活かすため、足掛け２年、防災改革を進めてきました。

その根幹にあるコンセプトは、「行政にできることは有限である」という事実を直視し、真に実効性ある防災体制を構築するというものです。これは、東日本大震災の教訓を本市の防災体制に活かすということにほかなりません。

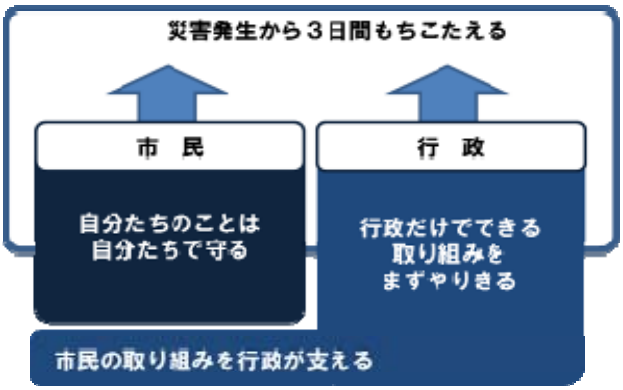
南海トラフに起因する大規模地震が起こった際、箕面市には、津波は到達しないと予測されています。だからといって、東日本の教訓を対岸の火事として記憶の片隅に片づけてしまっていいものでは決してありません。いつなんどき、行政までもが壊滅的な被害を受け、住民のために何もできないような大災害に襲われるかもしれないのです。

「どんな災害が起きても、市がみなさんを守ります」と空手形を発行し続けることが、結局は真の防災体制の構築を阻害し、いざというときに住民の困難を増幅することになるということを、私たち行政職員は真摯に受け止めなくてはなりません。



では、真に実効性ある防災体制とは何でしょうか？

箕面市では、行政だけで出来る取り組みはまず全力でやり切ると同時に、市民一人ひとりが「自分たちの身は自分たちで守る」という意識を身に着け、互いに協力し合って、外部から支援が入るまでの３日間を持ちこたえる体制を作ること、そして行政がその取り組みを全力で支えることと位置付けました。



この仕上がりの姿と現状には、非常に多くのギャップがありました。

これまでの箕面市の防災体制は、実態上、台風や豪雨によるごく局地的な風水害を想定したものであり、大規模地震については、配備体制（震度４で一定数の職員を配備、震度５弱以上で全職員を配備）が決められているだけで、「まず何をすべきか」と問われたら、だれも答えられないだろうというのが現状でした。

また、市民の皆さんも同じようなもので、いざとなれば市がなんでもしてくれると信じ、「地震が来たら、避難所に行けばなんとかしてもらえる」と思い、家庭での備えはしていないという方がほとんどでした。この責任は市にあります。生き延びるために、市民一人ひとりが何をすべきか、各家庭では何が必要か、きちんとお知らせをしてこなかったのですから。

箕面市の人口は１３万人、それに対して最大避難者数想定は２万人、備蓄食料は２万食。この数字を聞いただけで、「避難所に行けばなんとかしてもらえる」ということ自体があり得ないと誰にでもわかります。

地区防災委員会の設立

今回の防災改革において、最も重要なファクターとなったのは、小学校区ごとの住民組織「地区防災委員会」です。

大規模地震が発生したら、避難者や地域住民を組織して、避難所の自主運営や在宅被災者の生活支援にあたる組織で、平常時は、地域で活動されている各種団体や、自治会長などで情報共有し、全市一斉総合防災訓練に参加するなどの活動を行っていただいています。

地域団体の皆さんに、市の考え方をお話しさせていただいたのが平成２３年の年末ごろから。それから半年、２４年６月の萱野小学校区を皮切りに、その後数か月のうちに彩都小学校区を除く全１３校区で地区防災委員会が設立されました。（彩都小校区においては、まだ街が新しすぎてＰＴＡ以外の団体がなく、現時点で委員会の設立に至っていません。）

設立後、タイトなスケジュールの中、市が策定した「基本の避難所運営マニュアル」を基に、各地区防災委員会の活動拠点となる避難所ごとの物理的条件に合わせた部屋割りの決定、自治会における安否確認のしくみ作りなどにご尽力いただき、本年１月１７日、本市初の全市一斉総合防災訓練においては、全避難所（彩都小除く）において地区防災員会の役員が参集しての避難所開設訓練、自治会の６７％が参加しての安否確認訓練などを実施していただきました。

最初に各種団体にお声掛けを始めたときには、「防災は市の仕事ではないのか」「市の怠慢だ」というお声もたくさんいただきました。それでも、私たち行

政は、空手形を発行して皆さんを苦しめることはできません、一緒に災害に強い箕面を作ってくださいと懸命に訴え続け、徐々にご理解をいただいてきました。そして、たった１年で、実際に自治会での安否確認、全避難所の地域住民による開設訓練が行われたことは、東日本大震災後に高まった防災意識だけでなく、日ごろから積み上げられてきた地域活動と、それによって培われた地域の絆の賜物に他なりません。

もちろん、このような地域のご尽力に対し、行政として最大限のご支援をさせていただくことも私たちの責務です。主にその校区に居住する市職員を３人ずつ、「地区防災スタッフ」として任命し、地区防災委員会の一員として平常時から地区防災委員会の活動に参加し、災害時には、市災害対策本部とのパイプ役として避難所開設から運営まで地域で動く要員を確保しました。そして、各校区で毎夜のように開催されるすべての会議に、防災担当職員ともども出席し、ご説明などに走り回ってきました。

本市初めての全市一斉総合防災訓練を実施できたと言っても、これは今、まさに、スタート地点に立ったに過ぎないと認識しています。地域の皆さんのお力と、行政の精一杯の下支えとを礎にして、ようやく動き出したこの地域防災の流れを滞らせることなく、今後、市民の皆さんの日常生活に当たり前のように根付くまで続けていくことが非常に重要なことだと考えています。

行政だけできることはまずやりきる

「行政にできることは有限である」とは言え、市民の皆さんにさまざまな努力をお願いするからには、それに見合う、いやそれ以上の努力が行政に求められることは言うまでもありません。

市では、「防災改革の基本方針」においてお約束をしたとおり、「行政だけで出来ることはまずやりきる」ということに全力を注ぎました。

「行政だけでできること」の代表は、避難所の機能強化です。

しかしながら、機能強化の前に避難所の再編が必要でした。

防災改革に着手する前の指定避難所は４１カ所ありました。

しかし、そのうち１カ所（萱野北小学校）は土石流の危険区域内にありました。大規模地震の後には、少量の雨でも土砂災害の危険が急速に高まることすら想定されていなかったのです。

また、夜間・休日に地震が起きた場合に、避難所を開設する職員を指名していたのは４１カ所中２９カ所にとどまり、それ以外の施設では、避難者が来ても避難所は施錠されているという状況が放置されていました。開設だけでなく、その後の運営についても、市災害対策本部で行うこととしていましたが、その人員は圧倒的に不足しており、実際には４１カ所の避難所を運営することは不可能と言わざるを得ない状態だったのです。

このことから、避難所を１９カ所に統合した上で、自主運営を担う地区防災委員会の拠点となる「最初に開設する避難所」１４カ所（主に小学校。萱野北小校区については第二中学校）と、避難者がオーバーフローした場合に「拡張して開設する避難所」５カ所（第二中学校以外の中学校）に再編しました。

そして、食糧備蓄を２万人の３日分に大幅増強するとともに、すべての避難所の貯水槽を耐震タイプのものに更新し、２万人以上の３日間の飲料水を確保しました。また、嵩張る毛布ではなくアルミの保温シートを２万人分、そのほか、発電機、投光器、マンホールトイレなど、生活に必要な備蓄品を全避難所に備蓄することにしました。

また、隣近所での安否確認と初期消火・救助活動をお願いするために、必要な資機材を身近な公園などに備蓄する「地域防災ステーション」の整備についても、国の補助金を確保して来年度から具体化していく予定です。

併せて、市（行政）の大規模地震時の防災体制についても、大きく見直しを行っています。

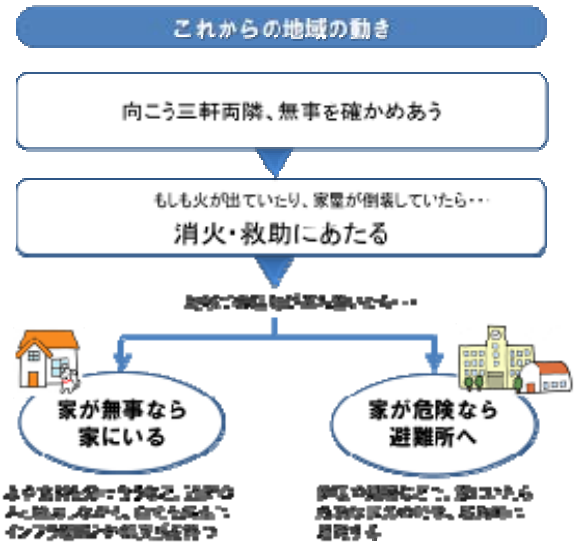
配備体制の見直し、全施設の初動体制の確保、地震時業務継続計画の策定による「いつ何をすべきか」の共有、それに基づく実働マニュアルの策定による「何をどうすべきか」の共有。それらを防災担当職員数人だけでなく、すべての部局室の多数の職員を巻き込んで考え、作り上げ、定期的な訓練によって検証と見直しを繰り返す体制を作りました。

今後、この体制を維持し、常に“考え続け”、“機能し続ける”防災体制の継続をめざしています。

市民一人ひとりの意識の転換

防災改革に着手してすぐに始めた、市民の皆さんに対しての周知啓発の一つに、「必要がなければ避難所に行かない」というコンセプトがあります。

これまで箕面市は、発災直後に市民が取るべき行動について体系立てて説明してきていませんでした。そのため、市民の多くは、「揺れがおさまったら、余震も怖いし、停電や断水も起きるので、避難所に避難するのだろう」と思っていたのです。



みんなが我先に避難所に逃げてしまったら、初期消火や倒壊家屋からの救助を誰がするのか？　高齢者や障害者などの支援を誰がするのか？　そもそも１３万人が入りきる避難所が存在するのか？　などの疑問は、誰もが見ないふりをしてきたとも言えます。

そこで、市では改めて、「隣近所で安否を確認し合う」、その結果、消火や救助が必要だったら、「住民自らが消火・救助にあたる」、それらの活動が落ち着いたらそこで初めて、改めて自分の家の状況により、「家が無事なら家にいる」「家が危険なら避難所へ」という、地域での行動をお示ししました。

もちろん、インフラや物流が途絶した状況で「家にいる」ためには、それなりの備えが必要ですから、併せて「自治会に入る（平常時から顔の見える関係づくり）」、「３日分の食糧・飲料水の備蓄」、「家の耐震化（まずは耐震診断を受ける）」を呼びかけました。

これに対し、市民の皆さんの反応は様々でしたが、わざわざ電話をかけてお叱りをいただいたのは、次の２つのパターンが多かったです。

「避難所に来るなというのか！私は断固として避難所に行くぞ！」とお怒りの方。避難所はそんなに良いところでしょうか？　避難所には、最低限、命を落とさないための食糧、水、保温シートなどを備蓄しますが、暑さ寒さは耐え難く、知らない人と隣り合うように長時間を過ごし、衛生状態も急速に悪化、感染症の危険は通常の何倍にも高まります。同じ停電・断水の状況であっても、家族水入らず家にいられるに越したことはありません。なるべく家にいられるように備えることは、自分と家族のためなのです。

「自治会に入らない人間は死ねと言うのか！」と、これもまたご立腹の方。

市は、「助けられるのに助けない」のではありません。「助けたくても助けられない」のです。自治会に入ることによって、日ごろから近所の人と気にかけ合う関係を築き、その関係は災害時にも機能するのです。誰とも顔を合わせず地域から孤立して生活していれば、災害時にもし救助が必要な状況になっていても気づかれにくく、発見が早ければ助かったはずの命を落としかねません。

このようなお声の一つ一つに電話でご説明しながら感じたことは、これと同じことを思いながらも、わざわざ電話をかけてこられない方が多くいらっしゃるだろうということ。

私たち行政は、これまで説明が足りていなかったことを反省し、「なぜそれが必要か」「それが何の役に立つのか」「どうしてそうしなければならないのか」ということを丁寧に、繰り返し、説明を続けていかなくてはなりません。

市の広報紙「もみじだより」で毎月、防災に関する特集シリーズ「命のパスポート」の連載を開始してから、この３月号で２１回を迎えました。啓発は継続がすべてです。飽きず、倦まず、大人も子どもも「知ってるよこんなこと。何を当たり前のこと書いてるの？」と言うくらい、日常生活に根付くまで続けていきたいと思います。

さいごに

ここで、箕面市の防災改革のすべてを書ききることはできません。書ききれなかったことはまだまだたくさんあります。それだけたくさんのことを見直し、作り直してきました。

これら一つ一つ、どれを取っても、東日本大震災の教訓に根差しています。

悲惨な被害状況を目の当たりにし、支援に行った本市職員の話を聞き、当時、彼の地で防災対策に当たった自治体職員の体験を聞いて、それらの一つも無駄にはしまいと心に決め、真摯に対峙してきたつもりです。

東日本大震災から２年。この３月を以て、箕面市の防災改革は一定の成果を得て、急変期を終えたところです。

しかしながら、今はまだ、スタートラインに立ったところにすぎません。

今生きている私たちだけではなく、子や孫、そのまた未来の世代にまで、真

に災害に強い地域防災体制を引き継ぎ、未曽有の災害に大阪が、関西が、日本中が喘ぐ事態が発生したときにも、「なぜ箕面市はあんなに人的被害が少ないのか？」と首を傾げられるようなまちでありたい。そう願ってやみません。

平成２５年(2013 年) 3 月
箕面市危機管理監　　桜井　ゆかり

東日本大震災 被災地支援職員の記録集

平成２５年３月発行

編集　箕面市総務部市民安全政策課